

三三 松平春嶽公ヨリ島津三郎公へ

国事同意見ノ返書

(包紙ウツ書) 島津三郎様 松平春嶽

貴酬

「メト朱封」ハ重様
「封紙ウツ書」
「封紙ウツ書」
「貴酬」
「メト朱封」ハ重様

一昨夕は貴書忝致披覧候、如論暑氣相増候処、弥御堅勝珍重存候、陳は先般は初而得面晤、御賢慮之趣も承之、乍憚御同意ニ御座候、就夫段々之御挨拶殊ニ御赤心充分御吐露にて、委纏御教示忝感荷之至ニ而候、御書中之巻説は兎も角も素実ニ傍觀之存念ニは決而無御座候間、御安慮可被下候、熱氣強く平臥中、不能委纏候、貴酬、早々、不一、

六月廿五日

春嶽

三郎様

二仲、御端文忝、尚又御自愛專一奉存候、佳品御投与忝此品乍飽輕致進上候、早々、以上

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一〇六号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一八糎 包紙原寸 縦 二五糎
横八〇・三糎 横三三・三糎

三三 大原勅使ヨリ近衛関白(?)へノ对幕
及薩長意見

二二通

二四三ノ一

幕府軽蔑

輕蔑是カ幕へ諂ふ心ト存候、今争テ幕へヘツラウハ、必我ヲ大事ニシテ、国難を憂ルト云者ニテハ無之哉、薩ノ方余程優リ可感事ニ候、能々御勘考可被遊候、御威光不相立

今幕ノ御威光ナト云場ニテ無之、先朝威を奉立テ、後ハ幕威勿論立ネハ朱点之ノ様可成行、亦可恐候得共呉々只々幕へ可申事ニテハ無之事ニ候、

將軍御職

素より之儀ニ候得共、此事カ出来ヌ様ニナリタル故ニ今

日ニ相成候、後の事より只今之所置勘要ニ候、

上洛

此事余り実過候テ出来ヌコト、出来テモ実ニ詮ナク候、

已ニ一ノ御策を扣へ、三番目ヲ主張可談ト被仰下候程之

御儀ニ候、全体国是ノ論ハ幕にて致、国是を相立候而、

越上京言上可有之筋ト存候、則御委任ノ政事故ニ、国是

ノ論儀千度致、国是を定言上カ当然之理ニ候、其上悪シ

ケレハ御好ニ可被遊勿論ニ候、若国是ノ論儀いたし候事

ナレハ、大老後見共ニ御請候ハ、直ニ上京ニテ、於

朝廷議論ニテ可被定御事ニ候、左様ニハ参り難クハ議論

ハ江戸ニ而いたし、治定を言上、其上不当モ候ハ、御斟

酌御遠慮等無之被仰出候カ御当然ト存候、

文書原寸 縦一七・二釐 横五一・九釐

二四三ノ二

愚論

長州ハ非常処置無之、至今日猶定法を守、其上諂諛之心

離不申ト相考候、薩ハ実ニ天下を憂ル心可感事、勿論拳

三国御奉公相違無之候、

熟考

此趣意尤之事ニ候得共、是ハ治世之事ニ付、今日幕府之

弊政成行ケ様次第ノ処江、ケ様ノ事を申居候ハ天下を憂

る心ノ無ト申者ト存候間、此辺ハ能々御勘可被遊事ト存

候、

列藩并

此儀ハ已ニ殿方ニモ其御心有之、アレカラモケ様々々是

カラモケ様々々ト云テキタラ、コマツタ者ト御噂モ承リ

候事ニ候、是ハ御所ノ御受方ノ御所置ニ有之候事ニて候

能々御勘考ノ御場所ニ候、

自己了簡

若自了簡を申候ハ、捨テ御仕舞にて御宜事ト存候、

自假不当テモ、御取合ナケネハナラント申事有間敷、是

ハ長ノ文章ツラニテ申過、実ニ薄ト云モノト存候、

可奉惑、

惑ハヌ様ニ可被遊候、

神州之御体

是カ屹度神州之体トハ難申、尤鎌倉以来不得止御事、併
今日ニ至り幕ノ弊政天下為乱する時節ニ成テモ猶其法を
守り、長州ノ如ク申候ハ、公武ノ間ニ立入、天下太平ノ
周旋ノ心得ニハ違候哉、勿論自分ハ老中へ申込、表向立
入タル故ニケ様ニ候得共宜ト云ハ、外を禦ク心ニ候、左
候得ハ、薩ハ直ニ御所へ出候故、如何ト云ソ計ノ申分ニ
候、

文書原寸 縦二六・七種 横四〇・七種

三四 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

勅使登城ノ件

(裏ニアリ)
一原ノ

植松与右衛門」

以書翰被示候儀承候、如御示御手狭之辺ハ御尤ニ存候へ
とも、被申越候御旨と申候程之儀ニテ、屹度廉立候事ニ
ても無之候故、致登城申述候へハ、却て表立而如何哉ニ
も存候、尤御馳走ハ御手狭之事ハ御尤ニ存候へとも、御
趣意柄御内々申入、又御所存等も承り、御熟談可申入と
の御事ニ候間、表立登城ニテハ被 仰渡候事ニも相立可
申哉ニ存候、迹御かへし、

文書原寸 縦一八・六種 横七・四種

三五 久光公ヨリ近衛忠熙忠房両卿へ書翰草案

関白辞職ノ件

久光公ヨリ大原重徳卿へ書翰草案

久光公官位推任叙ノ件 以上二件表裏一枚書

二四五ノ一

先月廿七日之尊書、難有拝見仕候、扱御用之儀御座候間、
御家臣進藤式部権少輔被差下候ニ付、御意之趣委細奉承

知候、殊ニ何寄^{結構}之御品々拝領被仰付、誠以恐入難有仕合

奉存候、且家来藤井良節下向仕候ニ付而は、種々御懇

命被仰下、何寄之御品拝領被仰付、重疊難有仕合奉存候、

猶又今般結構被為仰蒙候為御祝儀、鈍薄之品進上仕候処、

御拶揆被仰下、恐入難有承知仕候、右御礼申上度、如此

御座候、

右関白様

左大将様

極密御書添之趣、委細承知仕候、

朝廷姦佞御退黜之御一条、実以

皇国之御為御英断被為在候御事、於小臣恐悅至極奉存候、

且関白様御辞職之御一条も、細々被仰下奉承知候、何分

当地之情実、書面人伝等ニ而は難申解訳合有之、一日も

早く上京、御直ニ言上仕度件々御座候間、関白様御独

断を以勅使ニ無構、早々上洛仕候様被仰下度奉願候ニ付、

尊公様よりも右之趣被仰上被下度、伏而奉希上候、先は

右旁申上度候、

尚々、勅使之御義も何卒早目御帰京有之様被仰下度

御事と奉存候、此子細も書面ニ而は解かたき事而已

心配之程、乍恐御遠察被下度奉存候、長門守江被仰

達候趣、御当然之御事と奉存候、併御書中ニ伏見一

条之人数も御赦免之儀は、乍恐心底疑惑仕罷在候、

何卒此一条は御取止メ被成下度、奉伏願候、

二四五ノ二

(封紙ウツ書)

「左衛門督様

御請

島津三郎

緘

〔朱〕
「戊年」

容易訳柄ニ而、逆も御請難申上子細は、只今箇様之

朝命被為在候而も、於幕府早速遵奉仕候模様ニ無御座、

却而

朝廷之御為不可然、次ニは、関白殿下、尊卿等ニ至る迄

大ニ御不都合御到来も難計、別而恐入奉存候、乍併是非共微功

御賞譽之御事御座候ハ、何卒修理大夫江正四位下中將昇進之処、偏ニ奉仰願候、是等之趣深御汲取、尊卿迄ニ而先御扣置被下候様、幾重ニも奉願候、尚委曲一蔵より御聞取被下度奉存候、先は御請迄早々如此御座候、以上、

八月六日

再白、今般私周旋之義、臣下之当然功勞

御賞譽杯と申御事、至極恐入奉存候、思召之御程と

委細奉拝承候、乍併本文ニも申上候通之事情御座候得は、逆も御請難申上御座候、右之趣意よろしく被仰上被下度奉伏願候、毎度乱毫御海容奉願候、以上

文書原寸 縦一七・九糎 横六〇・六糎

二 稟 久光公ヨリ松平春嶽公へノ書翰草案

国事ヲ論シテ春岳公ノ登城ヲ促ス

(端裏朱書)

「壬戌六月」

(端裏書)

「越前江遣候書翰草稿」

一 翰呈上仕候、暑氣相増候処、弥御安康被成御座恐悅奉

存候、併近比致承知候得は少々御所勞ニ而、御登(城カ)無

之由何様之御容体ニ候哉深く御案申上候、然は先度は亡

兄御懇意之訳ヲ以御面会被成下存慮申上候処、種々御賢

慮候程も致承知別而難有奉存候、其節も申上候通当時不

容易時節、譬

勅命無之とても、御家門之御家筋

徳川之御家と興亡ヲ共に可被成義は勿論之御事、殊ニ分

而

御依頼之

勅諭も被為在候御事御座候得は、天下之大政万端御尽力有之度御事と奉存候、然処巷説伝承いたし候得は、漸天下之大事ヲ御傍觀之筋ニ被伺申候、

尊慮決而右通之御事ニは無之とは奉存候得共、愚意懸念

候余りより不得止事申上候、当時諸国之人心漸乖戻之模

様ニ而、尊公御出職之義ヲ偏ニ奉渴望哉ニ相聞得候処、

若も右様御傍觀有之候而は以之外之義、第一 公刃之御

為別而不可然御事と奉存候、御家臣之内種々所存之訳も

有之哉ニ伝承いたし候得共、是は御家計之御事ニ而、天

下之御為ニは不相成義と奉存候、且閣老杯之処無御抛御

訳合も有之筈と奉存候得共、尊公之御進退ニ而天下中

之動靜ニ可致関係欵と奉存候間、何卒是等之処能々御勘

考十分御尺力之処偏ニ奉伏願候、扱は此品誠以輕微之至

御座候得共、伺御安否候驗迄奉備高覽候、先は右旁申上

度如此御座候、以上、

六月

尚々尊体御保養之処第一奉存候、不勘弁之存慮不文

乱筆不顧多筆申上候、是も天下之御為と奉存候、献

荷之徴志と御海容奉願候、以上、

松春嶽様

島津三郎

文書原寸 縦一七・一糶 横九一糶

三〇 老中ヨリ武伝へノ上申

二通

將軍上洛ノ件等

(包紙ウツ書未)
「壬戌六月」

二四七ノ一

一越前・会津等之義ハ、御発足以前申来候通之儀ニて替

候義不申来候、

一大和守ハ役ハ其儀にて、京師等之御用向ハ各被免由申

来候、

一紀伊守ハ役被免由申来候、

一一橋之義ハ、また何とも不申来候、

右尤御存とも候へとも申入候、

文書原寸 縦一七・五糶 横二七糶

二四七ノ二

一筆令啓達候、近年之内御上洛可被遊と被 仰出候、尤

御頃合之儀は追而可被 仰進候得共、先此段達

叡聞候様伝奏衆江可被申入候、恐々謹言、

六月朔日

老中四人連名

武伝両卿宛

文書原寸

縦一八・三種

包紙原寸

縦三三・四種

横 二二種

横三三・五種

二只 正月三月両度春日神鏡墜落ノ件

兵革ノ兆云々

一当正月二日南都

春日社御神体之御鏡落三ツニ割有之、其段

奏聞ニ相成、以

勅使一七日之御神案被

仰付候由ニ御座候処、能々御取調御座候処、右は

御内陣四之御座之

御鏡ニ而

天照皇太神宮御神鏡之由、則裏ニ 御銘有之、センメ

イと欵申候而、御直ニ被遊候得は、元之通 御直り被

遊候御事御座候得共、何様ニ被仰付候而茂 御直り無

之、然処

古御鏡ニ御同鏡有之、即是を御掛替被為在候由、

一三月三日

春日真之 御鏡被為落、是は御疵は少し茂無之候得共、

御本座天児屋根命ニ而藤家第一之御事ニ候得は、

主上を奉始藤家深御慎被為在御事之由、不容易御事御

座候趣承得申候、

一吉田家江 神易占候様

勅命有之、謹而被相伺候処、当正月之 御鏡は兵革と

相願將軍家之替之事、

当三月之 御鏡は藤家長者ニ崇り有と申事之由九条殿下

一其後亦御後之一座

神鏡一ツ落候得共、是は極内々ニ而脇方江は相咄候事

不出来、不容易御事之由、此儀洩し候儀急度不相成、

夫故何茂不相分候由御座候、おのつから

神易茂窺ニ相成申候半、

一当春以来南都市中江狼夜中ニ出候而 春日之神鹿多喰

殺候付、獵師等江達シニ相成、獵方被仰付候由之処、

大狼二疋打殺、則京地江も持出し御届相成候由、残り

居候狼猶亦獵方敵重ニ手相付、夜入候ハ、市中徘徊

いたし候者茂無之由、前代未聞之變事ニ御座候由、

一其後春日神木之杉ニ素麴之こたく成白き綿ニ似寄候も

の杉葉ニかゝり、実々不思議成事と申居候処、其杉悉

ク枯赤葉ニ相成候由、則

奏聞ニ相成、以

勅使一七日之御祈禱被仰付候処、七日之内ニ追々青葉

ニ立返り、元之通之木と相成候由承得申候、

右之通御座候間此段申上候、以上、

戌六月

文書原寸 縦一七・八糎 横一〇八・二糎

三覽 酒井若狭守帰府、酒井雅楽頭相国寺借用

ノ件

薩州借用ニ付相国寺謝絶ノ事

一酒井若狭守(忠憲)様江戸より御召ニ而、去ル九日御参府之筈

御座候処、御病氣ニ而延引、尤実之御病氣ニ而痔疾之

御煩ニ而、歩行等茂別而御不自由有之候由、

一右御同人様内実は御帰府相成候而は、是迄京地多年首

尾能相勤候ニ、彼是不都合之次第可及事哉茂難被計と、

極内

近衛(忠熙)様江御内願、京都江此假御隠居被仰付度、尤御駕

籠ニ茂御乗付不相成と之趣を以、

(徳川家定参)天璋院様江御直書を以御内願被下候様、内密度々御願

有之候由御座候得共、此節柄之儀彼是程能御取合有之、

御頓着は無御座哉ニ内々承得申候、

一四月廿二日夜、若狭守様御屋敷内江何方之者とも不相

分胡乱成者、追々入来及騒動候由、段々怪我人等茂有

之候由風説仕候、

此儀右以前ニ、若狭守様寵愛之爲齋を、狐喰殺候を

見掛、其段申上候処、狐狩いたし候様との事ニ而、

狐一疋打殺候由、此狐之恨ニ而、右夜中追々多人數

屋敷内江入込、騒動いたし候由、夜明時分より何方

より逃去候哉も全不相分、門々ニは取締人も有之候

得共、一向見当不申、狐仇と申事之由、風聞仕候、

一酒井雅楽頭様去ル十日御上京、前日相国寺中御頼相成

候得共、

薩州様江御用ニ付御貸渡申上、外様江は御貸渡不相成

旨申入候由御座候処、三四寺ニ而宜候間、何卒貸具候

様達而頼ニ相成候由、

薩州様は半方ニ而相済居候ハ、其半方ニ而宜、外之

寺院ニ而は別而不都合有之候趣を以、段々及相談候得

共御所江御届不申上候而は、何分之儀難申旨、役者よ

り相達候処、左候得は、早々

御所江伺具候様との事御座候付、御着当日

御所之取次江役者参り、其段相伺候処、其儀不相成、

薩州様は格別成御用ニ而、多人数被召置候儀ニ候旨承

知いたし、其段姫路役人江相達候処、無致方諸所寺院

相頼御着ニ差掛候、

本陣

本満寺

下宿

阿弥陀寺

陀陀寺

十念寺

右四ヶ寺借入相成、人数割付置候処、十念寺之儀は徳

大寺様御菩提所ニ而差支候付、及断候様ニ達シ相成、

前文三ヶ寺ニ都而之人数入込、大ニ混雜いたし候由噂

ニ御座候、

右之通申上候、以上、

戌六月

文書原寸 縦一七・八糎 横一一三・四糎

三言 水藩下野隼次郎宮本辰之介ヨリ大原勅使

へノ建言

公武合体ニ関スル各種ノ要望

〔端裏朱書〕
「壬戌六月水府建白」

謹而

大原公閣下ニ奉上言候、外虜之義に付而ハかしこくも

聖天子御神算御英断被為在、

神州之為深く奉恤

叡慮、伊勢・石清水等の神宮へ

御祈誓被為籠候御事、兼而奉伺誠以難有奉存候、且幕府

江も度々

勅諭被為在候処、於幕府夷狄跋扈以来、有司共恐怖之余

幼將軍を扶ミ奸曲を恣ニ致シ、乍恐奉違背

叡慮、和親交易指許シ候而已ならず、種々不容易箇条迄、

無厭之求ニ応シ、尊攘之義を守り、忠憤憂国之人をハ上

下貴賤と無之、讒誣排陥致シ、暴政慘刑を究候段申上候

迄も無之、逐一御洞見被為在候御義と奉存候、右様奸有

司共、大義を忘れ国体を辱メ、天下之政道を乱り夷人を

晒近致シ、古今未曾有之大恥を招キ、大害を醸シ候罪科

天譴不可道、実ニ神人同憤之時と罷成候故、既ニ桜田坂

下両度之斬奸ニも至リ右両度之義ハ拝謁も相成候ハ、委細ニ申上度奉存候斬夷も度々

出来候様罷成、征夷府の号令殆不可行之姿ニ陥り、遂ニ

ハ公武御合体ニ事寄セ、奉欺

天朝

和宮様御下向を奉願候儀、恐入候次第ニ奉存候、畢竟如

此之始末ニ御座候故、九州有志も憂憤ニ不堪、近畿ニ聚

会之拳動も有之候義と奉存候、

幸ニ

聖天子天下之形勢御明察被遊、長薩二藩之謀議迄御斟酌

被為在、公武御合体之御実功を被為責、

神州回復之基を御開被遊候、

叡慮赫々、勅諭明々に付、自然於幕府も奉遵奉候様罷成

当節ニ至り候而ハ、閣老も黜陟有之、越前々中将、会津

少將大政を預り聞、寛永已前之復古之改革を被建、御上

洛之義も被仰出候へハ、真ニ御合体之御偉業、中興之機

会到来と奉抑賀候釋カ、閣下御英明ニ而

叡慮を御賛襄被遊候御義、兼而奉承知候、且先年土浦之

藩故大久保要大坂ニ相詰罷在候節ニハ、閣下

神州之為非常之御決断ニ而、御微行被為在候義、薄々承知罷在候、其後の義ハ不奉承知候得共、長藩故吉田寅次(松陰)郎閣下ニ上書之草稿一見仕候而も、御英資奉景慕候、兎角非常之御方ハ小人奸士羅織之禍ニ羅り候時世ニ罷成候故、閣下も一旦御幽屏被遊候様ニも奉伺、苦心仕候処、此度ハ回天之時節到来、非常之御勅使を御勤被遊候段奉抑賀候、我々共卑賤之身を以て、天下之事彼是申上候ハ恐入候得共、報国之微衷片時も難黙止、且元教職又ハ監府をも相勤候身分ニ御座候間、困許有志諸生等の志願を引受、微行仕罷出候間、不敬之罪を不願愚存之趣、別紙ケ条書ニ仕り、奉洩貴覽候、此段御憐察被下置、御取舍被遊候ハ、難有仕合ニ奉存候、頓首百拜、

戊六月

水藩

下野隼次郎遠明

宮本辰之介信守

一此度公武御合体、中興之偉業を被為建候御義ニ御座候得は、將軍家速ニ御上洛被為在

叡慮を奉伺、諸侯之謀議をも御採用被遊、第一他日攘夷之御廟算を御決シ之上ニハ、武備務肅之功を御責メ被遊候様奉抑候、右ニ付而も京師御守護固ニ罷成候義、御急務ニ御座候間、大諸侯中ニ而人物御撰ミ被仰付候様仕度、山陵被為在候地も御守衛無之候而は不被為叶様奉存候、且海岸之大小名を始メとして、參勤之期を緩メ、武事訓練為致、近隣応援之義等頭長を立隊伍を組ミ、臨時指支無之様仕度奉存候海防論之義ニ付而ハ、兼而熟慮仕候ケ条も不少候へ共長(慶喜)扱又一橋刑部卿義ハ弊藩ニ而は申文ニ涉り候間不申上候、賢徳之聞へも有之候へハ、非常之節ハ副將軍も被仰付、付属も其人を扱上候而大樹公を輔佐致し候様被命、京師江も被為召候様仕度奉存候、是等ハ既ニ

叡慮も被為在候御義とハ奉存候へ共、無伏威奉申上候、右様非常之事被仰出候上にハ、是迄奸曲を働キ候罪魁(眞野)黄泉ニ帰シ候者にハ御座候得共井伊掃部頭、存生之者(信隆)にハ安藤對馬守・酒井若狹守・竹腰兵部少輔・水野土(正憲)

(忠告) 佐守等敵重典刑を正シ候様仕度奉存候、左候へハ正邪之跡明白ニ相成、天下之人心も悚然、御正道を奉仰候義と奉存候、兎角非常之事ハ姑息小人共之所忌憚ニ御座候得は、英雄の射を掣シ候義、油断不罷成候間、回天之機会ニ乗シ御上洛之義等、御運ニ無之様にと過慮仕候、

一 諸蛮江開港交易御許シ成来り候得は、俄ニ砲攘鎖國之令御下シ之儀ハ六ヶ敷御座候間、右号令御発シニ相成候時日迄之内ハ、是迄指許シ之条約中之事ニ而も、國体人心之居り合不宜候廉を以理解申論シ、御止メニ相成候様御仕向ケニ相成、兵庫・大坂等開港は勿論御断被遊、ミニストル等永住之場所ヲ御貸シ被成候義も御止メニ相成、耶蘇寺建立をも廢シ、登城を禁シ、閨老役宅ニ而応接をも見合せ、我有用の品ハ出し不申、彼か無益之物も不入様に、追々ニ夷狄を製シ候様仕度奉存候、夷輩元より利欲を本と致し、恥ヲ知り不申故、我勢之強く相成候を窺候得は、存之外ニ是迄之通り跳

果も仕り不申間敷、万一虚憊を以て兵威を示シ、宿志を遂にと致シ候節ハ、断然其変ニ応し、武事ヲ振ひ候外無御座候様奉存候、

一 開港出交易之論を唱へ候諸侯も有之様承知仕候処、右ハ鎖國論を狭小と存シ、遠洋迄も押渡り、交易も致シ武威を張候見込とハ奉存候得共、國体世態をも不顧ハ勿論、右様相成候節は、私曲之弊生シ候も難測、結り(詰り)不容易事引出シ候半と奉存候、昔時武威隆盛之世ニ而も不可然、別而封港鎖國之法を被建候は、卓識明訓と奉存候間、確乎不可動之定論ニ御座候間、仮令他年武備整候節たりとも、出交易之義ハ、決而不可用事と奉存候、

一 烈公義威義二公之遺志を被継、

尊王攘夷之事におひてハ、多年忠誠を被抽、度々建白も有之候処、不図も讒人之為ニ兩度迄冤罪を被蒙、志業も貫ぎ不申内ニ、不幸にして逝去被致候段、臣子之情悲嘆ニ沈ミ候仕合、只今迄も存生ニ御座候ハ、如何計欵満悦ニ存シ可申之処、扱々残念之至御憐察被下

置候ハ、難有奉存候、伏而冀くは積年之忠誠を御慰勞被遊候、

鳳詔ニ而も御下し罷成候ハ、死後之面目と奉存候、京師ニ於ても鷹司様・近衛様御慎解被為在、故三条内府様御墓所へハ御使ヒ被為在候段、誠ニ以奉抑喜候、隨而幕府ニ於ても尾張前中納言殿・一橋刑部殿・越前々中将慎解被仰出候而已ならず、中将・少將にハ幕政ニも携り候事ニ御座候処、烈公義ハ全ク大病ニ付無余儀御緩メに相成候計ニ而、真の慎解と申には無之相果候儀、片時も安し兼候次第ニ奉存候、依而前文御褒詞之義、偏ニ奉渴望候事ニ御座候、扱又当寡君ニ於ても、烈公之遺志を継述被致候存意ハ家来共江も被諭候得共、幼年より国難ニ懲り、殊ニ幕府有司之暴政を怖レ候故継述致候ハ、却而有司之意ニ悖り、烈公迄も奇禍を重ね候半との心配ニも可有之、彼是延引致候釣合ニ御座候、尤

天朝ハ益御盛ニ被為入、幕府も一新之姿ニ成行候へハ、

是迄と違ひ、一際継述可仕義と奉存候間、烈公御褒詞も蒙り候ハ、難有奉存候、愈忠勤可仕、且其節ハ烈公之遺志継述可仕旨、幕府よりも被仰出候ハ、水戸闔境之歎喜無此上奉存候、將又天下重大之事御施設被遊候折柄、弊藩之義申上候ハ恐入候得共、弊藩之儀ハ度々之厄難ニ罹り、忠誠義勇之輩も幕府之慘刑ニ而死罪ニ相成候者不少、又禁錮被致候者も有之、加之国難ニ付忠力を尽候者共之自殺致、或幽屏・入牢等被申付候者も多ク有之、扱々痛歎之至ニ奉存候死罪にハ安島帶刀・茅根伊予之介を始め桜田一条之者、禁錮にハ烈公信用被致、執政を相助候岡田信濃守・大場弥右衛門・武田修理を始め山岡喜八郎等其外ニ御座候へ共不申上候依而ハ岡田・大場・武田ハ寡君ニても被用候様仕度奉存候右様之者迄も冤魂忠志を慰メ候様罷成候ハ、君臣共安堵仕候義と奉存候、是迄ハ厄難打継候ニ付、家中党派も相分れ、兎角小人共勢を得候者多ク、君子ハ擯廢被致、是非紛々国政も治り兼候間、烈公江御褒詞ニても下り不申候は、家政回復之程難測、残念ニ奉存候間、汗顔之至ニ御座候得共、無扱此段奉申上候、

一 先年幕府及水戸江

勅諭御下ケ被遊候処、幕府之有司奉違背

叡慮、弊藩迄奇禍ニ罹リ候様奸謀を廻し候義故、弊藩
ニても廻達之議有之候処、被行不申様成行候儀奉忍入
候事ニ御座候、寡君義前々も申上候通、幕府ニ悖リ候
義心配被致、且小人共彼是正議を妨ケ候ニ付、空數月
日を送り候処、幕府有司之奸策ニ而終ニ

勅諭返納仕候様

天朝より被仰出候との事ニ罷成候ニ付、一家中返納仕
候方可然と申者、要路始メ多ク有之、亦返納仕候而ハ
不相濟義と忠諫讜議致候者も不少候得共、小人之為ニ
讒誣被致、國中頗ル不穩城中ニ而諫死仕候者も出来、
又領内之驛場江罷出居、万一

勅諭為御登ニ相成候節ハ、以死拒キ留候心得ニ而建白
も致候者も有之処、君相之間敬上之余、愈返納と一旦
決議ニ相成候ニ付、小人共勢ヲ得候而、返納を拒キ候
ものハ、君命ニ背不相濟者と傾陥致し、嚴重召捕之達

を出し候故、騒動ケ間敷相成候段、誠ニ不行届之仕合
慚愧之至ニ奉存候処、諫死之者も出来、旁返納延引致
居候内、愈御猶予之義被仰出、一統安堵仕候、一体
勅諭之義は重大之事ニ付、其節重役ニ而も 上京仕、
叡慮を奉伺御申訳不仕候而ハ不相濟場合ニ御座候処、
如何ニも多難中、国是も定り兼候位の次第ニ付、寡君
も心配のミ仕、本懐ニ背キ候段ハ不惡御憐察御寛免被
下置候様、於臣下偏ニ奉冀候、

右申上候通、弊藩多難ニ御座候間、長薩二藩之如く
上京仕、周旋仕候様之義ハ成兼候得とも、烈公之遺
志を継キ、忠勇敢為之士ハ數多有之候故、何時ニ而
も天下国家の為必死之力を致し候心懸ニ罷在候、扱
此度ハ長薩二藩の誠忠実ニ感銘仕候、弊藩ニ而も長
藩周布政之介杯江応接仕候人も御座候故、委細上京
周旋之廉も承知罷在候、三百諸侯之中二藩の如きハ
勤王之志拔群と奉存候、且此度閣下御下着ニ付而も、
政之介度々拜謁仕候由、弊藩ニ而も実ハ拜謁をも奉

願度罷在候得共、重キ

御勅使ニ被為在候得ハ、御平常トハ御相違被遊候間、

恐多く候間拜謁ハ強而不奉願、無拋一封之書指上候

事ニ御座候、以上、

水府兩公ニ而ハ

勅書返納之義、更々思召不被為在、全く井伊掃部頭、

安藤對馬守・酒井若狹守等邪氣甚しキニ恐れ、返納之

義而公江是非ノと御勸メ申上候而不相濟者共、江水

ニ五六人有之、横山甚左衛門・国友与五郎・桑原治兵

衛・太田誠左衛門・久木直次郎・笠井類之介、此者共

国家之大害、君公ヲ不義不明ニおとし入奉り候者共ニ

御座候、極蜜々々之趣を以て屹(密)と蔽重及御沙汰候様ニ

無御座候而ハ、とても水府之邪氣退キ兼候事、

勅返納幕府江納候筋合決而無之旨を以て、支候者ハ

命を捨、家を捨、父母妻子を捨、為天下国家被相尽候

儀、不便ニ思召被下置、相果候者ハ跡を立、囚れ居候

者ハ許候様蔽重御吹掛奉祈候事

但

斎藤留吉と申者ハ弥明申二月廿五日

勅書返納国元発度と聞、城中江相詰返納ニ相成候

而ハ、君公違勅ニ相成、決而不相濟旨執政部屋江

出陳、書取指指、腹十文字ニかき切て相果候、跡

立度候事、

公辺江烈公外夷一条数度建白被致候義、

天朝公辺之御為懐中、尚又逝去ニ趣候迄も日夜心痛被

致候義、義公之列ニも有之候間、御贈官奉願候事、

水府一体元より開国論ニは毛頭無御座候事、

冊子原寸 縦一四・四糎 横二〇・一糎 二〇枚

三 久光公江戸御到着御次第

(表題)

一 三郎様御出府付御次第

一戸塚 御立、神奈川

御休、諸所 御小休等被為

在、大仏前又は品川御本亭之間 御小休、御刻限御見
合高輪表御門御客間御駕籠台より

御入、

但御先立御側役、

一 御家老・大目付御客間江相詰、

一 御側御用人以下奥向人数御客間江罷出、

但御都合次第ニは

御休息所江可被為 召儀茂可有之候、

以上、

(朱)

一 高輪御殿御居間江

御着座

御熨斗

御茶

一 御都合次第ニは

御居間ニ御家老・大目付并御側御用人・御側役奥向人

數可被為 召儀茂可有之候、右畢而

御旅服之御伾御庭諸社江

御參詣御盛塩、
御神酒

一 高輪大奥江被為入、

障姫様

勝姫様

寧姫様江御対顔、御寄合、

御熨斗

御茶

御吸物御掛盃

御銚子

御肴

御銚子

御料理二汁
五菜

御引物

御引肴

以上、

文書原寸 縦一九・一糧 横八五・九糧

三三 大阪菱刈左之介ヨリ島津登小松帶刀へ

京撰ノ形勢別紙三通添 今別紙ナシ

〔端裏付箋〕
「壬戌七月三日 菱刈左之介ヨリ」

京都表并爰許當時之形勢風評等致聞合、御心得相成候儀
は時々可申出旨、御留守居付役勤永井清左衛門江相達置
候処、先達而外御用付同人上京之砌承得候形行、別紙三
通之通申出候間、差而御用見合相成候儀も無之候得共、
為御心得、別紙相添此段御内用を以申越候間、
三郎様被達

御内聽候儀は、何分も可被成御取計候、以上、

但御国元江も申越候、

戊七月三日

島津登殿

小松帶刀殿

文書原寸 縦一四・八種 横六七・三種

菱刈左之介
大坂より

三三 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

近衛忠熙卿関白辞任ノ件

〔包紙ウツ書②〕
「島津三郎とのへ」
極密啓

〔朱〕

七月五日認

〔メト印へ重覆〕

〔包紙ウツ書①〕
極密翰

〔朱〕

投火

兼而御歎願モ在之、右御歎願之通被聞食候、勅約モ頂載
被致候義、九月十月頃ニハ退職之義被願候儀、兼テ暫時
ト申義ハ、其元御承知之義故、呉々深々御含置之程、偏
ニ御頼被成度旨被命候、仍極密々申入置候事、

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一二〇ノ
一号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一八・六種 包紙原寸 縦三一・九種

横二七・一種

横四二・八種 二枚

三書 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

酒井若狭守掃府延引ノ件

「(包紙ウツ書)島津三郎とのへ 忠房

密々

(朱)

「成七月五日」

(朱)

十七日達ス

「(封紙ウツ書)投火く

島津三郎とのへ

極密翰

忠房

(緘ノ文字ト朱)緘(ハ重書)

緘

□

□

「

尚々当年ハ日照り続キ格別之暑氣、其地ハ如何哉、

御自愛專一ニ存候事、

大暑之節、弥勇健尚承度存候、抑幕府正論之次第追々伝

承安心候、先月廿三日閑白宣下無滞被為濟、畏々入安心

候、乍併廿三日前迄ハ、

朝議彼是ニテ、是ニハ困り入候事ニ候、若州出府モ申來、

先々安心ト存込居候処、日ヲ経レ共少しモ発足様子無之、

如何之事哉一向合点不行、色々ト探り候処、以手筋深歎

願仕、夫故歎ケ敷モ、

朝廷ヨリ御救ヒ之 御沙汰、関東江御達シニ相成候由伝

承、何共驚入候、中山・正親町三条辺へ尋問仕候処、尤

相違無之工合之返答、何共歎入驚入候事、全兩端之 叡

慮ニ相成、 勅使并其元出府之詮無之、嘸々其元立腹之

事ト、深々殿下忠房ニハ大ニ悲歎く痛心仕候事ナカラ、

閑白 宣下以前之事ニテ、閑白忠房ニハ少しモく不存、

何共心惡敷悲歎已ニ毎日打過候、何分早々出立之義、達

テく申來候様呉々存候、実々余リ之義、何共申条無之、

歎入候事ニ候、尤真実之 叡慮ニハ不有、是全心当リ之

邪物之業ト口惜存候、何分 御膝元ハ、表裏両舌多端、

是ニハ十分歎入候、唯々口惜事已ニ存候、関東ニハ追々

正論之衆出頭、深々安心く候、第一皇国之御為ト、深々

安堵仕候、岩倉ニハ先月末ヨリ引入候、何分表裏之衆多

而ハ、何事モ困り入候、若州御救辺之義ハ、大原へ中山

より文通ニテ心得ニ被申入候様子故、自然其元へ大原ヨ

リ咄合在之候節ニハ、当方ヨリモ、其元へ文通ニテ申越

候へ共、全閑白ニハ御承知無之故、甚御当惑被成候趣ニテ、荒々申来り候由、御返答ニ被及候様存候、尤巨細文面御洩し決而く御無用く候、実々歎息已ニ候、仍御咄申入置候、嗚々驚入之事ト察入候、先ハ右申入置度、例之拙乱書御覽分可給候也、

七月五日

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷一一〇ノ二号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一八・六種 包紙原寸 縦三一・九種
横 二二五・一種 横 四三種

三三 久光公ヨリ幕府へノ建言

公武合体、国是確立

〔（瑞真朱書）
「壬戌七月八日」〕

上書草稿

去ル寅年、亜米利（破損）統諸夷来船、種々願望申出候処、乍恐於 公辺
叡慮御伺ニ不被為及、条約御取究相成、終ニ

公武之御間、漸御隔意被為成、一統之人心も是が為ニ不穩趣伝承任、甚危念至極ニ御座候、申上迄も無御座三百年来 御代々様之御累恩ヲ奉蒙、且当時 御内縁も有之義ニ御座候得は、旁傍觀難任、殊ニ亡兄薩摩守平素

公武之御為抽忠勤度存慮ニ御座候処、不幸ニして志ヲ空シ遺憾不少義ニ御座候、臨終之節私一人江委曲遺命之趣も有之候ニ付、其以來忘寝食朝夕苦慮罷在候処、去々春以後变故不一方、其假 御改轍無御座候而は、如何様成場合ニ赴候も難量、家督ニも無之身にて甚僣越之至ニ御座候得共、是迄之御政事振觀察仕候処、

天朝御尊崇之道不相立、正邪之弁致表裏、冤魂愁声草野ニ滿、御外政ニ於てハ因循苟且之四字ヲ不被為免、故ヲ以虚実ハ不奉存候得共、乍恐

被為 惱

宸襟候御模様も奉伝承、外患は扱置内憂日ニ迫り、変端牆下ニ生スル之勢顯然ニ御座候間、旧臘家来差出、久世氏江存慮之趣致献白候得共、迺も御取用相成候御模様ニ

無之、遷延之中不可救勢ニ罷成も難量奉存、此上は是非出府仕、存慮十分言上仕度含ニ而修理大夫申談、去ル三月中旬国許発足仕候折柄、京撰辺江諸浪士蜂起、且家来之内私趣意心得違候者共致与力、不容易形勢罷成迎も無事通行難仕候ニ付、無抛一往大坂屋敷江取押置、四月十六日 近衛家江參殿成行入御耳候処、恐多クモ達
叡聞当日浪士鎮撫之蒙

御内命、誠以冥加之至恐入難有奉存御受申上、滞京罷在候内浪士共推而上京仕騒乱相企候段承候ニ付、早速家来差出取押方精々申付候処、乍漸靜謐之形ニ相成申候、然
処於
朝廷

思召之御訳被為 在 勅使被差立候ニ付、私ニも引続出府周旋可仕旨、別紙之通被

仰付重疊恐入難有奉存、五月廿一日京地発足、先月七日御当地着仕候ニ付は、直様表通行形献言仕度奉存候得共、此度は非常出格之

叡慮ヲ以 勅使被差立候御事故、

勅使之奉 命不被為濟内、私より 献言仕候而は、 勅使ヲ差置候場ニ相当り越俎之罪と奉存、態と差扣罷在候処内々承知仕候得は、

勅諭御奉行被為在候御内定之由、無此上御慶事恐悅至極ニ奉存候、從來私持論は天下之人心帰嚮仕候御方要路ニ
御出職、

公武之御間大道相立無内外表裏、真実之御一和ニ被為成正邪明白、下草莽之匹夫ニ至る迄、 御盛徳ニ敬服仕候

御政事之基本定り、上下一致 御国体堅実之上

叡意ヲ被為伺、時世ニ応し天下之公論ヲ以外夷 御処置

永世不朽之良法被召建度存慮ニ御座候処、於 公辺早其

辺江 御着眼被為 在、先月朔日之御書付拜承仕、誠以

感佩之至ニ不堪義ニ御座候、乍去實際施行之処、古来よ

り難シとする事ニ御座候得は、非常之時節御実事不致齟

齟様能々御了得、要路之御役々正邪綿密ニ御評義ニ而黜

涉被為在度奉存候、是迄

御威光とか申候而善悪無御構、御庄服之御手段は、乍恐

近來之御弊政ニ而、弥人氣激發之基と奉存候間、右等之

御氣味御一洗、寛永己往之、御政事ニ被為復、

公武、御合体之大基本被為立候上、義理上より生シ候真

実之

御威光被為在度偏ニ奉懇願候、右申上候如く内外非常之

世態、殊ニ当時

御賢明ニ被為在候由も粗奉承知候得は、愚考之趣胸臆ニ

秘し候時節ニ無御座と奉存、不顧不肖之身ヲ虚飾ヲ去り、

忌諱ヲ犯シ奉獻言候、若、御採用之義ニ御座候ハ、猶

又存慮之趣可奉申上候、以上、

七月

島津三郎

〔朱〕
一戊七月八日堀小太郎ヲ以、老中板倉氏方江表向差出

候事、

文書原寸 縦一六・八種 横一〇二・三種

三美 大原重徳卿より島津三郎殿へ

国是決定大政委任云々の件

〔封紙ウツ書〕
一島津三郎殿

重徳

ノ

ノ

越前上京、朝議被相伺而、於關東衆議大小名献白可被

召様ノ御運ニ相成度儀ニテハ無之哉、

此御返答申候、能々御覽御勘考、

全体ノ御事ハ仰ノ通りニ候へとも、左様ニテハ最初ニ立

戻り、午年ノ御仕直シ被遊候様ノ御事ニテ、夫テハ事手

間取埒明申間敷、却て又人心動揺可致欵と存候、且又

朝廷ノ御国是ハ、先年より被為立有之、別ニ今更被伺候

ニハ不及事ニ候へとも、其御国是ノ拒絶等ノ事洋服無之

故ニ、彼是と今日ノ世体ニ罷成り候、夫故ニ一橋・越前

ヲ被登庸候ハズヤ、此二人真正ノ政事被行候事ハ不及申

候、其真正ノ政事施シ行ハレ候ハ、朝命遵奉ハ元よ

りノ儀、外夷ノ所置モ、叡慮ニ基付カレ候儀ハ申迄も無

之御事と存候、左候ハ、今別段被伺候ニも不及儀ニ候へとも種々と相成来り候末ニ候故、彼違 勅ノ廉御理ノ為ニ上京いたし、扱国是ヲ被伺候事ニ候、左候ハ、此処略治定いたしケ様々々ニ可致候、併思召も被為在候哉否被相伺候、其時 思召ニ違候ハ、屹度ケ様々々可致と被仰出候ハ、 朝命相立可申、是迄ノ仕来リとハ違候と存候、且国是ノ論、諸藩囂々と思ヒノニ申出シ、其旨言上、扱於

禁廷、其囂々ヲ御判断被遊候御儀ハ如何可被為在哉、甚御案シ申上候、扱大名ヲ率テ上洛ノ事、先日御覽ニ入候三郎書中ニも有之候通り、大樹大名ヲ率ヒ上洛いたし候、諸説紛々囂然タル事ニ可有之、其囂々タル内、真ノ国是タル処、御見込御治定ハ却テ御六ヶ敷カルヘク哉之趣、此儀小子も至極同意ニ候、越前上京ハ大樹大名ヲ率ヒテトハ違候へとも、畢竟同様ニ候欤、左候ハ、於関東茲ガ国是と云所ヲ相定メ、未行シテ相伺候処、思召被為在候ハ、可被 仰下、則御請申上候へハ、即朝命遵奉之場所

と存候、如貴命ニテハ、午年ノ御仕直シニテ中々手間取、埒明事ニテハナク、人氣モ立、種々と相成、急ナ事テハ調不申、諸説紛々却テ治定六ヶ敷候半と存候、併是迄ノ奸吏共ニ候ハ、御示之通りニナクテハ正路ニハ成間敷候へとも、其為ニコソ十目十指ノ一・越登庸、要路ニ在職候上ハ、何ノ御案思無之事ニ候ハズ哉、夫テモ御案思候ハ、一も越もイラス事、政事御取かへし、貴公執政シテ、天下ノ為ニ辛苦ナサルカヨシト申者也、是ハてきぬ事、左候へは先治定御サシ被遊可然存候、乍恐是迄ノ仕来りハ、御任トハ申者ノ、実ハ御トラレ遊シタモ同様ノ事ニテ違 勅調印ノ御正シモ難被遊迄ニ、我俣力長シテ、今日ニ至り候、今日一・越出頭、薩モ氣張居候、今日以後ハ真実ノ御任ニテ、常々ノ事ハ是迄ノ俣^{併右取}捨^敢取 國是天下悦服聊私論ナク、真正ノ処ヲ相定、不行シテ相伺候ハ、則御決断ハ 禁中ニテ被遊ル、ト申者也、左候へハ是迄ノ訳とハ違申候、

譬テ申セハ、

悪党者ヲ召捕候へハ、其下役ニ取調、罪状ヲ頭分ニ申出ス、奉行頭分ノ者、是非ヲ考へ的当ナレハ其分

ニテ治定、若不当ナレハ勘考シテ、当然ノ罪ニ行フ事ニテ、下役ノ云分ニセネハナラント云事、元より

ナキ事也、併訊ノ分ラヌ奸吏ナレハ、任セテ議論モ致サセネトモ、ソノ為ニ一・越ヲ登庸候ハ、正路

ヲ申出サル、ハ的然と存候、左候ハ、事速ニシテ相調衆庶も悦服疑念無之と存候、

以上岩倉へノ写シ也、但国是ハ兩人共ニ胸中ニ兼々可有之事と存候、

大体此様ナ事ニテ可宜哉とハ存候へとも、後々之処ニテ何事も於関東治定之上伺と申のと、凡て伺て取計のとハ

大違になり申候、御委任ノ廉も候故、凡て伺て取計と申様にハ迎もまいり申間敷、又於 禁中甚御六ヶ敷可被為

在候と存候へハ、何レとも決心いたしかね候、御英断偏ニ御頼申入候、以上、

七月八日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一一号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二六・一糎 横九五・五糎

三毛 中山忠能卿より島津三郎公へ

幕府勅命奉行之件

〔包紙ウラ書〕
「島津三郎殿」

忠能

密要

緘

〔朱〕
「戊七月九日」

〔朱〕
「中山大助殿」

〔包紙ニ左ノ通〕
「参番中且痛所等ニ而、実粗略之短札、

呉々御理申入置候也、

〔封紙ウラ書〕
「島津三郎殿」

忠能

内々

〔朱〕
「緘」

□

□

□

追申、今日ハ当番彼是御用多之上、先日已来之肩手

痛益増長、一向苦痛之仕合、右之乱書且短札、御分兼

と恐入候へとも、荒々申入候、略札等可令免給候、

御推覽可給候也、

去一日之御状拜披候、炎暑難凌候、弥御壯健奉賀候、抑東武之事情巨細御示聞忝承候、一橋・越前兩家之義、弥朔日御受ニ相成、先以

毅旨御貫徹之条恐悦存候、

天朝御洪福之令然処トハ乍申、偏ニ被抽御丹誠、種々御周旋故之義ト深令感佩候、

勅使ニも厚配之程令察候、併万事被及御内談候由、先達被示越内外御配慮御苦心、御遠察申候事ニ候、則剋參朝逐一言上、御書状も内々奉奏覽候処、

御感不斜候御事ニ候、将又若州ニハ弥免役之義言上有之候、代大坂城代より転役、右城代替等人体ニ付、且此比一橋へ被付候人等之義、種々之説有之、有志之輩一向不同心、京師ヲ不安心と頻ニ申唱候、尚厚御勘考奉頼候、長州上京ニ付而も色々評議有之候へとも、是ハ何レ初より御約之通申切候間、御安意可給候、於学習院両役面談と被仰出有之、不日可面談存候
粗子細も相分、大原へ申遣候御聞取可給候 長説

ハ凡ニ候へとも、何分在京淡路守同様先文所司・坂城代・一橋付等之人体ニ而、甚異説蜂起令心配候、宜賢考可給候也、

七月九日夜

(本文書ハ「鹿児島史料 忠義公史料」第二卷第一二三号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・四種

包紙原寸 縦二七・六種

横二〇・七種

横三九・七種

三 正親町三条大納言より島津三郎殿へ

幕府奉勅之件

(包紙ウラ書) 一島津三郎殿

三条大納言

(朱封)

□

(紙ノ文字ト朱封ハ重複)

□ 緘

(朱) 「戊七月九日」

」

七月朔日御認御状、昨八日到着令拜見候、此比炎暑酷烈候処、先以御勇壯珍重御儀存候、然は去月十日粗略之一

書進上候処、御念篤御答翰、事々御細示、殊ニ其地御都

合委曲示給、段々御尽力ニ而、去一日

勅答御請ニ相成御安堵之旨、実以御同慶

皇国御洪福

天朝御威光相耀候段、

御威徳令然処ニは可有之候得共、全御尽力御周還故之義

と、感戴恐悦之至此事ニ奉存候、御懸合之趣左衛門督よ

りも委細被示越、御丹精之程令承知、感悦仕候事ニ御座

候、今九日右之次第内 奏之処、実以

叡感被安

宸衷候御事ニ御座候而、一同不堪雀躍候、先ハ猶又御答

旁呈愚札候、恐々謹言、

七月九日

島津三郎殿

三条大納言

実愛

奉

再啓、於松平大膳大夫も、去二日上着有之候得共、

今以往復之運ニも不相成事ニ候、何様之次第申立候

哉、難測候得共、譬何事を申張候共、兼々御発篤前
御談之通、於

朝議は何国迄も御變動不被為有儀と奉存候、定而色
々遠境之事ニも有之、御配慮と存候、右

朝議御確定之段ハ御放念之様と存候、陽明公ニも御
賀式万々被遂行、御精勤被成候間、是又御休意之様

と存候、申述度義海岳ニ候得共、御便急ニ相成差急
不尽心事候、猶大暑御保護専一奉祈候、早々乱毫海

恕所仰候也、

(本文書ハ「鹿児島史料 忠義公史料」第一卷第一一二号

文書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一八・二種 包紙原寸 縦二七・七種
横四九・二種 横三九・一種

三 大原重徳卿より島津三郎公へ

久光公献白之件

(包紙ウツ書)
「三郎殿

重徳

ノ

一

口上

今日ハ堀ヲ被遣何欵承り候、巨細御答申入置候、然ル処
又々角右衛門被遣御献白之御写被下、拝覽一読、実ニ無
二之忠言感佩此事ニ候、至末文御采用候ハ、猶又存慮
御申上之処実ニ勘要ニ候、此処御尋も無之候ハ、実ニ
徳川も是限りと存候、何レ御尋可被申と存候、右ニ付て
ハ何とも御面働ニ候へとも、此御存慮之辺ハ何様之廉々
ニ候哉、何レ被尋候ニ付て出候御返答ニハ可有之候へと
も、先御心積り之処覚悟いたし度存候、何卒頭文一何々
之事にて宜候、

明日明後日之内御見せ被下候様御頼申入候度存候、小子
も一寸存付丈之儀ハ、堀ニも咄しハいたし候へとも、猶
書取可掛御目と存候事ニ候、早々、要用耳、

七月十二日

文書原寸 縦一七・七糎 横七三糎

三〇 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

一橋越前会合ノ件

(包紙ウツ書) 一島津三郎殿 重徳

緘

(封紙ウツ書) 一島津三郎殿 重徳

頃日御無沙汰、立秋之驗ニ候欵、少々凌易候、逾御清安
珍重存候、陳ハ一橋・越前御請ニ相成、天下ノ大幸

歎慮も被為達、誠恐悦、於御互畏大安心之事ニ候、右ニ付
近日一・越面会いたし度事承知にて、御馳走所江被来候、

逾十七日之積リニ候、猶明十五日ニ高家へ可相達候、刻
限ノ如何可申入哉、貴兄も御面会之事尤所望ニ候、其前

ニ御相談申度存候間、午刻早メニ御出門(被カ)可給間敷哉、左
候ハ、未半刻と申達可置哉、御相談申入候、且又其時可

申談次第、御出ノ砌ニ御咄し申候て宜事ニハ候へとも、
余り速急ノ事故、一寸書取御相談申入候御考可給候、例

之御下札にて御答可給哉、種々思案いたし、先此辺之事

ニ候、且小太郎存意も承り、一寸書取セ候ニ、朱かき掛

御目候、扱又過日之御献白拝読、再三一々御尤ニ存候、

過日も申候通り、御末文ノ次第にてハ否哉、御返答可有

之事ニ候、今ニ何ノ沙汰も無之候、押て御存意不被尋て

ハ、幕も是切欤と存候程ノ事ニ候、定し一・越兩賢可然

被為採用候とハ存候得共、両老中不安心なる事ニ候、真

実誠より尊崇如何可有之哉、猶十七日面上万々可申承候、

早々、要用耳、不典、乍例乱毫失礼御推覽可給候也、

七月十九□四日

追而一昨日ハ御使御祝として生鯛一折、実ニ幾久敷

と祝入候、厚御礼申入候、以上、

又被尋候ハ、御申出シノ廉々一寸承知いたし度存候

文書原寸 縦一七・七種 包紙原寸 縦二七・三種

横六八・五種

横三九・八種

三二 中山忠能正親町三条実愛両卿ヨリ島津三

郎公へ

所司交代送ノ件

〔包紙ウツ書〕
〔朱〕 戊七月十五日

島津三郎殿

緘

〔朱〕 中山忠能
〔朱〕 三条実愛

残暑難凌候処、愈御壮栄珍重存候、抑所司代跡役宮津伯
州被申付候由、去十日言上有之候処、諸有司之徒不服之
趣ニ而、追々申立、頃日ニ而は激烈之議論切迫ニ相成、
甚難治之形勢ニ候、万一於

輦下騒動等有之候而は、何共無心元存候ニ付、

勅使江先御内々被 仰談候儀有之候間、乍御勞煩自左金

吾御聞取て、何れとも御為御宜敷様御勘考、何も無御

覆藏、金吾江御内談有之候様との御内沙汰ニ候、自小子

共右宜々賢考奉頼候、仍如此候也、

七月十五日

実愛
忠能

島津三郎殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一五号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・二種 包紙原寸 縦二七・五種
横八六・四種 横三九・六種

三三 大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ

一 橋慶喜松平春嶽招致ノ件

(包紙ウツ書) 重徳
「島津三郎殿」

(朱封)

□

「

口上

昨日ハ両士ヲ以巨細御示諭承り候、御尤之御次第ニハ候
へとも、一端御同席なくてハ奉対

朝廷恐入候と書付出し候事故、在「□」甚六ヶ敷「□」心配

「□」可有事故、心配「□」し目覚思案と存候処、枕頭

ニ一□有之、能見候へハ京都便り「□」品、速ニ開封候へ

ハ、誠ニ

皇天之御助ニ候欤、御沙汰之趣ニテ、兩人御請之儀御
満足ニ被 思候ハ従素、右ニ付兩人江兼而之 叡慮ハ元
より更ニ被思召、此事共ハ難尽紙上以面上と有之候、申進
シ候御事も相添右兩人江可申聞、又所存も可承との御事
申来り候、右ニ付幸兩人一計相招可談事ニ相成候間、右
之処へ御出頭ニ相成候様取組候積リニ候間、今日直様申
立、廿日未半刻兩人被成候様申達候間、於貴兄も御出会
可給候、右申入候、尤老中ハ不相招候、不量「□」之次第
ニ相成都合と存候也、

追而

七月十八日

尤貴兄御出之事ハ臨期ノ
積リニテ、未申通ス候

貴兄勤 王之精心通徹之事、深々御満足ニ被 思
召候段、宜可申入被達候、且又周旋ノ四人嚙「□」

心配苦勞なるへく、宜可申入被示「□」可給候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一六ノ

一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一九糎 包紙原寸 縦二七・三糎
横四二糎 横 四〇糎

三三 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

勅使登城ノ件

(封紙ウラ書)
「島津三郎殿

重徳」

追而申、前日至極ノ都合と存候処、へんな処へ参り
何とも残念ニ存候へとも、一橋へ集会候ハ、御本
懐も可達と存候事ニ候、猶其節万々可申述候、乍例
乱書御免被下候也、

右之書状相認、昨日可申入存候処、何等之沙汰無之、至
今朝高家来り御馳走所御手狹ニて、御用漏候ても如何ニ
候間、登城いたし呉候趣申越し候間、別紙草稿之儀
失札御免御目
ニ掛候、然ル処へ越前家来参り、詰り趣意ハ内々春岳ノ
所存ニ候、御登城不被下てハ不相叶儀有之候由、登城ニ
て面会候ハ、其次第も相済候事ニ候間、何卒登城いた
し呉候様申越し候間、御用向ハ相達シ、相談ニ相成、其

次第も分ルと申事ニ候ハ、強テコジ付ルニも不及、又
々彼方ノ申分も相立候へハ、崇

王攘夷守旧弊ヲ破却ノ事も申述、ヨク請ネバナラヌ処も
可有之と存候故ニ、何欵詔ヲ御申越可被成、左候て登城
之事承知可致旨申答遣し候、右故明日欵明後日登城之事
可申来候間、明日可致登城と存候、面会候ハ、被申越
候御旨ハ勿論、又所存も承り、崇

王之道大变革之道等ハ小子相心得候丈ハ十分ニ可申述と
存候事ニ候、扱一橋殿ノ口上ニて、小子・春岳・三郎殿
等御招被申候と申事ニ候、日限無之候間、明日面会ニて
可承と存候事ニ候、御出会可給候、昨日より可申入、中
山も案シタラノと存候へとも、不定分ヌ事ヲ申ても如
何故、暫待ノいたし候内、御尋ニ相成無申分候、右之
次第真平御免可被下候、早々、不乙、

七月十九日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一六号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一九糎 横五五・九糎

三三 中山忠能正親町三条実愛両卿ヨリ島津三

郎公へ

幕府勅命奉行ノ件

(包紙ウツ書)
一島津三郎殿

忠能

実愛

緘

(朱) 『戊七月廿日』

残暑難退候、愈御安全令賀候、陳は一橋刑部卿後見并越前前中将政事総裁職等之事、如

勅命御請之儀、去朔日左衛門督登城、大樹公対顔言上有之、尚又去六日・九日等申渡相成、御請相濟候旨、早速左衛門督飛札到着、即令言上候処、深

御安心 御満足被

思食候、貴将専周還不一方、擬丹疑被尽精勤候ニ付、如斯速遵奉相成、不容易大功之旨御沙汰ニ候、弥奉行此上恐悦可申承、猶宜々頼入候、謹言、

実愛

七月二十日

忠能

島津三郎殿

尚以小松帯刀・中山忠左衛門・堀小太郎・大久保市藏其余、左衛門督江被付置候吉井中助以下六人ニも段々煩勞之儀、宜々御伝声頼入候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一一七号 文書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一八・二種 包紙原寸 縦三〇・一種
横四九・三種 横四一・二種

三五 大原重徳卿ヨリ島津三郎殿へ

一橋松平両卿と出会之件

(封紙ウツ書)
一島津三郎殿

重徳

此比ハ意外御無沙汰無申条候、朝夕ハ大ニ秋気相催候、
逾御安全珍重存候、陳ハ来廿三日、一橋刑部卿・松平春

岳御馳走所江被參候、其節島津三郎ニも出席候様可申入
との儀申述候、此段申入候、剋限へ明日可被達旨ニ候、
御出会可被下候、早々、要用耳、不典、

七月廿一日

二白、剋限知り次第早々可申入候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一八号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・四種 横四〇種

三六 村上銀右衛門書翰 宛名不明

下之関ニテ幕船砲撃ノ件

(端裏付箋)
「癸亥村上銀書」

啓上仕候、然は昨日荒々御注進申上置候通御座候処、一
昨日長府沖ニ碇泊有、夫より田之浦沖之様参り下之関着
船仕候、然ルニ田浦長州之御人数参居候内より、右御公
義之御船へ向炮発仕、四発打放申候由、尅発は表ニ当り
三発は不当、右御船は下ノ関繫船、豊前門司沖之様碇泊

之処、下ノ関より小船数艘参り、下ノ関之様ニ引参候由
公義御役人御乗込ニ被成居由候処、不左法之取計小倉表
ニ而茂不審ニ奉存候、尤右御船ニは小倉藩御郡奉行、江
戸より便船而下候由、何分右之次第之事一向左右無之心
配仕候、此末如何相成可申哉と奉存候、余り之乱妨長州
様之御取計は如何共候哉、万端御推察可被下候、右之御
船之一件ニ付、御勅使山口迄下ノ関より飛脚立候哉ニ噂
仕候、当時之模様如何共難申上候得共、荒々右之段迄申
上候、以上、

七月廿五日

村上銀右衛門

文書原寸 縦一八種 横一〇六・二種

三七 近衛忠房卿ヨリ島津三郎公へ

三通

長州周旋ノ件、近衛閑白辞意ノ件

(包紙ウツ書)
「従左大將殿

御答書

(朱)
「戌年」

〔朱〕紙

〔朱〕八月九日達す

〔封紙ウツ書〕島津三郎殿

極内密

忠房

〔朱〕紙

二六七ノ一

尚々残暑難堪御自愛專一ニ存候事、

残暑難堪候、弥勇健珍賀候、尚承度存候、於此方モ打揃無異之条御安意可被下候、抑今度 勅使江御内用ニ付家来進藤式部権少輔罷下候ニ付、時候御見舞申入候、先以不容易御周旋段々御整ニ相成、 皇国御為、且 公武御栄久之被開台源候義、顕然之至深く安堵之至ニ候、大膳大夫上京後先々差当言上之義無之、先々関白ニモ御安慮之御事ニ候、併自最初御沙汰之義故、押テ大膳大夫再出府、其元申合セ周旋可在被 仰出候得共、段々之次第モ在之候テ、長門守近々出府被 仰付候事ニ候、長州周旋被 仰付候義ハ水府故前黄門・尾前黄門気毒ニ被 思召

候ニ付、水故黄門ハ贈官、尾前中ハ昇進被 仰付度義、

且亦先年落命仕候可然輩、夫々家統相立候様、格別之大

救被 行度 思召候、右辺蒙 御沙汰出府ニ相成候事之

由ニ関白被命候、仍内々申入置度、且亦何力承度存候事

ニ候、扱此籠輕之品、乍赤面便ニ序セ令笑覽度存候、少

々所劳逆上気、尚更拙乱書御推覽可給候也、

七日廿七日

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一二二号 文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一八・五糎 包紙原寸 縦三一・五糎

横 一六四・八糎 横 四三・二糎

二六七ノ二

〔包紙ウツ書〕島津三郎殿

内密

忠房

〔朱〕戊七月廿七日

〔封紙ウツ書〕極密々書添

忠房

〔朱〕紙

□

□

□

尚々大原へは御洩し御無用御頼申入候事、

書副申入候、島田左兵衛権尉去ル廿日落命ニ及候、右ハ
余程ノ風評モ甚、定テ御聞ニ相成候事と存候、扱去月
廿三日後連々之御参 朝ニテ、関白深御周旋之御事ナカ
ラ、兎ニ角ニ御承知ニモ候通り、深入組口外難仕義多端
在之、実ニ一方御痛心御苦慮ニテ、中山・正三之両卿
ニモ深心痛之次第、乍去甚口外難仕義段々種々在之、関
白并両卿ニモ大痛心之至、関東可然改革就而ハ甚恥ケ敷
義、何卒再其元上京迄ニ屹と被立直度義共多分在之、右
ニ付テハ浮浪之士申立候義共モ在之、甚々御痛心之御事
ニ候、本田・藤井兩人ニモ心配之事共ニ候、実ニ兩人共
誠忠之義顯然頼敷存候、拙茂 朝廷唯今之次第ニテハ、
何共口外ニ不及、歎息際限無之次第、乍去入込何カ不分
明之事共モ在之、兎角御所置難被成、日々御苦慮此姿ニ
テハ折角被蒙関白職候所詮も無之、何卒ノ立被直度御
懸念、乍去兎ニ角ニ御取扱難被成入込、何共ノ御苦慮
実ニ口外難及義数多ニテ、御悲歎之御事一方候、此上

御所意通弥御取扱難被成場ニ及候ハ、兼而御歎願モ在

之候義、旁来八月ニテ当職三ヶ月ニ及候事故、兎ニ角辞
表被申上度御心底、何卒当方ニハ格別古来より之其元ニ
ハ親敷統柄、何卒御辞表自然被出候節ニハ、御取持被下
御差止メニ不相成様、浪士之向モ騒立不申様御含置、深
々御頼被成度、右故実ニ在体打明申入置候事ニ候、且亦
関白退職被

聞召候上ハ、一条左大臣江当職

宣下ト被存候へ共、全体差次ハ鷹司前右大臣之事故、此
次ハ暫時タリ共前右府公へ 宣下ニ相成候様、併 朝廷
ニテハ讒言兎ニ角ニ 御採用ニ被為在、甚々此人体ハ御
六ヶ敷候得共、元来之性質正直ヨリシテ、却テ暴ニ不心
付、夫ヨリシテ身上ニモ抱候次第モ在之、甚氣之毒成ノ
義、併入道准后当職ニテ、何カ巨細ニ職辺勤仕向ハ承知
可然人体故、此佞讒者之偽ヲ被受、生害ヲ被経候而ハ、
不一方気毒ノ御不憐愍之義、一条左大臣ト被仰出候共、
此次ハ為暫時共前右府公へ 宣下可被為在、関東ヨリ

勅答ニ相成候様仕度呉々御含置、一橋・越前辺程克承知
ニモ候ハ、安堵仕候、仍極密々申入置度、長文乱書御推
見偏ニ御頼申入度候事、

七月廿七日

長文ニテ書誤書損等其俣御免可被下候也、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一一九号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・五種

包紙原寸

縦三一・五種

横九九・七種

横四三・二種

二六七ノ三

亦慎認申候、関白御辞職ハ決而可唯今之事ニ而ハ無之、
自然御所意通り御取扱御六ヶ敷節之事ニ候、何モ御承知
置可被下候也、

文書原寸 縦一八・五種 横二二・七種

三六 近衛忠熙卿より島津三郎公へ

関白叙任の件

二六八ノ一

(包紙ウツ書)

島津三郎殿 御報

几下

忠熙

(朱) 『八月九日達ス』

(朱) 『壬戌七月廿七日』

(封紙ウツ書)

書添 (朱) 藏

尚々取紛大乱書可免給候、申入度儀品々在之候得共
荒々申残候也

書添申入候、忠房江御細書之趣、委細承候、段々之御周
旋其御地之御次第、実ニ感悦不過之候、其御方御骨折筆
紙ニ難尽候、委細ニ御答可申入候处、忠房へ申含置候、御
一覽可給候、此度ハ家来進藤式部権少輔御用之儀申含、
勅使左金吾迄差下し候、幸使御座候旁申入候、良節ニも下
向之儀、何も申聞置御聞取可給候、 朝廷之御次第日夜
心痛ニ不堪候、御察可給候、其上兎角所勞勝繁務甚以恐

々々入存候、何卒辞表相叶候様ニ偏ニ願候外無他、何も口
外難致次第ニ、何卒〳〵御察希度存候、中山・正三之兩
卿実精勤、当時此兩卿無之候而ハ、実ニ何事も御不都合
ニ可相成と存候事ニ候、何も〳〵荒々乱書可免給候也、
家来差下候、幸便此品進入候也、

七月廿七日

文書原寸 縦一五・九糎 横八九糎

二六八ノ二

(封紙ウツ書)

御報

島津三郎殿

几下

忠照

尚々残暑專御用心之様存候也、

御書中承候、兎角残暑難去候処、弥御勇猛珍重不斜存候、
此辺無異ニ候条御安意可給候、誠ニ此程ハ閑白 宣下拝
賀等無滞相済、深畏入存候、実ニ兼而申入候通、当今之御
時勢重職恐々入候而已ニ候、右祝シ給御丁寧之御書中、

殊ニ重宝之御品看等惠給、目出度忝々存候、誠ニ好候御
品一入御心入深々忝存候、右御礼御答迄荒々申入候、扱
は此品甚以匱抹之至ニ候得共、御答礼申入候迄ニ令進入
候、御笑留給候ハ、忝存候也、

七月廿七日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第一二〇号
文書下同文ナリ)

文書原寸(折紙)

縦一七・八糎

包紙原寸

縦三一・七糎

横五一・二糎

横四二・九糎

三六 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

閑白及近衛左大将拜命ノ件

(包紙ウツ書)

「島津三郎とのへ」

内々

忠房

(封紙ウツ書)

「島津三郎殿」御報

几下

忠房

□ (朱) 誠

□

□

「

尚以御書添之趣、遂一令承知候、実々関東之形勢莫大之改革、全其元誠忠之周旋望む処、深々感佩仕候、猶乍此上呉々御精勤之程、偏ニ可存候、尚々残暑、御自愛專一ニ可在候事、

過日ハ芳墨細々一覽候、弥勇健珍重不斜存候、扱先月廿三日、関白詔

宣下即日御奏慶、廿八日ニハ御直衣初、宿侍初等万端無滞被為濟於愚拙ハ左近大将奏慶、直衣初等都合克相濟候仕合、御安慮可希存候、就右祝給丁寧ニ何寄之品被下、深々忝存候、純子別而く好入候之義、芽出度幾度も重宝ニ可致、深々喜悅候、不浅御謝詞申述度候、此扇子一箱着等匱輕之事ニ候得共令入覽候、御一笑モ被下候ハ、喜悅可仕候、仍御報迄如此候也、

七月廿七日認

文書原寸 縦一八・五糎 包紙原寸 縦二七・九糎
横七〇・五糎 横三九・六糎

言 大原重徳卿より島津三郎公へ

政事総裁職名目の件

〔封紙ウラ書〕 島津三郎殿 重徳

〔封紙ウラ書〕 島津三郎殿 重徳

極内々

今日ハ殊之外暑気強候、逾御清壮珍重存候、誠ニ昨夜と申、又今朝も御細答被下辱存候、然ハ今日之御用談、別事ニ無之、越前前少将大老之儀、彼是と申ニてハ無之候へとも、名目之所大老となり候てハ、普代と同様ニ相成、何欵きつい心配之容体、全家来共不承知ヲ申候様子も候哉、并自分も何と欵家へ対請かたき様子ニも有之、何欵きつい困り之様子、扱実事之処ハ、如何ニも大老之事ヲ則今致居候ハ、日々老中同様ニ心配いたし候事にて、実事之処ハ頓ト異心なく、御請も可被申様子、只々名目大老之処きつい困りと相見へ候故、左候ハ、政事総裁

職と被仰出有之候事故、政事総裁職にてハ、名目も則替り候事故、如何哉と申候へハ、老中衆ノ口状ニ、何欵唐めいたる名にて如何、一向政道ニ名之勘考ハ有間敷哉と申候間、実事さへ大老之儀ヲ勤ル心ナレハ、名ハ如何様ニても不苦事と存候、既ニ大老差支候ハ、政事総裁と被 仰出有之候からハ、とんと不苦儀と存スル旨、再三申候へとも不落合、脇坂か一向政事別廉御用掛と被 仰出てハ如何哉と被申候故、小子存候ニハ、夫てハ名目ニも難成候と申候へハ、なる程と申様の事にて一向不落合、越公又被申ル、ニ、ケ様ニ申セハ、則違勅と申者ナト、自カラ罪セラレ候故ニ、小子夫ハ違勅と申者にてハなく候、子細有て御理ヲ述ルガ違勅ナレハ、何事ヲモ辞退ハでけぬと申者、夫ハ小子如何様ニも申上ルと申ても、左様ナラハト云テモナシ、何欵是ハ訳之有事故と察シ申候、越公へ極内々聞繕候ハ、可相分と存候、小子も致方なく、左候ハ、一向其由急便ヲ以相伺、矢張政事総裁職と欵、又政事別廉御用掛と被 仰出者欵、又別ニ名目ヲ被

下もの欵、可相伺哉と申候へハ、猶予御勘考可被成と申事ニなり候故、先左様ならハ勘考可致と申候故、如何可致哉、明日ハ可及返答申置候、此文にてハ御分りかねと存候、何卒堀ニても小子方へ可被遣事ハ相成間敷哉、左候ハ、越へ内々尋ニ可遣と存候事ニ候、とをも今日の事ハ書取かたく候、何卒明日堀御こし御頼申入候、越へ遣ス便ニも相成哉、早々大乱書、実ニ失礼、御推覽可給候、早々、以上、

此稗者ハ従大樹公被下候故、御すそ分申入候也、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一四号 文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一七・四糎 包紙原寸 縦二七・三糎
横 一〇六・六糎 横 三九・六糎

三三 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

久光公推任叙ノ件

〔包紙ツラ書〕
一 島津三郎殿 重徳

〔朱〕
「戌八月六日」

緘

(包紙ナリ) 兎角不揃之時候ニ候、逾御清康珍重存候、陳ハ昨夕京師より御便有之毎々御達シ御此一封御達可申旨、議奏中より被示候、早々御達可申之処、来状彼是読得候中及深更候間、漸今朝進候、御拝読可有候、自余貴兄江從四位下中

將等可賜旨被示越候、尤内々沙汰と申ニても無之候へとも、七月廿七日立ニて、近衛殿諸大夫并藤井良節等罷下り、巨細ハ被申含候趣ニ承候、右ニ付御咄しも申度、御家来四士之中誰ニても可被遣様いたし度存候、自余ニも申来り候事有之候、早々申入候、扱御推任叙之儀、誠珍重之御事、不取敢御悦申入候、全此度之御精忠莫大之御規模無申条珍重存候、以上、

八月六日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一二三号 文書ト同文ナリ)

包紙原寸 縦三三種 横四四・五種

三 岩下佐次右衛門ヨリ大久保一蔵へ

江戸田町屋敷大砲ヲ薩摩へ送ルノ件

(包紙ツツ巻) 大久保一蔵様 岩下佐次右衛門 無異御直披

堀平右衛門着之段ハ先便申上置候、其後吉井中助殿下向、京師ニ而建議之趣も有之由ニ而、一橋公板倉等へ拜謁云々之趣申入相成候処、至極能都合成立申候、右之巨細ハ兩人より申越可相成候、横浜表も当分静謐之様子、御府内ニも当分夷人通行、切齒之至御座候、摂州家いまた着無之、日々相待申事ニ御座候、

一 田町御台場へ居付相成居候大砲、大廻船帰帆次第積入可申之処、いまた着も無之、一向左右不相分候間、大坂迄御雇船ニ而積下筈申談、先日より右手当ニ御座候、一 海軍方平瀬治兵衛老母一人有之、煩ニ罷下度申出、就而ハ被差下候而可宜事件も有之、今日急被仰付候、右之趣意ハ、近日市来連右衛門就出立、着之上委細御聞

取可被下候、先ハ右事情荒々申上度、如是御座候、以

上、

八月八日 岩下佐次右衛門(方平)

大久保一蔵様

文書原寸 縦一四・三糎 包紙原寸 縦 二九糎
横 八六糎 横二〇・五糎

三三 朝廷ヨリ御菓子一折拝領

勅使東久世卿

(端裏書)
「戌八月十五日東久世殿 勅使ニ而拝領」

菓子 壹折

文書原寸(折紙) 縦一九・七糎 横五二糎

三三 幕府ヨリ久世大和守安藤対馬守処分

ノ件

(端裏朱書)
「戌八月十六日」

申渡之覚

久世大和守(広周)

名代 小野次郎右衛門

勤役中不束之取計有之段、追々就達

御聴候、急度も可被 仰付処、出格之以

思召、先達而之御加増老万石被

召上、隠居被 仰付、急度慎可罷在旨被 仰出、

安藤対馬守(信隆)
名代 右同人

勤役中不正之取計有之段、追々就達

御聴候、急度も可被 仰付処、出格之以

思召、先達而村替被 仰付候、場所其假被 召上、替地

之儀は追而可被下候、且又隠居被 仰付急度慎可罷在旨

被仰出、

大和守嫡子
久世謙吉
名代 小倉新右衛門

父大和守勤役中不束之取計有之段、追々就達

御聴候、急度も可被 仰付処、出格之以

思召、先達而御加増老万石被 召上、隠居急度慎被 仰

付、為家督其方江五万八千石被下、雁之間詰被 仰付、

对馬守妾腹之男子
安藤鱗之助
名代前二同

父对馬守勤役中不正之取計有之段、追々就達

御聽候、急度も可被 仰付処、出格之以

思召村替之場所被 召上、替地は追而被下、隠居急度憤

被 仰付、家督無相違其方江被下、雁之間詰被 仰付、

右於和泉守宅豊前守列座和泉守申渡之、大目付浅野

伊賀守御目付松平勘太郎相越候、

八月十六日

文書原寸 縦一七種 横七七・八種

三番 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

中将昇進及毛利長門守面会ノ件

(包紙ウツ書)
「島津三郎殿 重徳

緘

(封紙ウツ書)
「島津三郎殿 重徳

口上

昨日越面会、貴兄中将之事咄シ御座候、右ハ御面会なら
てハ不安心、人伝ニハ申入かたく存候間、小子まいり度
存候へとも、外人不出逢、届候ても今日の事今日下知ハ
不行届趣承り居候故、明午剋早々従是まいり、委敷御咄
し可申候、此段申入候、且又昨日京師御便ニ、長門守と
於当地面談取計等ニも相成候様との御沙汰にて、各出立
候事ニ候と申来り候故、何レ面会不致てハ不相濟哉と存
候付、御書取之事も有、旁御面会申度存候故、明日まい
り候、御面会可被下候、早々、要用耳、

八月十七日

本文、各とハ進藤と藤井との事ニ候、

乍例乱書失礼御免可被下候、

二白、長門守心得伺書押紙付にて本田弥右衛方より貴

兄方へ参り御座候由、一覽いたし度存候、

文書原寸 縦一八・六糎 包紙原寸 縦二七・五糎

横五二・五糎 横 四〇糎

三 松平春嶽公ヨリ島津久光公へ

上京延引ノ執成ヲ請フ

〔繪裏朱書〕
「戊八月十八日越書状」

私義、上

京仕候様

御沙汰之趣承知仕候上へ、不取敢参上可仕は勿論之義

と相心得罷在候得共、奉蒙重

命候以来、未タ日浅ク、不肖之私故、廟堂之事情も篤と洩

底難仕、諸有司之賢否も、睨と相弁へ不申候、依之国是

之議も一定ニ帰兼候次第も有之ニ付、唯今之処ニ而上

京仕候而も、奉応

叡慮

御安心

思召程之御請答も難仕時宜ニも可相成哉と、深以奉恐

入候間、上

京之儀、当分御猶予被成下候様、可然御執成之程奉願上候、元来微力不才之義に候得は、諸向居り合、国是之

廟算相定候迄へ、多少之日月を費候半ニ而は難相適可有御座と奉存候得へ、急度上

京可仕、御内意等御座候を及御請候上、段々延引仕候様相成候而は、奉対

京師、徒前之食言にも相当り、愈以奉恐入候次第ニ御座

候故、目前之処、有体之俣申上候事に御座候、勿論此

表之儀、粗定見出来候得は、於私も是非共上

京仕候儀、志願ニ御座候得は、精々尽力仕、一日も早く

御請出来候運ひニ仕度と奉存候間、此段厚ク御含置被

下候様、奉伏希候、以上、

八月十八日

松平春嶽

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第一二五号

文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦二〇・五糎 横七五・五糎

○三七 久光公ヨリ幕府へノ国是要目二十余条ノ建言

三六 久光公ヨリ幕府へノ建言

国是二十四箇条

(端裏書)
「戊八月十九日一橋邸ニ而越前同席献言之扣」

一 勅命之御事御座候ニ付、是非大体国是之議論、御評決之上、来ル八月月中旬比、爰許発足ニ而、越前々中将殿上 洛有之度、尤閣老一人同伴之事、

一 一橋刑部卿殿・越前々中将殿御登庸之上は、閣老ニモ実意ニ大政評議有之度、巷説ニ、内実は一和無之哉ナドト申事候得は、若右様之姿露程モ有之候而は、第一徳川家之御為不可然奉存候事、

一 大赦被 仰出候御事ニ候得共、至今何共仰渡無之勅命御奉行之旨ニ違ヒ候ニ付、際々御施行有之度、尤午年以来、諸浪士等死流幽囚、総而御赦免被 仰渡度事、

一 此節被命候所司代ニ而は、又々人氣ニ相拘り可申欵と至極懸念ニ御座候、今一往御評議之上、御人撰ニ而叡慮御伺有之度事、

但大坂も同断

一是迄

公武之御間、名義不相当之儀、細々御取調、御変革有之度事、

一 將軍家御一代一度は是非御上 洛之事、

一 諸御書付認振之事

一 勅使御会积向等其外段々可有之事

一 和宮様御会积向、今一際御手厚有之度、是迄將軍家より諸大名江御縁組ニ不准と奉存候事、

一 御同人様御心願之御事御座候ニ付、来春中ニは、是非

御上 洛被為在度奉存候事、

一 右ニ付而は、將軍家御上 洛、来年中不被為出来候ハ、来々春は是非御上 洛ニ而、

公武御一和之御実意、天下ニ顕れ候様有之度奉存候事

一朝廷御統料拾万石程御重メ有之度事、

但公卿方モ方今忠誠之御方は今少ツ、同断

一諸役人之正邪屹と御糺シ有之度事、

但諸大名モ同断

公卿方モ同断

一水戸前黄門殿贈官被仰出度事、

一故掃部頭罪科屹と御糺シ、代數御除有之度事、

但井伊之家は先祖代より 徳川家江格別功劳も有之

候ニ付、当人迄之処ニ而申上候、

一酒若儀隠居慎被仰付度事、

但間部モ同断、其外随従之面々同断

一安対は今一際重ク被仰付度、其外随従之面々屹と御咎

メ有之度事、

但御讓位云々之御事は実事之様致承知候ニ付、右通

申上候、

一九条家モ隠居慎被仰出度、随従之公卿方家臣等ニ至る

迄、武家ニ准シ御取扱有之度事、

一外夷御処置は、御内政大概^{御治定之}居り合候上^{ミミミ}に無之候而は不

宜奉存候事、

一諸大名參勤、是迄通ニ而は、迎も海防十分全備難致候

ニ付、遠^{三百里}中^{二百里}近^百里^{以上}ニ応シ、年数差別有之度、

若此儀難相成候ハ、妻子国許江引取度事、

一諸御手伝等、入費相掛候義は、以来不被仰付様有之度、

左無候而は、外夷防禦は勿論、内乱之鎮靜モ出来兼候

様可成立奉存候事、

但天朝之御修復等は別段之事ニ可有之事、

一海防之儀、江戸海は勿論、諸大名一統江年限御定、是

非致全備候様御達相成、此上若不行届之国有之候ハ、

殿科被仰付旨、屹と被仰達度奉存候事、

但前条參勤之義、御達之上たるべき事、

一大坂・兵庫・堺等警衛、方今之形勢ニ而は不相濟、屹

と殿重有之度事、

一京師警衛、大藩四五頭江交代ニ而相勤候様被仰付度、

是迄之彦根・高松等は御免ニ而、爰許之守衛被命度、

左無候而は、第一人心不和合之基と奉存候事、

一於老中宅外国人応接は以来無用ニいたし、拾万石以上

三拾万石以下之大名、外藩四人・卿譜代四人二人ツ、交代ニ而參府

江被命、小事は時々幕府へ伺ニ不及、臨機ニ而可取

計、外国奉行以下は其指揮ヲ受テ相動候様有之度事、

一外夷御処置相定迄之間も、可成丈登城は以来無之様

致度事、

但江戸中江滞留之儀も同断

一近衛関白殿下長クは在職無之模様ニ付、跡代り鷹司前

右府公へ被仰出度事、

文書原寸 縦一六・五糎 横一二七・七糎

三 戦亡者祭祀ノ件

水戸烈公贈位ノ件

右勅詔写

〔包紙ウツ書
一勅詔写〕

戊八月廿日於江戸松平長門守持參之書付」

二七九ノ一

水戸故前中納言、為国家忠節尽力卓越之段、深

歎感ニ付、被贈大納言候儀ニ付、猶又於当中納言も、繼

其遺志、為

皇国可有丹誠段、自幕府被申渡候様被遊度、

思食候事、

文書原寸 縦一八・五糎 横五五糎

二七九ノ二

戊午已来官武峰黜幽閉等之輩、追々再出ニ相成候処、於

地下之輩は今以其尽之分も有之候間、早々赦免可有之様

思食候、三条故入道内府儀は被為慰忠魂被贈石大臣候ニ

付而は、於水戸故前中納言以出格之儀被贈大納言度

思食候、且往年來長岡駅等ニ而横死候者共より始り、其余

安島帶刀・鶴飼吉左衛門列以下諸国之士、於関東死罪且牢

死致し候者、又は流罪幽閉等ニ而死亡候者共、或桜田東

禅寺又ハ坂下等之一件其余国事ニ死候輩、靈魂招集以礼

取葬令子孫祭祀候様被遊度、尤現存之者共ハ夫々如旧相復候様との

叡慮ニ被為有候、不拘存亡預是等之事情輩、姓名其向ニ取調不洩様早々可申上候、其上前条之趣 御処置被為在度思召候事、

文書原寸 縦一八・五糎 包紙原寸 縦二七・五糎
横七八・五糎 横 二〇糎

三〇 大原重徳卿ヨリ進藤式部権少輔へ

一橋慶喜等登城ノ件

(封紙ウツ書)
「進藤式部権少輔殿 重徳
御報」

追而不順氣、御自愛專一候也、書損ニ候也、

御示諭之趣披見候、残暑難去不順氣、御旅中無御障珍重存候、陳ハ登城之儀、如案無沙汰候間、^{催促}最速ニ遣し候、早朝之覚悟之処、来人有之及遅刻候故、もそつと以前ニ使之者かへり催促之旨承知いたし候、猶明日登城いたし、

夫々申入之上返答可致旨、相答候由申歸り候、右ハ市橋公も所勞故、今日登城候とも、逆も埒明不申と存、明日と相答候事と推察いたし候、扱々怠慢なる事と存候得共、高家ニも積り之可有哉と、其様ニ催促ニも及かたくと存候、何レ明日ハ返答可有之候、相分り次第早速可申入候、夫迄ハ御待可被下候、乍末筆御菓子一筥^{過日御入深畏入り}魂之御品、厚御礼御申上可^{採味いたし候て旅情ヲ慰候、御序之砌、}給御頼申入候、早々、要用耳、不叙

九剋

文書原寸 縦一九糎 横五六糎

三一 近衛忠熙卿より島津三郎公へ

四姦臣処分の件

(包紙ウツ書②)
「島津三郎殿 忠熙
御右」

(朱印)
□ (包紙ウツ書①)
内密々早々

島津三郎殿 忠熙

几下

(朱) 誠)

□ □

(封紙ウツ書)

内密々早々

島津三郎殿 忠熙

御右

(朱) 誠)

□ □ □ □

尚以莫大之御用繁ニ而、乍毎代筆仁恕可給候也、

秋暑難去候、弥勇健珍重候、抑先便申進置候彼四姦臣一件、実々不容易心配、段々周旋ニ及候得共、中々六ヶ敷御次第、不一方大心痛、尚亦段々之周旋ニ而、漸御承知ニ相成、夫々御咎被 仰付候事ニ候、久我内府公并千種少将・岩倉中将・富小路中務大輔等、各蟄居辞官落飾等被 仰付候間、先々安心仕候、其許ニモ御安堵可被成候、誠ニ先時は心痛之余り、御勘考之儀、厚御頼申進置候得共、先々右之次第ニ相成候俟、右辺御懸念被給候ニ及不申候、何茂御安心之様、早々申入度如此候也、

八月廿一日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一三二号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・八種 包紙原寸 縦三一・八種

横 七一種 横四四・三種 二枚

三三 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ

書添共 一通

伏見一条削除ノ件近衛閑白辞職ノ件

(包紙ウツ書)

御返事

島津三郎とのへ 忠熙

机下

(封紙ウツ書)

答

島津三郎とのへ 忠熙

机下

(朱) 誠)

□ □

二八二ノ一

尚々時候專御自愛と存候也、

昨廿四日夕到着之御答書之趣、何も委細ニ承候、先々一両日漸ク秋気相催候、弥以御勇猛之事、珍重不斜存候、

段々被尺忠誠御周旋之程、不一方感悅候、就而ハ東武も追々正儀相頭候模様ニ付、何卒其許ニハ当地御模様も在之候匹、勅使ニ無御構、早々御上京之様存候、右申入度、再答旁申残候也、

八月廿五日

文書原寸 縦一七・五極 横五八極

二八二ノ二

(封紙ウツ書)
「書添」

(朱) 誠

「

尾前中納言、大納言推任之御沙汰、且自国政務掌之儀、且又松平容堂之儀も伝奏ヨリ老中へ御沙汰被仰出候事ニ候、此段も御心得ニ申入候事、

別紙ニ申入候伏見一条之事、何も承候、早々取計、長門守江被渡候書取、伏見一条ハ取除之方ト取替ニ相成候様可致、何も御安意可給候、何も早々要用ニ而御答申入候、

実ニ何か種々大心痛之事ニ候、併先々四姦二宮女之処、周旋致相整候段ハ安意ニ候、何分御上京之上、巨細御咄共可申承候御待申入候、追々冷氣ニ相成候得は、持病度々可発と、甚以心痛候、尚辞職辺偏ニ御取持之儀、置候、跡職之処甚六ヶ敷ト心配候、鷹前右公之所、暫時ニ而も被登用候様、且御為方ニも御宜ト存込候事ニ候、一左公之所ハ、当時之所ハ如何ニモ掛念候事ニ候、何も御勘考置可給候也、

八月廿五日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一三五号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五極 包紙原寸 縦三二・二極

横八九・五極 横 四四極

三三 遠藤文七郎ヨリ朝廷ヘノ上書

仙台藩ヨリ攘夷ノ勅命ヲ請フ

(端裏朱書)
「壬戌八月廿八日仙台より差出候書」

一往年より夷賊

神州を侮漫し、国俗之欲セざる貿易を通し、確乎たる
祖宗之国典を紊り、自己之狼心を逞するニ至り、森々
然と天下万民之膏血も既に尽候勢ニ相見得候所、乍懼
御明を以、此巨害を深く被遊

御洞察、夙夜被為腦(極)

叡慮を候義、実ニ恐々懼々之至り奉存候、既ニ此時ニ
及ひ候てハ、全ク彼夷賊を不被遊御掃攘候てハ、遂ニ
全州手を束ねて、文身左衽之大恥を蒙候義ハ必然之勢
ひニ御座候所、天命未不墜地ニ、当時天下之諸侯同轍
一心、攘夷之

聖詔有んことを寤寐之間も渴仰仕居候所、即此大機會、
実ニ求めて難得所之ものニ御座候間、掃禱之勢ひを不
為失、往夷反正之大号令を諸道ニ被相下、断然大挙之
御計策を被相決、千古無之所之御国辱を被遊御洗濯、

御鴻基御再造御中興之
御功烈、巍然と被為在
御建立、赫々たる

皇威を海外ニ被為耀候ハ、外ニハ万億年も夷賊覬覦
之邪念を絶、畏怯して四方賓服仕、天下其風采を想聴
て、自ら納貢仕候事ニ可有之、内ニハ泰平驕奢佚遊之
弊習も不促して変易し、即

神州固有之質素淳朴之美風ニ移転化し可申、左すれハ、
一挙して御両全之可被為在御至計ニ義と、乍恐愚考仕
候、然に其期ニ相及候節ハ、兼而御賢察被成下候通、
兵甲士馬不整義ニハ候得共、謹而

叡慮を遵奉し奉り、躬自矢石を冒し、辱も天下諸侯之
巨魁として折衝之力を勵し、貞亮忠純之臣節を相竭し
申度微志ニ御座候、然に御大計被為相決候御機會、実
ニ

神州之興衰治乱之際ニ關係仕居、至極御大切之御所置
ニ毫末も御籌略其機ニ応し不申候節ニハ、即夏順逆之
名分其所を異ニ仕、大事去テ又不来事ニ罷成可申勢ニ
御座候間、乍恐深ク此所被為尺御廟算可被為在御定策
義と奉存候事、

一 累世辱も左近衛府ニ被任候所、是迄僣武之時世ニ遇し居、乍存職務を相尽可申由も無之、虚しく其任を相守り居候所、既に当節と罷成候てハ、災変不測ニ相生し候やも難計勢も相見得候所、其期ニ至り候而、府之職務を誤り候義にてハ、実ニ其罪を不可償義ニ候間、先以第一夷賊近畿之辺海侵掠し、京師是か為ニ騷擾仕候時節、且ハ其黨ニ乗し、盜賊都下ニ聚り相漂掠して、人情洵々たる時ニ至り候ハ、即袂を投し、甲兵を振起し、乍恐

鳳闕を奉守衛、聊

御震驚之御憂患不被為在候様、微忠を尽し、居職之責を相免れ申度存念ニ御座候事、

一 東奥沿海之義ハ、固より地方曠大之事にて、殊に封境之義ハ、悉く海岸ニ相接し居候境界ニ有之、万一為夷賊之鹵掠被致候義にてハ、私之愧恥ハ指置、即

神州之御恥辱ニ罷成、且ハ

祖先之微功をも相汚し候事ニ至り候間、別して攘夷之

聖詔被相下候節ニハ、封内は勿論、仮令応援兵をも差遣し、秋毫も東奥之地境に於てハ、入侵之患無之様、家国之微力を尽して鎮静仕度義ニ御座候事、

一 夷賊御征伐相成候節ハ、固より彼よりも暴兵を挙、軍艦等差向、風濤ニ従ひ、諸州之境界を不択、戦闘を挑ミ可申、即於内地ニハ、国主郡司等防禦之術策ニ勞思し暇隙を不得、就てハ人民も兵役ニ充られ、自ら人情も騒然たる事ニ趣可申候所、其黨隙を幸として州郡を漂掠し、乍恐

詔命ニも違ひ奉り、不軌を計り候奸賊蜂起仕候義ハ、必然之勢ニ候処、其節ニ臨ミ候ハ、不取敢其方面縦ひ東奥之境内ハ勿論、他之州郡なり共、兵力之及候限りハ征討を加へ、捷書を奉
闕下度微意ニ御座候事、

別紙

夫当天下僣武より已降、既ニ二百有余年、封東奥ニ襲

し居、当時ニ至迄連綿家國血食仕、辱も飽迄

天恩ニ浴し居候大徳を報し奉り度存念、專ニ御座候得

共、実ニ昊天無窮之事ニ及不申義ニ御座候所、時勢既

に望至所ニ逼り候義ニ候間、乍不肖、事ニ臨ミ股肱之

力を竭し、忠興之節を致して、腥膻之醜虜を海外ニ攘

除し、社稷を安寧ニし奉り、上ハ

天祖

天孫之神慮を奉慰、亟てハ且夕被為腦候

宸襟を安し奉、下万民之疾苦を除き、乍恐

皇道御興復之御偉業を奉補翼、干城爪牙之微力を相尽

し申度存念ニ御座候間、何分此義別段之御懇情を以、

深ク御省察御体認被成下度奉仰願候事、

文久二年

遠藤文七郎

八月二十八日

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一三六号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六種 横二八五種

六四 島津毛利両公ヘノ建白書

所謂四姦処罰ノ件

(封簡) 一両国之太守江 建白一冊

封 封

細末之愚輩等不願恐及言上候ハ全 皇国ヲ御大事ト

存上奉候故也、

久我入道 千種入道 岩倉入道 富小路入道

右四人今度之御咎之假ニ而ハ、経年之後御時節ヲ相見合

何等之義ヲ御為筋ヲ申立、我罪ヲ洗ヒ出仕ヲ遂ント可勘

廻哉モ難計、今ヨリ末々之義見貫候間、遠島之儀被 仰

付候は可然ト存上候、何分恐多モ

一天万代之君ヲ嘲奉已ナラス不易謀議有之由、天下第一

之大悪罪人、何程 御咎被 仰付候而モ相足儀ト奉存

上候、是非ニ遠島可被 仰付候、当御国内ニ被置候人体

ニハ無御座候、早々御勘考可被為在ト奉存上候事、

鬼界島ニ流 佐渡島ニ流 隠岐島ニ流 土佐島ニ流

久我入道 千種入道 岩倉入道 富小路入道

一於九条前関白モ同遠島被 仰付候而ハ如何御座候哉之事、讚州ニ流

一中山大納言・正親町三条大納言無抛奸界ニ被掛候由ニ

候得共、真実 聖忠之志有之候得ハ、加様御咎モ不被為

在御事ト存候、此後被誠改心被致候共、一度加様不忠之

筋有之候而ハ再勳不面白、又候 御咎之事出来候節ハ

朝廷之 御外見ト乍恐存上候間、辞官永蟄居落飾被

仰付候而ハ如何御座候哉之事、

一替御役御人体

徳大寺大納言殿 柳原右衛門督殿

西洞院左兵衛督殿

右三人江御役被 仰付候は御為筋ニ屹度可相成哉ト存

上候、於徳大寺殿ハ就中忠憤之趣兼而及承居候、旁以

早ク被 仰付候而ハ如何候哉之事、

一当時御役御加勢多被為在候由乍蔭伺居候処、古来ヨリ

左様之御事不被為在ト是亦伺居候間、各御差免被為在

候而ハ如何御座候哉之事、

一御用多ヲ被申立御当役御宿仕之義無御座之由、不顧重

御役殊御時節柄等之義随意之御勳被致候義言語同断之

事ニ候、定而勞ヲいとはれ候故ト奉推察候、外御不勳

之方々々屹度御誠御座候処、為御役前御不相応之御心

得方如何之御事ニ候哉、屹度御調可被為在候て如何候

事、

一諸家方々掛ル不顧御時節柄遊興被致候風聞有之候、可

然御名前モ承候事モ有之、私共数多抛身命罷上京忠勤

相勸苦心仕候様之儀ハ、御承知無之ト申事ハ無御座存

候、第一対

朝廷御不忠不義之御心得トハ無申迄儀、屹度夫々御調

可被為在ト存上候、遊興之御方見届候ハ、

朝廷之御為ニ候間、依事候は可及乱妨モ難計候、左様相

成候而ハ以之外之御外見早々御調御咎可被為在候事、

一入道之輩遠島不被 仰付候ハ、及入乱召取於東河原

獄門可致候、対

朝廷恐多ク候得共、天下国家之御為ヲ存上相働キ候事

ニ候間不苦儀と相心得候、
右之箇条

禁中江被及言上候而ハ如何御座候哉、忠憤相励候者数多
有之候得共、就中相励候面々不堪苦心申上候、以上、

文久戊年
八月

正巳

鑑兼

総益

政敷

定胤

島津修理大夫殿

毛利大膳大夫殿

忠憤御役人中

追申上候、右箇条申上候ニ付愚輩何程之罪科被

仰付候ても不苦候、即座ニ御請申上奉候、以上

文書原寸(折紙)

縦二二・三糎
横 六二糎

封筒原寸

縦二五・五糎
横 一一糎

三至 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ

四姦兩嬪処分ノ件

(包紙ウツ書)
投火々

極密以独見

忠熙

(朱) 二
二

(付箋) 二年八月
「文久二年八月」

□

添書か欵」

呉々不束之文言御推察御賢考頼入候也、

極密々申入候、其元御周旋、段々御苦勞ニ存候、於忠熙
モ、

朝廷正議相立候様、段々心配之義ニテ、先々四姦臣之処、
少々模様付候事ニテ、久我内府近々辞官、千種・岩倉・
富小路ニハ近臣被免、遠臣ニ被仰付候迄ハ周旋仕候事ナ
カラ、上ニハ姦人之讒ヲ御採用ニテ、兎ニ角言上仕候
事情ニ御疑心深被為在候テ、何事モ口外ニ難及義数多、
実以悲歎之事ニ候、役人衆ニモ実意之人体無之、先中山・
正三計之義ニテ、何分ニモ 朝廷ニハ御人少之義、兎角仕

方無之候、併役人衆之外ニハ随分正論之面々モ在之候ヘ共、迎モ可被登用 御模様ニ無之、不一方痛苦仕候、先々御六ヶ敷 御時宜ヲ不顧、四姦臣且宮女二人之段々々業ヲ言上ニ及、先々前文之通ニ取計ヒ、宮女ハ下宅ト申場合ニ及候事、何卒今一段各罪状相糺シ、可然屹と取計ヒ度苦心ニ候ヘ共、何分ニモ從來厚御寵之面々之義、実以甚々 御時宜御六ヶ敷、是ニハ不安寢食苦心悲歎之事ニ候、且亦前関白久我内府ニハ、当春久和州・安对州杯同腹ニテ、彼

九条之廢帝之古例ヲモ探索之次第、実以不容易国賊之義唯一通り之義ニテハ衆人屈腹不仕、何卒越前上 京迄之処ニテ、イカニモ薩長江被下候

叡慮之符合之 朝議ト、衆人奉仰候様仕度懸念、彼保元・平治・承久・応仁等之 御衰微茂、此機会ニ消散、如何ニモ 朝威天下ニ相立候時節ト、深心配仕候事ナカラ、俗ニ申多勢ニ無勢、

朝廷可然輩無之、歎息仕候、吳々

上之処甚々御六ヶ敷、迎茂微力之質、取計ヒニ難及痛苦仕候、吳々口外仕間敷義ナカラ、極内々御洩し申入候、此上ハ兎モ角モ見当難付事ニテ微力之質幾重ニモ痛心候元来不好事ニハ候ヘ共、関東ヨリ前関白以下姦臣屹と御咎被 仰付候様、申来候辺ニ仕度、左ナクテハ迎モノ／＼姦ハ深く手ニハ合不申、実以痛苦候、幸所司交代之折柄故、可然人体所司代ニ被申付、右之人上京ニテ、咎辺言上ニ相成、少シモ動揺無之様仕度、且亦 勅使ヘハ一橋・越前等ヨリ申含候様仕度、吳々存候事、併大原之処、久我辺格別ニ採用之義故、其元ヨリ深々御説得ナラテハ不叶事故、右辺茂吳々御勘考、スヘテ御賢察御周旋之程、深厚ニ御依頼申入度存候事、

此儀決而当職辺ニ而申入候訳ニ而無之、親族之辺ニ而在様打明、極秘ニ申入候、決而忠懇より申込候杯、勅使ヘ洩候テハ不宜、御含置希入候、代筆、其上例之乱毫、書損之假差出し候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一三七号

文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一八・五種

包紙原寸

縦三一・五種

横 一〇五種

横四二・八種

〇六六 生麦事件ニ付晃親王ノ詠詩

六七 長藩主ヨリ破約攘夷ニ付朝廷ヘノ建言

合三通一綴

(卷)
「壬戌閏八月」

長州侯窺書之写

此度越前総裁職上京猶予之儀ニ付、從関東来文之末文
至当之事ハ御請可然、時勢難被行儀ハ御断可申上との
意味、如何被成御酌取候哉、追々被仰出候外夷拒絶之
次第ニ相係り候而之事ニ共候へは、 叡慮之旨を執と
窺定候而之文意ニ可有之哉、勿論至当之御事ハ申迄も
無之候得共、御受ニ可相成儀とハ奉存候得共、万一も
時勢難被行との御含ニ而候へは、 叡慮尊奉之事実ハ
不相立候、天下之大事を所置仕候ニは、時ニ因勢ニ随

ひ候様にてハ、御目途ハ相立不申、況や陵遅し国脈被
成御維持候は、義を以勢を制さるの御趣意ニ而御所置
無之而ハ、竟ニ因循姑息等ニ陥り可申間、其段ハ屹と
御答被 仰遣度、尤総裁職上京之儀ハ、新政当分之事
ニ候得は、猶予之儀ハ御聞濟ニ相成候而可然哉ニ奉存
候、

一青蓮院宮様御事、御方外之御体ニハ被為在候得共、当
時勢之事ニも朝議ニ被成御預候様、早々

勅命被仰出度奉存候、 殿下を奉始、御曆々様御手揃
之御事ニハ候へ共、戊午已来正義御持詰ニ而、此度御
慎解、御再任ニ迄相成候程之事ニ候へは、日々御参内
被為在候様、幾重ニも奉願候、

右一紙

叡慮之御決定ハ戊午年已来聊不被成 御動義ニ候所、
上ハ
神宮之神慮を被為窺、下モ諸侯之赤心を被聞食度との

御深衷をと不奉察、破約攘夷之御国是ニ未御疑も被為
在向ニも有之哉ニ候へ共、大膳大夫父子ニおゐてハ、
追々被仰出候

勅諭茂御沙汰書之 御旨、全以破約攘夷之

震断と奉窺 皇国之御持堅め之御良籌、出于此外間敷
と考定、先達而奉窺候六ヶ条之外、方今官武之間ニお
ゐて周旋可仕事件ハ数多有之候へ共、幕政漸々改新、
賞罰黜陟も被行候事ニ付、肝要之御国是

叡慮通速ニ致決定、外夷振慄国内警戒之

御所置第一之御急務、官武御合体之大眼目ニ付、此度
長門守之於関東之周旋方両通、勅諭之外ハ六ヶ条之
内第一条を抽き純一にして、叡慮御決定之旨、精々
申解、尽力之上、猶も官武御合体之大眼目難決定儀
ニ候へは、無致方帰洛及奏聞、此余之震断を奉待、
猶愚忠之献言をも可申上と奉存候、五ヶ年及ひ此間落
字ナラン官武御異儀之趣、根底明著、最早列藩中決而
勅文ニ泥ミ候義も有之間敷ニ付、今更不及会議、断然

独立ニ而尽力、乍不及 皇国正氣 御維持之寸輔をも
仕度、父子専心罷在候、

右一紙

右二紙、後八月三日比、十日比兩度ニ被差出候由、

先年已来被 仰出候攘夷之儀、

叡慮御決定之趣、御良策出于此他間敷候間、欽念御辱合、
深以 御感悦御事ニ候、何卒抽丹誠周旋有之 公武を始、
万人一和一致ニ而為神妙尽精力、早蛮夷拒絶ニ決定候様、
幕吏江掛合之都合ニ相成候様被遊度

叡願ニ被為 在候、此由可申達

御沙汰被為 在候事

後八月

右後八月廿四日中山殿江長家老兩人御呼出し御渡候御
書面之写、

文書原寸 縦二七・六糎 横四〇糎 二枚

三六 久光公ヨリ議奏衆へノ建言

幕府ニ対スル朝廷ノ態度

〔端裏書〕
「戊閏八月」

一 此節上京仕、関東之次第 尊卿方迄委細言上仕候処、
出格之

叡慮ヲ以參 内可被 仰付旨承知仕、微賤之身実ニ恐
多奉存、再三固辞仕候得共、是非御受申上候様、尊卿
方ヨリ達而被 仰聞候ニ付、不得止事御受申上、參

内仕候処、 尊卿方ヲ以関東之趣逐一 御尋問被為在
殊ニ重キ御品迄モ拜領被 仰付、誠以武門之面目、恐
入難有仕合、毫端ニ難述次第ニ御座候、此上は愈以不
肖之身ニ及候程は尽力仕念慮^{心座}ニ御座候、就而乍恐當時
之 朝議粗奉承知候得は、諸国之大名等

公武之御為、周旋之義相願候者共江は、皆 御内命被
仰下候由、天下ノ人心ヲ不被為失様トノ 御評議ニ而、
御尤之御事とは奉存候得共、今般関東江
勅使被差下、私ニモ下向被 仰付、一橋・越前致登用、

大政变革有之候様被 仰下候処、初は六か敷模様ニ御
座候得共、遂ニ御受相成、恐悦之御事ニ奉存候、此上は
朝議確乎トシテ不被為動、匹夫之激論一切御採用不被

為在、関東之処置静ニ 御觀察被遊度御事と奉存候、
方今之処ニ而、諸藩ヲ 御膝元江被召寄候得は、関東
之処置御疑之筋ニ相当り、於彼地モ却而氣受不宣、
御一和之処ニは參り兼可申哉と、甚懸念奉存候、依之
御内命被 仰下候諸藩江は、此節勅使関東江被差下、

一橋・越前登用いたし、政事变革之義被 仰下候処、御
受相成候ニ付、暫彼兩人政事奉行之次第、静ニ 御觀
察被遊候、
叡慮ニ候間、此涯之処上京周旋ニ不被為及候、若此未
於関東、 朝廷尊崇之道忘却いたし、大政之旧弊・外
夷之処置等变革モ無之、天下人心不和合之機相願候ハ

、速ニ
御内命可被為在候間、其節は不移時日上京尽力可致旨
懇ニ被 仰下、御請書差上候様被 仰付度御事と奉存

候、若其節ニ至リ參向不仕者モ御座候ハ、違

勅ニ相違無御座候間、屹と殿罰被 仰付度奉存候、

但長州は始ヨリ 將軍家御上洛之義致主張周旋之事

御座候ニ付、右之義猶以尽力被 仰付、且今般被

命候二か条之事_{内大教之義は奉行無御座候ニ付}御座候ニ付、旁相濟迄之間、是

迄之通被 仰付、土州モ同様被 仰付度奉存候、

一当関白殿下 御辭職之御事、期月

勅約被為在候由奉承知候ニ付而は、辭表被差出候節は、

其通

勅許被為在度御事と奉存候、

跡御人体は、一条左府公御当然之御事と奉存候、

乍併当節不容易時勢ニ付、内覧は如故、当殿下江被

命度御事と奉存候、且 青蓮宮院御事、天下有志ノ人

心奉歸嚮候ニ付、 朝政御相談被 _{為在候様乍恐} 仰出度奉存候、

但一条公左府御辭退之節は、鷹司前右府公ヲ左府江

御転任被為在度奉存候、

右之趣至愚短才之身ニテ恐懼至極ニ奉存候得共、不

容易時勢存慮十分不申上候而は、不忠之罪難免と存

詰、 尊卿方迄献言仕候間、委細奏 聞被成下度、

伏而奉願上候、誠惶敬白、

閏八月 日

島津三郎

源久光

中山大納言様

三条大納言様

野宮宰相様

同草稿

一^後当関白殿下御辭職之御事

勅約被為 在候由ニ奉承知候ニ就而は、辭表被差出候

節は其通

勅許無御座候而は相濟間敷併跡、御人体之儀_{「被為在度御事と奉存候」}當時柄御

評義御六ヶ敷可被為在奉存候、一条左府公御当然之御

事と奉存候ニ付、左府公江 関白職 宣下被 仰付、_出

當時柄仰事御座候ニ付、内覽之儀は如故当殿下江如故被^候命度奉存候、且青蓮院宮御事、天下有志之人心奉歸嚮由ニ付、朝議御相談被^候仰出度奉存候、^右申^分削除示印アリ上候義、微賤不肖之身ニテ恐懼至極ニ御座候得共、不容易時勢存慮不申上候モ却而不忠ト奉存、尊卿方迄申上候間兩日中奏聞被成下度奉願候、

尤一条公左府御辞退之節は、鷹司前右府公左府江被命度奉存候、

^前一此節上京仕候関東之次第、尊卿方迄巨細言上仕候、復命仕候処、別段之

叡慮ヲ以參内被仰付旨承知仕、微賤之身恐多奉存、再三固辞仕候得共、是非御受申上候様尊卿方より被仰聞候ニ付、不得止事御受申上、参内仕候処、尊卿方ヲ以関東之次第逐一御尋問被為在、殊ニ重キ御品迄モ拝領被仰付、誠以武門之面目恐入難有仕合毫端ニ難述次第ニ御座候、此上は愈以赤心報國之志程は尽力

仕念慮ニ御座候、就而乍恐當時之朝議粗奉承知候得は、諸国之大名等銘々周旋之義相願候者江は、皆

御内命被仰下候由、天下ノ人心ヲ不被為失様トノ御評義とは奉存御事とは奉存候得共、今般関東江

勅使被差定、私ニも下向被仰付、一橋越前致登用之処被仰下候処、初は六ヶ敷模樣ニ御座候得共、遂ニ思召

通承知相成、恐悦之御事ニ奉存候、就而此上は先兩人之処置静に御觀察被遊度御事ト奉存候、只今之処ニ

而諸藩ヲ御膝元江被召寄候得は、関東之処置御疑之筋ニ相当り、於彼地モ却而氣受不宜、御一和之処ニは

参り兼可申哉と、懸念至極奉存候、依之御内命被仰下候諸藩江は此節勅使関東江被差下、先一橋越前登用

之義被仰下候処、御受相成候ニ付、暫彼兩人政事奉行之次第、静ニ御觀察被遊候、

叡慮ニ候間、此涯之処上京周旋ニ不被為及候、乍併若此末於関東之処置、朝廷尊崇之道忘却いたし天下之

政事变革も無之、天下人心不和合之機相願候ハ、

速ニ 御内命可被為在候間、其節は時日ヲ不移、上京

周旋尽力可致旨、懇ニ被 仰下願御事と奉存候、若其

節參向不仕大名も有之候ハ、匿勅ニ相違無之候間、

屹と蔽罰被 仰付度奉存候、

尤諸藩江は御請書差出候様被仰下候ハ、猶以可然

奉存候、但長州之義は始ヨリ 將軍家御上洛之義周

旋之事ニ付、右之義猶以尽力、且此度被仰付ニケ条

之事モ御座候付、旁相濟迄之間、是迄通滞京罷在候

様被仰付度、長州モ同様被 仰付度奉存候、

右之趣至愚短才之身ニ而熱權至極ニ奉存候得共不肖微賤之身ヲ不願

不容易時勢存慮十分不申上候而、却而不忠之名ヲ不免

と存詰、尊卿方迄申上候間、不日ニ兩日 委細奉 聞被成

下度、伏而奉願候、誠惶敬白、

閏八月 日

島津三郎

源久光

議奏來

文書原寸 縦一七種 横二八種

〇元 英代理公使「ジョン・ニール」ヨリ外国

奉行へノ書翰及答書

元〇 近衛忠房卿より島津三郎公へ

近衛閑白辭職の件

〔包紙ウラ書〕 忠房

〔朱〕 誠

〔封紙ウラ書〕

〔朱〕 誠

〔封紙ウラ書〕 忠房

〔朱〕 誠

〔封紙ウラ書〕 内密々入覽

尚々時氣悪敷、御自愛專ニ存候、明日青蓮院宮

〔中山〕 〔本田〕 〔藤井〕 へ忠左衛門・弥右衛門・良節等出頭候様御申示可

給候、剋限ハ申来らず候間、別段ニ不申入候事、

弥御勇健珍重ニ存候、抑一昨日は御出恭存候、先々其御

方御參 朝モ無滞相濟安心候、嗚々御草臥之事と察入候、

扱御辭職之事、段々御深切ニ御咄共被下重覺、殿下ニ茂御安心之御事ニ候、重大之御政務ニ、私之論ハ無之事ナカラ、対閑東候テモ、矢張其御方トハ親族之義、却テ御互ニ申ニ申サレヌ次第モ在之、周旋ニ差障リ候事モ随分在之候、其御方御周旋辺ニも却テ不宜義、乍去有志之向へはトント右様之義難申義ニ候へ共、是ハ屹ト互ニ不宜候、旁且ハ最初ヨリ被蒙 勅約候義、勅約偽ニ相成候而ハ歎ケ敷モ被存候間、此処ニ而御辭職、何卒一条左府公へ被 宣下、殿下之処ハ内覽如旧 宣下ニテ、当年内來春迄ハ、御政事向御勤仕被成候御事ト被存候候、何卒其御方より議奏衆辺へ、此意味合モ被込、尤其御方御趣意ニ御取ナシ給、御周旋ニ而、程克成就ニ相成候様致度、弥辭職被聞召候ト申義、見当サへ相付候へハ、早々可差出被存候、呉々御周旋之程分而、希度存候、且亦鷹司前右大臣殿ニも先途不被遂候テハ、同家之義甚歎入候、一向此公へ被 宣下候而モ宜敷義、左スレハ重疊安心ノ之事ニ候、乍併此公ニテハ内覽如旧之義ハ、御

断被申上度由ニ候、呉々御憐察給、分テ御周旋御頼申入度候、此儀殿下御所存ト申義ニ、有志之向々ハ差聞え候而ハ、屹と差支候、旁其御方御趣意ニ而、御周旋御頼申入度候、例之御心安ニ任せ、打明在体ニ申入候、呉々宜々希入候事、

閏八月十一日朝認

乱書御覽分

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一三九号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・三種 包紙原寸 縦三一種
横 一一〇種 横四三種

元一 京都原田才之丞聞取書

三州総持寺家來香山源七郎身上ニ付

三州総持寺家來香山源七郎旅宿江見舞候付、直談仕候形行、左之通御座候、

一 此御方様江書付差上候、当夜正親町三条殿役所江形行相届ケ置候由、

一 真太郎親新右衛門、当春病死之次第、不審之訊為有之

哉ニ御座候、

一人母尼か崎家士之娘ニ而、真太郎召列参候ハ、高
百石可宛行之儀ニ而列越候処、真太郎も夫々被殺杯之
評判承彼公伝前文源七郎方手ニ入候由、

一真太郎事麻疹後ニ而、夜分ニハ乳ヲ尋、母ヲ呼候付、大

坂辺鄙之場所已知之人有之、一昨十日彼方江差遣候由、

一正親町三条殿之御方江、此御方様ヨリ 御沙汰可被成
下儀を只管懇願之筋ニ相見得申候、

右之通承届候、以上、

閏八月十二日

原田才之丞

文書原寸 縦一四・五種 横七〇・五種

二三 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

進物礼詞及東寺借用ノ件

二通

(包紙ウツ書) 内密々

島津三郎殿 忠房

御右

〔朱〕緘〕

〔朱〕

「戌閏八月十三日」

二九二ノ一

(封紙ウツ書)

内密入覽後投火

島津三郎殿

忠房

御右

〔朱〕緘〕 (筆書緘ノ上ニ朱緘押印)

〔緘〕

尚々時氣御自愛と專一ニ存候事、

兎角難晴陰定候、弥勇健珍重候、抑一昨日ハ忠左衛門来、
御伝言之趣、何モ承知候、其砌何寄之御品々被下、御丁
寧々ノ之事喜悅候、参 朝出来、御挨拶是亦御丁寧御心
入成事、别而おさ々不浅、御礼申入候、殿下・雅君・
信君等よりも宜被仰入度由ニ候、呉々御心入厚々御礼申
入候事、

閏八月十三日

追啓

中山・正親町三条辺へも御丁寧之御進物之由ニ伝
聞候、右ニ付内々御心得迄ニ申入置候、堂上抔へ
余り過分之御進物ハ、却テ方今衆人之気合ニ拘り、
不宜候間、御心得置之様存候、近日青蓮院宮へ茂
御出殿之事ト存候間、何モ御承知置之様存候、夫
共御由緒在之格別之先ハ、御丁寧ニテ不差支候事
ニ候、一寸御心得ニ申入置候事、

文書原寸 縦一八糎 横六七糎

二九二ノ二

(封紙ウツ書)

内々

三郎殿

御右

忠房

□ (朱) 紙

□

□

┌

別紙ニ申入候、東寺院家真情院ヨリ極密々被頼候、何卒
東寺寺内外藩へ借用致候義断度、実ハ先達而より因州・

芸州其外諸方より借受度旨申来、大樹上洛之節、專借受
度旨ニテ、度々申来甚迷惑之由、薩州・長州ナレハ何時
成共借度旨、殊ニ薩州ナレハ大慶之由、何卒拙家より其
御方へ申入吳ト度々之頼ニ候、尤唯今ト申訳ニ而も無之、
大樹上洛之砌ニ而宜候間、唯今ヨリ借受度旨申込被置候
へハ、先安心之旨ニ候、仍右申入候、成不成之義、早々
承度、内々如此候也、

文書原寸 縦一八糎 包紙原寸 縦三二糎

横五〇糎

横四三糎

三三 久光公へ建策ノ御沙汰書

正親町三条大納言ヨリ御渡

(包紙ウツ書)

一閏八月十五日

正親町三条大納言卿より被相渡候、┌

過日言上之次第被

聞食、段々斡旋之儀、深御満足ニ被 思食候、巨細内々
御透聴も被為有候得共、猶向後諸大名御取扱方、其余総

体御処置緊要、定而屹と見込方可有之

叡察被為有候ニ付、斯迄尽力も有之候事故、

輦下ニ被留置、治国之良策時々被

聞食度 思召候得共、無抛次第ニ而、乍暫近々帰国ニも

相成候得は、社稷御為方之儀心付之分、底意蘊奥之処、

極密献策有之候者、厚

宸表ニ被籠置、錦囊之策と被成置度

思召候間、聊も不遺意底、国家御為、不憚機密不避忌諱、

極内々言上有之候様被遊度候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一四〇号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五糎 包紙原寸 縦二七・五糎
横 八六糎 横 三九糎

二四 近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

意見書提出ノ件

(包紙ウツ書)
「極内密々」

島津三郎殿 忠房

几下

(朱 誠) (朱)
「戌閏八月」

(封紙ウツ書)
「極内密々」

島津三郎殿 忠房
几下投中

(朱 誠)

尚々明烏ハ御出御待申入候、議奏衆辺ハ御演舌ニ
而モ宜候間、精々在体ニ被申聞候様、御頼申入置
候事、

追日秋冷増加候、弥御勇健之条珍重、尚承度存候、抑昨
日は忠左衛門入来、御伝言之趣令承知、殿下へも申上置
候事ニ而候、其後帯刀ニも入来、何モ承候事ニ而候、明
日辰半頃ニ弥御出可被下様御頼申入候、青門ニも御出之
様申入置、議奏衆ニも被来候間、篤ト御打明ケ、何か被
申聞候様、呉々御頼申入置度候、且亦殿下愚拙等昨夜よ
りモ色々ト申談居候事ニ而、矢張御心底残り無御打明ケ
ニ而、
朝議之御決意ニ相成候様之処、具ニ御書取ニテ、是ハ極

密々拙者迄御差出し被下様、左スレハ、内々被入 天覽、尤議奏衆へも被為見間敷、殿下思召候間、極内密此方迄御書取御差出し被下様、決而く不洩様精々天覽且殿下限り之思召ニ候、併青門へハ極内々入覽ニ可相成、其外一覽ニ不相成、殿下被成候間、何卒極内々御頼申入置度存候事、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一四一号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八種 包紙原寸 縦三二種 横八九種 横四四種

三三 近衛忠熙忠房両卿ヨリ島津三郎殿へ

久光公建白書ノ件

(包紙クツ書) 一戊閏八月十一日

近衛家 御両殿様ヨリ御直ニ御渡之御書取」

天覽之外決而他見致間敷候間、御趣意在体ニ打明、御書取給候様、呉々不洩段、御安意可在存候事、

廿一日

忠房

忠熙

三郎殿

文書原寸 縦一八種 包紙原寸 縦二七・五種 横三一・五種 横 三七種

〇三六 英国代理公使ヨリ生麦事件ニ付外国奉行へノ督促状

三七 京都本田弥右衛門報告

久光公帰国ニ付京都ヨリ伏見へノ道順

伏見街道

御下伏之節

御道筋

錦御屋敷

東洞院通

四条通

寺町通

五条通

伏見海道

黒染 鐘屋町

樋之上 両替町

丹波橋通 箱屋町

下板橋 伏見 御屋敷

右之通御座候、以上、

京都

本田弥右衛門

戊 閏八月廿一日

文書原寸 縦一四・五糎 横三五糎

三六 久光公ヨリ近衛家へ提出ノ意見書

攘夷其他ノ件

〔瑞裏書〕 戊閏八月廿一日 近衛家江差上候書留草案

今般不肖之小臣ニ存慮無腹臧、不憚忌諱不避嫌疑、献言仕候様承知仕、誠以恐入難有仕合奉存候、且先日は出格之

思召ヲ以參 内被 仰付候旨承知仕、無位無官之身奉汚

朝廷候儀ニ付、再三固辭仕候得共、是非御受申上候様承知仕、無拋御受申上參 内仕候処、関東之模様逐一御尋問被為在、殊ニ重キ御品迄も拜領被 仰付、実ニ武門之面目、別而難有仕合、毫端ニ難尺次第ニ奉存候、此上は不肖之身ニ及候程は、愈以抽忠勤度奉存候得共、從來至愚短才ニ而 御為ニ相成候程之良策モ存付不申、実以赤面至極恐入奉存候、然共偶承知仕候義沈黙仕候而は、却而不忠之至ニ付、鄙見之趣左条ニ申上候間、乍恐聖断ヲ以宜 御取捨被成下度、伏而奉希上候、

一當時

皇国之形勢細ニ觀察仕候処、外ニは夷賊頻ニ跋扈之威ヲ逞シ、内ニは諸藩漸ク割拠ノ形ヲ釀成シ、於関東は尚旧弊ヲ一洗無之不仕、徒ニ因循ノ姿ニ有之、諸国有志之者共は、攘夷ノ説ヲ主張仕激烈愉快ノ論ヲ唱へ、実以危急存亡之時ニシテ、終ニは州郡戦争ノ衝ト相成候半故と大息仕罷在候、然処今般於

朝廷姦臣御退黜美政之御一条実ニ恐悅至極、小臣等并躍仕

候次第ニ御座候、此上は愈以姦党之邪謀ニ不被為惑、

關東之処權勢ニ御恐怖不被為在置静ニ被遊御觀察

朝議確乎トシテ御動搖不被為在様、奉伏願候事、

一 九条前関白姦党ノ巨魁御座候ニ付而は、今通被 召置

候而は、不被為濟御事と奉存候事、

一 匹夫ノ論激烈ニ過、且己が名利ノ為ニスル事多ク御座

候得は、猥りニ 御採用不被為在様奉存候事、

一 撰家 親王家 御門跡方は勿論、其余公卿方等、当時

節忠誠ヲ以御奉公有之、聊たりとも傍觀無之様有御座

度、且先度モ申上候通、匹夫江猥りニ御面談之義、嚴

密御取締被為在度奉存候事、

一 青蓮院御門跡 御政事 御相談、且御還俗之御事、先

日口上ヲ以奉願候通、猶又御評決奉願候事、

一 公卿方 御進退之義ニ付、以来関東ヨリ種々申上候共

朝廷正議被為立候上は、一切御動搖不被為在様奉存候

事、

一 此条後ニアリ、書込ハシ
松平肥後守御当地守護御糺シ之事も、先日申上候通、

速ニ被 仰出度奉存候事、

一 此節関東江被 命候義は勿論、以来迎も何事ニ不限被

仰下候条々御受申上候後、申渡遅延相成候ハ、時々

御催促被為 在度奉存候、

勅命被為在候以後、其佩ニ而被召置候而は、第一

朝威ニ被為拘不輕御事と、乍恐奉存候事、

一 ^{ヌウラニアリ} 諸大名縁ヲ求テ周旋相願候者有之候由、当春小臣滞京

之節迄は、何共不申出傍觀之模様ニ御座候処、於関東

一 橋越前登用之事等、

勅諭通遵奉有之候故、時勢ヲ恐レ候義ニ而、俗諺ニ申

候日和見ノ心底と推察仕候、粗承知仕候得は、多分ハ

内願通、 御内命被為在候由、天下ノ人心ヲ不被為失

為ノ 御趣向とは奉恐察候得共、内願之者正邪虚実モ

御探索無之、猥りニ御許容被為在候而は、乍恐

朝威ニモ可被為拘哉と恐入奉存候、殊ニ征夷ノ任ヲ差

置、且無謀ノ論等申上候者モ御座候哉ニ伝承仕候得は、

尚以趣意能々御糺シ、実以勤 王ニ相違無之者江は、

現事相行れ候策も御座候者江は屹と

御内命被為在候様奉存候、併於関東モ先は一橋越前登用、大政変革之趣向ニ相見得候間、此涯之処諸大名上洛ニは及申間敷奉存候、此末於関東大政之旧弊、外夷之処置等変革モ無之、

朝廷尊崇之道モ忘却之姿ニ有之候ハ、此節ハ速ニ上京尽力仕候様、嚴重御達被為在、御讀書差上候様、被仰渡度奉存候、其期ニ至リ若參向不仕者御座候ハ、違

勅ニ相違無御座間、敵罰ニ被処候様奉存候事、

前別紙但書コ、ニ書コムベシ於関東一橋越前登用有之、旧弊万事変革之趣向とは見受候

得共、何分現事延引相成申候、若今通ニ而相過候而は亦々天下之衆心動揺可仕欤と甚危念至極ニ御座候、依之熟考仕候処、兎角閣老は勿論、幕役人之心底、一橋越前ニ大権不帰様トノ趣意ニ相見得申候、被察兩人ニ大権無之候而は、逆も

勅命通變革も難被行乍恐、御宸襟も被安兼候御儀と奉

存候 兩人之義は人望之帰スル処ニ候得は大政御座候

間、大政之義兩人ニ委任有之候様、此涯屹度

御内命被為在度御事と奉存候、若兩人委任之上猶變革不相成候ハ、最早無致方次第御座候間、其節は機變ニ応し御決心ノ御処置被為在候様、乍恐奉存候事、

一大坂・兵庫・堺之地は、畿内要柙之津湊ニ御座候処、当分大坂は因州・備前・土州、兵庫は長州、堺は立花、幕命ヲ受警衛仕候、小臣鄙見ニは聊落着難仕御座候間、幸長土之二藩滞京仕候ニ付、右兩地之警衛当分通ニ而、

外寇防戦実事十分行届候哉之旨、委曲御尋問被為在度

御答候、品ニ依り屹と御沙汰被為在度御事と奉存候事、

(以下抹消アリ)
一攘夷之儀は前文申上候通方今之一大重事ニ而

別紙ニ詳也(九九号文書)
公武御隔意之本源と奉存候、尤當時於関東条約取替シ

相成候上之事ニ御座候得は、無故攘夷と被仰出候而モ、決而故障申立御受有御座間敷、左様御座候而は、第一朝威ニモ被為拘、不輕御事と恐入奉存候、殊ニ此次第伝承仕候ハ、浪士共又々蜂起可仕欤と懸念奉存候、

横浜・長崎等在留之夷人迄打払之義は、関東ニ御命候ニモ及不申、小臣一手ヲ以十分逐斥仕事御座候得共、其後之処置当座ニは御受難申上御座候、其故は条約取結之上、無故此方より兵端ヲ開キ候へ、夷人共不義非道申立、同盟之諸国相語らひ、速ニ軍艦數十艘差向ケ、江戸海は勿論、諸国要地之津湊ニ乱妨仕、防禦不行届候処より、内地致侵入候義顯然ニ御座候、小臣武門之身ヲ以か様申上候は不似合義と可被思召候得共、皇國中三百年來之太平、人心驕墮之風習(傳)ニ而偶慷慨之者も有之候得共、只々氣象迄ニ而、実場不案内之武士共必勝之策無覺束奉存候、併陸戦は古來より我長する処ニ御座候得は、あながち敗走而已は仕間敷、夷賊陸戦勝利無之と存候節は、数十艘之軍艦諸国要地之海口ニ出没仕、江戸大坂其外津湊之運路ヲ妨候へ、是非我ヨリモ軍艦差向逐斥不仕候而は相成間敷、水戦は我短なる処ニ御座候得は、勝算無覺束奉存候、然時は皇國中おのつから窮迫ニ及び、不戦シテ屈辱せらるゝ

ニ至り候義、必然ノ勢ニ御座候、就而熟考仕候処、兎角於関東大政之旧弊致一新、武備充実之処

御内命被為在候義御急務と奉存候、徒ニ筆紙上計ニ而御実意ニ御世話無御座候而は、席上之空論と相成、苟且因循之四字消失仕候期有御座間敷、長大息之次第ニ御座候、窃ニ伝承仕候得は迅速ニ攘夷之御趣向ニは不被為在候得共、即今攘夷不被 仰出候得は、武備充実之期無之との朝議ニ被為在候由、是亦御尤之御事ニは御座候得共、攘夷顯然と被仰出候而は、於小臣は不謂禍害ヲ醸出シ候半欵と恐入奉存候、其子細は激烈之士、諸国ニ充満仕候得は、此

御内命伝承仕候へ、弥憤発仕、武備不充実之時世モ不計端的ニ横浜等江攻撃ノ策ヲ運シ、幕府モ鎮靜難相成時機ニ至り候は必然ニ御座候、右通御座候而は、却而外夷ノ術中ニ陥り、

皇国一統混乱之基ニ而、清国之覆轍ヲ被為踏候御事と別而恐入奉存候、依之前文申上候通、於関東大政之旧

弊致一新、武備充実之御世話御実意モ被行届候様有御座度奉存候、乍恐 東照宮以来天下之大政只

皇國中迄静謐之為、尾大不掉之患害無之様トノ御処置ニ而、外寇防禦之義は決而難相成勢ニ御座候、方今之時節ニ而は武備充実シテ、外夷ノ輕侮ヲ不受様之御処置、專要と奉存候、其於御処置は第一諸藩之疲弊御救ニ有之候、疲弊ノ本は參勤妻子在府火消御手伝等ニ有之候得は、右件々此涯都而御猶余ニ而、武備充実仕候様、

御実意ニ被 仰渡候ハ、諸藩モ是ヲ以必定價発興起可仕と奉存候、若其上偷安遊墮之弊習不相改者は、屹と敵罰被 仰付度奉存候、右様之御処置ニ御变革御座候ハ、武備おのつから充実仕、士氣愈盛大ニ罷成、夷賊ヲ万里ノ外ニ攘斥仕候義、掌握之中ニ御座候、雖然當時之模様ニ而於関東右様断然たる処置相成間敷、矢張暴威ヲ以諸藩ヲ屈服之手段而已ニ可有之推察仕候得は、乍恐

聖上之御英断ヲ以不被 仰下ニ而は、亦も武備充実、

外寇攘斥之期有御座間敷、偏ニ嘆息痛恨仕次第ニ御座

候事、
(ニコマテ抹遣)

右条々奉隨

御内命、鄙見之趣申上候^{十分}、忌諱嫌疑^問御座候付、

乍恐秘密ニ被 召置、世上ニ流布不仕候様被成下度

偏ニ奉願上候、誠惶敬白、

戊閏八月

一 故井伊掃部頭在職中

禁裏六門警衛ト称シ、新タニ番人召置候儀は、何等之趣意ニ候哉、非常守護之為ニ候得は、古来より被召置候番人も有之事ニ候ハすや、外夷窺隙之時節、尚又敵重ト申訳ニ候得は、六門辺之守護ニ而は、甚以切迫ニ過キ候様ニ而、^{外ニ}屹度遠略も可有之候間、可為無用候常底窃盜ヲ警候而已之趣意ニ候ハ、外ニ処分も可有之哉只今之形容ニ而は、全

御所ヲ擁塞いたし候ニ似寄、以之外之儀、是か為ニ下

人心之疑論も致沸騰候ニ付、以来前例ニ被復候而、其
余全体之警衛は大藩二三名江交代致輪番候様、幕府よ
り手厚下知有之度、尤松平肥後守御当地守護之儀は速
ニ免許有之候様左無候而は是以人心疑念之基たるの旨
屹度被 仰出度奉存候事、

一八 今般非常之以

聖断 勅使被差下、一橋越前出頭相成候上、猶国是之
議論可被聞召間、越前上洛仕候様被仰下候処、兩人登
用相成候而も、越前上洛之義は国是之議論評決之後な
らてハ難仕候ニ付、御猶予可被下旨書取を以願出候、
就而は此涯上洛之程合無覚束候間、猶又御催促被 仰
出度尤大政変革ニ付而は、当時世ニ応し、事之大小緩
急之次第も可有之候ニ付、眼目之か条ヲ評決いたし、
速ニ可致上洛、国是之論ニ付而は

叡慮之御旨も被為在、親敷被 聞召度

思召ニ候と之御趣意ニ而御達有之度奉存候、若越前上洛仕候ハ、其上ニ而

御尋問之次第ハ第一夷狄掃攘之義、十年内可及拒絶旨、

先幕役共御受申上候事ニ付、其処置即今より之見当如

何、大綱之旨趣被 聞召度次第尤右攘夷之義ハ不容易訳

柄ニ付、大小藩一同同心戮力不致候而は難行事候ニ付、

上ハ親王・撰家・公卿、幕府より、下は三家三卿列藩国

之大小藩ニ至る迄、無残朝廷江為致猷白候様被遊度

思召ニ候、左候ハ、時宜ニ従ひ、篤と

御決議之儀は、右撰家御相伴之上可被 仰出候旨、

被命度奉存候事、

文書原寸 縦一七種 横一九九種

三九 久光公ヨリ近衛家ニ提出ノ意見書草案

武備充実外寇逐斥

(端裏書)
一閏八月廿二日

近衛家江差上候草案」

攘夷之儀は方今之一大重事ニ而

公武御隔意之根源と奉存候、尤当時之勢ニ而は、於関東

条約御取替シ相成候上之事ニ御座候得は、無故攘夷被
仰出候而モ、決而於關東御受仕御座間敷故障筋種々申上
候ニ相違無御座候、左様御座候得は、第一
朝廷之御威光ニモ相拘り、不輕御事と恐入奉存候、殊ニ
此趣伝承仕候ハ、浪士共又々蜂起可仕欵と、甚危念奉
存候、併横浜長崎等在留之夷人迄之義は、關東ニ被命候
ニモ及不申、私一手ヲ以十分逐斥仕事御座候へ共、其後
之処置当座ニは御受難申上御座候、其故は条約取結之上、
無故此方より兵端ヲ開キ候而は、夷人共不義非道申立、
同盟之國ニ相結ひ、速ニ軍艦數十艘差向ケ、江戸海は勿
論、諸國要地之津湊江乱妨仕、防禦不行届之処より、内
地へ乱入いたし候義顯然ニ御座候私義武門之身ニ而か様
申上候は不似合義と可被

存候節は、数十艘之軍艦処々要地之海口ニ出沒いたし、
江戸大坂其外津湊之運路ヲ妨候ハ、是非軍艦差出追扱
不申候而は相成間敷、水戦は我短なる処ニ御座候得は、
勝算無覚東奉存候、然時はおのつから 皇國中窮迫ニ及
ひ、不戦して屈辱せらるゝニ至候義必然之勢ニ御座候、
就而愚考仕候処、兎角於關東大政之旧弊御一新、武備充
實之処御急務と奉存候、徒ニ唯筆紙上計ニ而、御実意ニ
御世話無御座候而は、因循苟且之四字、終ニ消失仕候期
有御座間敷、長大息之次第ニ御座候、粗承知仕候得は、
迅速ニ攘夷と申御事ニは無御座候得共、攘夷と不被 仰
出候得は、武備充實之期無之との 朝議ニ被為在候由、
是又尤之御事ニは御座候得共、方今之処ニ而攘夷顯然と
被 仰出候而は、不謂禍害ヲ醸出候半欵、其子細は激烈
之士共、此命ヲ伝承仕候ハ、弥憤発仕、武備不充實之
時世も不計、端的ニ横浜長崎等江攻撃之策ヲ主張仕、
幕府も鎮靜難相成時機に至り候は必然ニ御座候、左様御
座候而は、外夷ノ術中ニ陥り、皇國一統混乱之基、清國

ノ覆轍ヲ被為踏候御事と、別而恐入奉存候、依之前文申上候通、於関東大政之旧弊御變革一新、武備充実之御世話、御実意ニ御主張有之候様仕度奉存候、乍恐

東照宮以来天下之大政只 皇国中迄一統静謐之為ニ而、尾大

不掉之患無之様之御処置之外寇防禦之類は難相成御座候と奉恐察候、方今之勢ニ而は武

備堅固ニ外夷之輕侮ヲ不受様之御処置無之候而は相成間敷其は兎角諸藩之疲弊

御救御処置は第一ニ有之候、疲弊之本は參勤、妻子出府、火消御手伝

等ニ有之候ニ付、右之件々都而御猶予ニ而、武備充実仕

候様、御実意ニ被仰渡候ハ、諸藩モ是ヲ以必定憤発可

仕と奉存候、若其上倫安遊墮之弊習俗不相改者は、屹と

嚴罰被仰付度奉存候、右様之御処置ニ御變革御座候得は、

武備はおのつから充実仕、夷狄ヲ万里之外ニ攘斥仕候義、

掌握之中ニ御座候、然、雖於関東、右通断然たる処置ハ致間敷、猶繁駁ヲ扱又鎖国航海等之説は、別ニ愚考御

座候得共、以諸藩ヲ庄服之手段而已ニ可有之候得は、朝廷之御明断ヲ以不被仰下候而は、逆も事長ク御座候故、省略仕候、

武備充実、外寇逐斥之処難相成奉存候事右之趣短才之鄙見、御案内之御事ニ而奉存候得共、

献芹之微志多罪ヲ忘レ、献言仕候、若 御採用被為在

候御事御座候ハ、別而難有奉存候、誠惶敬白、

文書原寸 縦一七種 横七二種

三〇 大原重徳卿より島津三郎公へ 二通

大原卿より贈物の件

〔封紙ウツ書〕 島津三郎殿 重徳

秋霖鬱然候、逾御清康珍喜万福候、扱此度ハ無抛御帰国、珍重ニハ存候へとも至極残念ニ存候、昨日ハ緩談辱存候、其砌申述候通り、貴兄之御悦小子之難有さハ譬ルニ物な候、且又乍毎度、七月廿六日、中山・大久保の事ハ実以辱、全それ故ニ小子十分之心力ヲ得、埒明候事ニて、全貴家助力、此事ハ終身不相忘事ニて辱、貴兄江も厚ク御礼申入候、夫のミならず発足前より、事々御セわ、御家来ヲ被付 勅使之威光も加り、在府中段々御厚配、何かニ御礼難申尽、何ソ御礼と存候へとも、御承知ノ小祿者、迎も進上候様のものハ無之、色々思案の中ニ、折節

此間御恩賜之御衣、長ヲ切取候ニ付、ケ様之御太刀袋ヲ

存付候、此ひもハ即 御冠掛緒拜領、之ニテ即御あか練

ニ候、永ク御秘藏可被下候、且又此襖ノマクリニ二枚見苦

候へとも、先年炎焼之砌、御取出シニ相成候、清涼殿之御

襖ニテ候、造 内裏御用掛勤居候故、分配ニテ拜領いたし

有之候品ニテ、きずも付見苦ハ候へとも、めつら敷めて

度御品ニ候間、御譲り申候、御居間ノ屏風ニても御仕立被

成候ハ、と存候、四角ニ明候処ハ、色紙ニ歌有之候、是

ハ従迹こしらへ進入いたし候、花生ハ常の物詣地、此度

の心、大ハ貴兄小ハ小子、御一笑く、文この内ハめく

敷品ニ候へとも、進物もかたく敷品故、御家内の御ミ

やけにても可相成と御目にかけて候、早々、以上、

後八月廿二日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一四二号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五糎 横六五・五糎

書添

御襖ノマクリ浮島ケ原ノ色紙未調不申候、扱々延引嚙御

待遠ニ可有之候へとも、暫御宥恕可被下候、精々急キ出

来次第ニ可進と存候、扱又御帰国かけ置土産の御礼、其

節書中ニも不認、甚不都合御免可被下候、不二ノ画至極

妙、日々相楽候、唐紙ハ此節追々被頼物有之、乍取込す

き故相認遣し候、至極当用ニ相成、厚々辱御礼申入候、

扱又於 陽明家一寸御咄し申候、貴兄と不中之辺ニテ浮

説の事何故やら不相分候へとも、何分実事ニてなき故歟

其後とんと沙汰不得、但貴兄御奇計ヲ被施候哉、何分何

とも不申様ニ相成、今ニ無事安心いたし候事ニ候、任便

一寸為御知申入候、大久保に此事はなし致し有之候故、

安心之段御申聞セ可給候也、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一四九ノ

二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五糎 横二六・五糎

三〇一 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

久光公ノ帰国ヲ惜ム

〔包紙ウツ巻〕
一島津三郎殿 重徳

〔封紙ウツ巻〕
一島津三郎殿 重徳

御答緩く可給候、

連日秋雨鬱々候、誠ニ昨烏ハ緩談ヲ得本懐候、爾来御障りなく珍重万福候、陳ハ其砌風説人口ハ難禦事愚之至ニ候へとも、朝廷之御外聞ヲ恐レ候子細ヲ申述候へハ、成程との御答ニ安心致シ候、猶御含可被下候、且又御帰国ハ実ニ残念至極ニ存候、在様ハ十分言辭ヲ尽シ、是非々々御留申候心得ニ候処、事ニむりならざる御辞ニ、とんと口あき不申御尤く、乍併存意ハ貴兄虎ニテ諸猥恐伏いたし候故、只々泰然と御在京候へハ、総ニ行渡り都合宜、幕より尊崇不足之時へ、夫てハ安心ならぬ、帰国がてきぬと、貴兄が十分之処迄推上々々被成候事もでき

可申、余之大名衆ニテハ迎も其推へき不申と存候へハ、尊奉十分ハ扱置、半分も成間敷哉と存候へハ、御帰国ハ実以残念とハ此事ニ候、然ルニ談末之一事地面之事ニ至り、誠ニ御尤至極、とんとく可申筋無之、降伏いたし候、左レハ御留申候道ハ無之候故、不申述候、然ルニ一橋の様子申述候、大略御承知之趣、一橋其底意有之候てハ、何と欵不安心なる事ニテ、行々如何可有哉存候得ハ、心配此事ニ候、自然尊崇も廉立候事も無之、不当之儀も有之、堪忍も難致候ハ、尤 陽明公より御沙汰可有之候へとも、小子よりも可申入、其節ハ兼々御頼申置候、尤從來之勤 王御忠誠之事故、安心ハ致し居候へとも、右為念申入置候、猶又前条不忍形勢も有之候節ハ、小子よりも申入度候ニ付、為其不断御書通申度心組ニ候間、此段御含可被下候、書余万々御なこりおしく存候、匆々不典、

後八月廿二日

二白、追々秋冷増加可致、御旅中随分く御厭可被

成祈申候、吳々残念ニ存候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第五六七の
十四号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五糎 包紙原寸 縦 二七糎
横六九・七糎 横三九・五糎

〇三〇 薩藩ニ先鞭ヲ着ケラレタルニ対シ長人有
志ノ憤起計画

三〇一 仙台ノ建白ニ対スル朝旨
(端裏書)(朱)
「王」

戊閏八月

仙台江被相下候御書取写

建白之趣及言上、深

観感御満足被為

在候、蛮夷弘攘拒絶之儀は、先年来

観願被為 在候、然処因循之時勢、難被黙止次第茂有之

ニ付、大樹上洛之儀可被

仰出、其以前越前中将被

召登候処、大樹上洛之儀は、既被治定候由、於越前茂御
請有之候、攘夷之

勅詔追々可被下、其節は弥以建白之通、格別粉骨周旋有
之候様

御依頼被為在候事、

其許建白之意旨、征夷家江茂被申出、宜周旋有之度

思食候事、

文書原寸 縦一六・二糎 横五六・八糎

三〇二 久光公大阪邸ヨリ住吉参詣往復道筋

住吉

御参詣

御道筋

表御門東江東横町南江江戸堀

東江西横堀南江樟木橋

御渡南江東上橋

御渡南江信濃橋

御渡本町通東江界筋南江

長堀橋

御渡南江日本橋

御渡南江長町九丁目西江今宮村

住吉街道南江住吉

御参詣

御帰館

御道筋

住吉街道北江今宮村沓里塚西江

北江戎横通戎橋通戎橋

御渡北江心斎橋

御渡北江本町通西江信濃橋

御渡浜側北江東上橋

御渡北江撞木橋

御渡西江江戸堀御屋敷東横町

北江表御門

文書原寸 縦一六種 横七六種

三〇 久光公帰国ノ件

其元帰国之事、書翰ニ在之候へ共、是ハ甚痛心候、帰国
治定なれハ、前左府当職之義ハ、更ニ何迄モ御理ニ可相
成存候事、

文書原寸 縦一六種 横三八・五種

三一 久光公ヨリ国事ニ関スル朝廷ヘノ建言

(本文書ハ二九八号文書ト同文ニ付省略ス)

文書原寸 縦二八種 横四〇・五種

三二 軍用米貯蔵高覚

覚

一真米五千百八拾三石

但大坂御蔵屋鋪江時々上納仕候、

一同貳千石

但江戸御屋鋪御続米として上納仕候、

一同八千貳百拾石三斗三升三合三夕三才

但兵庫表江御積廻ニ而、小豆屋助右衛方江御預相

成申候、

一同老万九千五百拾六石六斗

但下之関ニ御座候、

合三万四千九百九石三斗三升三合三夕三才

右之通御座候間、此段奉申上候、以上、

戊閏八月

波江野休右衛門

文書原寸 縦一六種 横五三種

三六 水戸烈公贈官位其他ノ朝命

久光公手写

(端裏朱書)
「壬戌閏八月」

酒井若狹守

右は

思召有之ニ付、先達而之御加増老万石被 召上、隠居被

仰付、

若狹守養子

(兼氏)
酒井修理大夫

右は養父若狹守事、

思召有之ニ付、先達而之御加増一万石被 召上、隠居被

仰付、如家督其方江拾万三千五百五拾八石余被下、帝鑑

間席被 仰付、

右之通去ル十四日被 仰出候、

中務大輔

病氣可手間取様子ニ付、同列共迄申聞候、内存之趣被及

御聴候付、日光御宮 御靈屋御修覆并御勝手御入用掛

御内意被 仰付置候、御上洛御用も被成御免候、

右之趣周防守より以手紙申遣候由、

閏八月十六日

閏八月五日

御使水野和泉守

(兼精)
水戸中納言殿

源烈殿御事、為國家忠節尽力卓越候段、深

叡惑ニ付被追贈從二位大納言候旨、今般京都より被

仰進候、依 御使被 仰遣候、

水戸中納言殿

源烈殿御事、為國家忠節尽力卓越候段、深

叡惑ニ付被追贈從二位大納言候ニ付而は、猶又被繼其遺

志、

皇國之御為可被在丹誠段、京都より被 仰進候ニ付、

叡惑之趣厚御心得、猶此上被尺誠忠候様ニと 御意ニ候、

閏八月五日

御座間

松平容堂

京都より被

仰進候趣も有之候ニ付、國家之為心付候儀は、無遠慮との

上意ニ候、

閏八月八日

松平肥後守
(容休)

今度京都守護職在京被

仰付候ニ付而は、守護職中御役知五万石被下、場所之儀

は追而可相達候、

同人

今度京都守護職在京被 仰付候ニ付而は、彼是入費も不

少儀ニ付、出格之 思召を以金三万兩拜借被 仰付候、

右於奧相濟

中山大納言
(忠能)

正親町三条大納言
(隆實)

右被伺進退之子細有之、伺之通差扣被

仰出候、

千種少將
(有文)

岩倉中將
(具徳)

富小路中務大輔
(敬直)

右依有

思召、蟄居被

仰出、辞官落飾願之通被

仰出候事、

富小路二位

右依孫 御咎、差扣伺之通被

仰出候事、

久我前内大臣(建通)

右有

思食、蟄居落飾被

仰出候事、

右之通於京都被

仰出候、

閏八月十五日

上意振

先般申聞候通、令變革ニ就而は、參勤交替之儀も相改候
条、武備充実候様可心掛、尤委細之儀は年寄共より可及
演説候、猶存寄有之候ハ、無忌憚可申聞候、

右江相付候老中より之達書別ニアリ、略ス、

右閏八月十五日御礼後、別段 御目見被

(勝勝)
御付旨、板倉周防守殿より御達有之、有馬中務大輔・上

杉(齊憲)彈正大弼於御黒書院、御目見被 仰付、

上意有之、猶又於大廊下春嶽殿御老中列座、豊前守殿被

仰渡御座候付、上意振并被仰渡候趣、有馬・上杉之二

家より通達有之候事、

三ヶ年目と有之候は、御參府之年は別ニ致し置候而

式ヶ年御在国ニ而、三ヶ年目ニ 御參府と申訳之由、

就而は来亥三月中、

御參府ニ而、其先キ寅年 御參府と申儀ニ候、

一平服とは、羽織小袴又は襦高キ袴ニ而肩衣は無之事之

由、

一のしめ長袴共以來不相用、年首ニ而も服紗物半袴相用

事之由、

一装束之下は白小袖、布衣之者はのしめニ無之、服紗物

之上ニ布衣着用、式立候節成共のしめは不用、服紗半

袴相用候事之由、

一公義江相付候勤向ニ而、御老中方其外共、御使者勤ニ而も麻上下ニ不及、羽織小袴襦高キ袴ニ而相勤可申事之由、肩衣は全不用事ニ候旨、

但若依御用筋麻上下ニ而無之候而は不叶節は、御老中方より御呼出之節、其旨被仰達候と之事、

一月次 御登城之儀は、大広間・柳之間・帝鑑間等之諸侯方ニは羽織袴ニ而は如何ニ付、いつれ麻上下御用之筋ニも可相成哉、此儀は老中方江いつれ伺見可申積之由、

一平服と申は羽織小袴襦高キ袴之事之由、

一三季御献上は無之由、

右之通奥御右筆組頭上倉彦左衛門殿罷越、御面会之上御尋申述候処、右之通相心得宜敷旨被申聞候、併節儉ニは不相成、却而何れも不都合之事共ニ付、長クは有之間敷、いつれ又其内本ニ復し可申旨、内々噂被申聞候、云々、

右西より登江差出候書付書拔

文書原寸 縦一七種 横二三〇種

三〇 戸田越前守ヨリ歴代山陵修補ノ建白

此度 御国政之儀、不憚忌諱申上候様、厚被仰出難有次第奉存候間、謹而言上仕候、

癸丑・甲寅以来夷人渡来跋扈仕候より

御国内不穩、未曾有之変事種々出来仕、乍恐被惱

叡慮候ニ付、於

公辺茂深御心痛被遊候御儀と、誠以奉恐入候、私儀、

先祖より数代相統仕、三百年來蒙莫大之

御高恩、殊ニ是迄度々重キ御役相勤候段、骨髓徹し難

有仕合奉存候、然ル処、此節外藩国持之衆より夫々御

為筋建白仕候哉、承知仕候、全

東照宮様之御余徳

御家之御洪福、無此上御儀と奉存候、私儀、譜代之家

筋、数代蒙

御高恩乍罷在、外藩之衆と後れ、一廉之

御為筋不相動儀、実々奉恐入、日夜苦心愚考仕候得共、短才不智之身ニ而、浅陋愚昧之説奉申上候儀、却而奉恐入相扣候処、今般 御国政筋之儀、心付候者申上候様被 仰出御達面々趣、篤と敬承仕処、

本朝を以世界第一等之強国ニ被遊度旨、誠ニ以恐悦之御儀ニ奉存候、然ル上は、是迄之通夷人跋扈等は、片時茂御許容有之間敷候得共、癸丑・甲寅以来、御親撫第一ニ被遊候夷人之儀故、突然と御打払之儀ニ茂至り申間敷、通商之利害追々被仰諭候上、御謝絶ニ相成可申右之節万一御教命ニ不随時は御掃攘之御所置ニ茂可相成、其節私儀、

皇国之御為抛身命、義勇之働可仕儀と常々志願ニ御座候得共、右夷人御掃攘之一挙迄、何之御為筋茂不相動罷在候段背本意、先祖以来蒙

御高恩候家筋、此節柄一日たり共空敷相過候而是対公辺奉恐入、又外藩之衆江対し、急務ヲ傍觀沈黙仕、

夷人之虚喝ヲ恐れ候様相聞、無面目儀ニ付、種々御為

筋相考候処、当今之急務は士氣振起仕候ヲ第一と奉存候、其士氣振起仕候ニは反始報本より人情ヲ厚ふし、忠孝之道ヲ養ひ立候事、真ニ強国之基と奉存候、彼血氣之小勇より起り候強者、粗暴之所業ニ茂至り、真之強国とは相成申間敷、右反始報本之祖先を不遣、始本ヲ大切ニ存候実情之厚より溢れ出候、忠孝之勇を以振立候、士氣社強国之根元実備と奉存候、此忠孝之大節を天下へ示され、御教導被遊候ニは、第一

天朝御代々様之
天朝御代々様之
御陵、多分荒廃ニ相成居候、此儀古来有志之者憂傷仕候段、兼々承知仕候、乍恐 万乘之

玉体を被為納候処、荒蕪之匠ニ被差置候儀、誠に無勿体次第、恐懼悲傷仕候事ニ御座候、臣子之分ニ而は、一日茂安心難仕儀と奉存候、殊ニ先般

天朝より御縁組被為在候上は、猶更
御陵御修補之儀、御執行被遊候様奉存候、右様相成候者、

乍恐

今上皇帝ニは追遠莫大之御孝道ニ相成、於

御当家は奉上广大之御忠節相立、

官武御一和之御趣意、弥以相顕れ、且

官武御一同ニ忠孝之道ヲ以、御垂教被遊候得共、海内一般

御徳化ニ浴し、反始報本之情厚ク、真之忠孝之士氣振

起可仕、且

御陵御修補之事、鎌倉以来数百年絶而無御座候処、

御当家ニ至り御修補ニ相成候得は、千万年不拔之御盛

功ニ而、御忠義之道相立候より

天朝之御気色ニ被為叶、天下之人民一統難有感戴仕、

御武威茂無限相輝可申奉存候、仍之

御陵御修補之儀は御強国之基、則天下無双之一大盛事と

奉存候間、近々

御上洛前ニ御修補之儀被 仰出候得は、必

御為筋と奉存候、尤此節柄之儀ニ御座候得は、万一国

持之座より右之儀

天朝江直願之程茂難計哉と心痛仕候間、可相成は早々被

仰出候様奉存候、今般厚 御沙汰之趣、反復難有奉存

候付、愚意之趣此段奉申上候、以上、

〔朱〕 壬戌 閏八月

戸田越前守

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一四三ノ

二号文書ト同文ナリ

文書原寸 縦二八糎 横四〇糎 四枚

三〇 京都所司代ヨリ伝奏ヘノ上申

參勤交代制ノ変更等

〔表紙〕 所司代ヨリ伝奏ヘ差出候書付

〔御裏書〕 戊辰八月廿七日大坂邸滞留中從

近衛家被差遣候、

方今宇内之形勢致一變候付、外国之交通茂御差免ニ相成

候付而は、全国之御政事一致之上ならてハ、難相立筋ニ

候処、御大札等相続き一新之機会を失ひ、天下之人心居合

兼、終ニ時勢如是及切迫候次第、深く

御痛心被遊候付、上下拳而心力を尽し、

御国威御更張被遊度

思召ニ候、尤環海之

御国海軍を不被興候而は、

御国力不相震候付、追々御施設可被成候得共、此儀は追

而被 仰出ニ而可有之候、右ニ付而は參勤之年割在府之

日数御緩メ之儀、追而可被

仰出候、依而は常々在国在邑致し、領民之撫育は申込も

無之、文を興し武を振ひ富強之術計厚相心掛、銘々見込

之趣も有之候ハ、無伏藏申立候心得ニ可罷在旨被 仰

出候段年寄共より申越候間、此段為御心得申進置候事、

閏八月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一四三ノ

一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦二七・二櫃 横四〇櫃 三枚

三一 松平肥後守細川越中守山内容堂ヘノ御沙

汰書

京都守護職增加交替輪番ノ件等

三通一綴

(端裏書)〔朱〕
「王戌」

此御書取は未定之由」

(容保) 松平肥後守京都守護職被申付候儀、御警衛行届

御安心被

思食候、然処一藩奉職ニ而は、人心居合茂如何可有之

(被被カ)

思食候ニ付、猶又大国之外藩、今一両家江被申付、輪番

相成候様被遊度、被

思食候事、

九月

(慶順) 先達細川越中守御内沙汰之儀、御請有之

御満足候、右使上京之節、即今御用無之旨申達相成候得

共、方今事体猶亦上京

朝廷ヲ輔翼之儀幹旋有之候様被遊度、更内々

御沙汰候事、

松平土佐守儀、先達俄滞京之事被

仰出候処、御請

御満足被

思食候、然処若年之儀不量之

御沙汰ニ付、深心痛之趣被及

聞食、無余儀被

思食候間、於土佐守は出府ニ而尚又厚周旋可有之、父容堂

年輩之儀ニ候得は、輦轂之下御警衛、殊更ニ可然共

思食候間、早々上京、父子交替ニ相成候様被遊度

思食候、此段被

仰出候事、

後八月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一一五ノ

二ノ四号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二釐 横九〇釐

三三 岩下佐次右衛門等三人ヨリ小松帯刀へ

生麦事件ニ付幕府へノ返答

(包紙ウツ巻)
一 小松帯刀殿 岩下佐次右衛門

(朱)
『壬戌』九月五日発

ノ

生麦一件御届書ニ付、尚又相尋度訳有之候間、私共三人

江今朝五ツ半時、町奉行小笠原長門守御役宅之様可罷

出旨致承知、立花直記差添出候処、町奉行右同人は勿

論、外ニ小栗豊後守・御目付小出修理列席ニ而相被尋

候趣、及返答候大意、左之通、

一生麦一件、御届書ニ而、大意相分居候得共、尚亦三人

より 三郎様御趣意之次第申出候様、御達シ有之間、

近々御届申上候通、夷人を切付候岡野新助ニおひてハ、

是非尋出差出候心得罷在候、外ニ供方之内ニハ、其場

之時宜混雑中故、見留候者無之、一兩人撰出シ差出候

儀、出来不申旨相答申候、

一若者共一兩人被差出候義承知可致、早強ニ被差出事候ハ、惣人数可罷出ト申候義を、

三郎様御尤と思召候哉、又は被差出思召ニ而候へ共、右様之人氣ニ而は、混雜ニ茂可相成との思召ニ而不被差出哉ト相尋候付、供方之内慥ニ見留候者有之候得は、差出可申候得共、能存候者無之、尤人氣茂右通故、混雜不得止、一兩人分而難差出段相答申候、

一御国許へ軍鑑差向候へ、

御国威不失様、穩ニ応接可致旨被申出候、如何之心得ニ而候哉と被尋候付、公辺ニ茂御申諭シ相成候而、承伏不仕候へ、御国許江軍艦可差向旨、被仰渡度參候へ、此方実意を以可致応接、夷人共ニ茂落着いたし候廉可有之ト存、其通申上候旨相答候得は、亦若夫ニ而承伏不致時へ、如何所置致候哉と相尋候付、其所へ見留茂無之旨相答申候、太抵前件通之趣意ニ而、外ニ差当難題之廉茂無之、今日は罷歸候、右ニ付前後彼是得と推考いたし候ニ、先々右通之姿ニ而、余深々敷事

は無之候半欵、いつれ之筋詰る処は、幕役致心配、程能和議を入候ニ相違有之間敷、併未夷人共江返答相成か否哉は不相分、此上は彼等申募方之浅深ニより亦々此方江何と欵申掛候時宜ニ罷成候半欵、依之未安心は出来兼候へ共、十二八九は自然平定之形ニ振向候半と致下墨罷居申候、尚異變之廉は近々可申上候得共、先々今日丈之一ト首尾此段御届申上候、以上、

九月五日

岩下佐次右衛門

吉井 中助

高崎猪太郎

小松帶刀殿

文書原寸 縦 一五・五種 包紙原寸 縦二四・一種
横 一六九・五種 横 三二種

三三 久光公御光着当日ノ御次第

(包紙ウツ書)
「御光着当日之御次第」

御光着当日之御次第

一二丸御門より屏重御門

御入

屏重御門外江

御家老

若年寄

大目付

一御先立

御家老

御側役

奥向人数

一御休息所江

御着座

一御熨斗

一御茶

一太守様御書院迄

御出迎

御書院二之間江(久光)

島津周防殿

島津讚岐殿(廣教)

島津安芸殿(忠教)

島津凶書殿(久治)

島津英之進殿(忠教)

御対顔

太守様

島津周防殿

島津讚岐殿

島津安芸殿

島津凶書殿

島津英之進殿

同三之間江

月番

御家老

同

若年寄

同

大目付

御側御用人

右二之間江一同出座被着座

御目見恐悦被申上之御家老御取合、御意有之、又御取合

有而被退座、

但島津岩松殿幼少故相除

御家老

若年寄

大目付

右御家老は三之間上御敷居より下三疊目、若年寄・大目

付は同四疊目江一列ツ、罷出、

御目見

御意有之、御側御用人御取合有而退座

御側御用人

御側役

奥向

右三之間上御敷居より下五疊目江一列ツ、罷出、

御目見畢而

御入、

島津周防殿

島津讚岐殿

島津安芸殿

島津 凶書殿
島津英之進殿

右二九於溜之間御料理被下之、

〔米〕
一御光着、直ニ

御休息所江

御着座、御式被為濟

御庭堂社江

御参詣御盛塩上、
御神酒

右畢而大奥江

御入

典姫様其外

御子様方江

御対顔、松寿院殿・栄松院殿

御逢、御年寄初兼而

御目見被仰付候面々江

御目見被仰付、

於御同所

御惣方様御寄合

但周防殿・柔水殿・凶書殿・英之進殿并御女中方御相伴有之、

御熨斗白木三方

御茶

式御三献塗三方

長柄之御銚子

御加

御雜煮塗三方

御吸物同

御銚子

御掛盃

御肴

御銚子

御盃土器白木三方

御押白木三方

御銚子

一 御盃事

一 御料理二汁五菜

御台引御引肴共御年寄

御吸物

御肴

御菓子式通

一 御後段

御吸物

御肴

御銚子

御茶

一 御夜食二汁三菜

以上、

文書原寸 縦一八・三寸 包紙原寸 縦 三〇寸

横二〇・六寸

横三七・一寸

三四 永井清左衛門認書

大坂長州屋敷ニ於テ彈丸製造ノ件

(先)

「本文十四日晚永井清左衛門より申出、帯刀殿并京都江も申遣置申候、此節又々為認入御覽申候」

長州
屋敷内

右去ル十日比より明長屋ニおゐて登り居候面々、大砲小筒之玉取掛り、鑄方いたし候由、左候而出来上り候上箱詰ニいたし、明藏江入致格護候由、右ニ付屋敷内混と出入いたし候町家之もの両三人、右手伝参り居候由、昨日右手伝之者老人窃ニ招呼相糾候処、弥無相違、其荷作いたし置候玉は何方江差遣候哉、相糺候処、前日拾五箱致格護候処、翌日は拾箱より無御座、又其上江追々々々格護相成候得共、五箱と拾箱とは時々減し、何方江取直ニ相成候哉、私儀は格護方ニ藏前迄参り候得共、差出候節は参り不申との趣申居候、就而は決而京都ニ而も為差登候哉、又は国元江差下候哉、難相分御座候旨、去ル十四日内山彦次郎より内々承得申候、

九月十六日
永井清左衛門

文書原寸 縦一五・七種 横六九・七種

三三 大原重徳卿ヨリ島津三郎公へ

久光公ノ帰国ヲ祝ス

(包紙ウツ書)
「島津三郎殿 重徳

(朱封)
□ □ 九月十八日

(封紙ウツ書)
「島津三郎殿 重徳

□ □ □ □

其後ハ御無音、無申条候、追々冷氣増加候、逾御平穩珍重此事ニ候、陳ハ去閏八月廿八日ニハ自兵庫御出帆、御帰国之御都合之趣伝承候、海上路程日数とも種々ニ承り候へとも、何レ蒸気船之事ニ候へハ、風濤ノ御構も有之間敷と存候へハ、船中各無恙、最早とくに御帰着被成候ト、逾御安心之御事と察入、珍重之御儀と御悦申入候、拙子も其後気丈ニ罷在候、乍憚御安慮可被下、先ハ無異御帰国御悦申入度、如此候、不典、

九月十八日晝天認

二白、初ての御旅行ニハ、扱々長滞留非常之大事、
嘸々御草臥と察入候、御草臥も出不申哉、併御用心
家故、格別之儀も有之間敷と遠察いたし候、追々冷

氣増加之時候、御用心専一ニ候、拙子も来廿一日左
衛門督拜賀いたし候ニ付、何欵と取込候内、脚便有
之候と承り、余り御無音無申分、不取敢御帰国御悅
申入度、要用申入候、乍末筆此節又別

勅使被為下候御様子承及候、勤王之心不相變心配候
へとも、非役之事故聞へかね、との様之御事やらと、
只々心配いたし候、陽明にて御咄し之次第ヲ存候
へハ、被差向候も宜哉ニも候へとも、先只今之事故、
御見合も可宜哉とも存、愚案故見通シ付不申、無念
之至ニ候、近クハ御和談も致し度候、残念此事ニ候、
以上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一四九ノ
一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・三釐 包紙原寸 縦二七・五釐
横五五・五釐 横 四〇釐

三六 茂久公ヨリ近衛閑白へノ願書

久光公ノ添書

斎彬公贈官位ノ件

二通

三二六ノ一

先般実父島津三郎事、公武御一和之為上京仕、精力ヲ
尽シ候処、不凶モ参内被仰付、不容易褒

勅ヲ蒙リ、殊ニ重キ御品迄モ拜領被仰付、誠以武門之冥

加、於当家未曾有之名譽ニ而、於私モ別而難有仕合、不

堪感涙次第御座候、且同人江官位被仰付御内慮も被為在

候処、再三辞退申上、私江中将昇進之儀奉願候由、此節

三人^{三郎}同人帰国之上承知仕、何共当惑之至ニ御座候、私茂何之

功劳も無之、乍居官職ヲ汚シ候義、実ニ恐入奉存候、此

節実父三郎尽力之義は偏ニ養父故薩摩守遺詔之旨ニ随ヒ

候訳ニ而、畢竟功之帰シ候は、薩摩守ニ有之義と奉存候

ニ付、右之御取訳ヲ以、従三位宰相江贈官位被仰出候義

は被為叶間敷哉、左様御座候得は、於私別而難有次第奉

存候、官位も快く御請仕可申候、於國中一統別而難有、

猶更勤 王奉存^{猶更勤王}、忠勤相励可申と奉存候、何卒是等之趣

宜御汲取被成下、御執 奏被仰上被下度奉存候、三郎江

も申談、不願恐懼奉歎願候、頓首敬白、

別紙

修理大夫内願之通、故薩摩守贈官位之一条、実ニ尤

之儀と奉存候ニ付、何卒願通被仰付被下候様、私よ

りも奉願度再往^{備ニ奉願上候、以上}

文書原寸 縦一八・八糎 横二五・二糎

三二六ノ二

(端裏朱書)

「壬戌九月」

別紙修理大夫内願申上候通、故薩摩守贈官位之一条、実

ニ尤之儀と奉存候ニ付、何卒願之通被 仰付被下候得者^様

於私よりモ別而難有仕合奉存候、此段乍恐奉願上候、恐

惶謹言、

九月十九日

島津三郎

文書原寸 縦一八・九糎 横二六・六糎

三七 一橋刑部卿等四人ヨリ坊城大納言へ

兵庫開港風説ニ付

(端裏朱書)

「壬戌九」

先年言上仕候兵庫開港之期限、当月頃之由「」有之候、

早々取調「」旨、追々攘夷可被 仰出候処、万一如風説

当年開港、夷人輻湊候而は、甚々不都合千万候間、前条

御沙汰被為有候段、可被仰越旨、関白殿被命候由被御申

越、

御沙汰之趣敬承仕候、右兵庫開港期限之儀ニ付而は兼々

御配慮被為在、既ニ各国江御使之者被差遣、延期之儀精

々為及談判候儀ニ付、当年開港は決而無之事ニ御座候、

此段宜関白殿江御申上有之候様存候、以上、

板倉周防守^(勝勢)

水野和泉守^(忠精)

松平豊前守^(信務)

松平春嶽^(慶永)

九月廿日

徳川刑部卿

坊城大納言殿

文書原寸 縦一七・八糎 横七七糎

三六 大坂ニ於ケル長藩士動靜探聞記

薩摩屋鹿助江申合聞合仕候処、左之通御座候、

長州
元大坂留守居

宍戸九郎兵衛

右此節罷登候付、土産品差贈候一礼として、昨廿一日差越申候処、此節亦々留守居役ニ而罷登候間、何欵宜相頼候、此節は、御城代・町奉行・銀主等江は、大坂留守居相談役と申所ニ而相詰候、北条瀬兵衛儀は最早不罷登、交代前之時節再勤之筋ニ而交代致答ニ候旨、申居候由御座候、

但留守居宅ニは不罷居、交代長屋江戸堀通西之端ニ

罷居候由、

屋敷内ニ

罷居候人数

右段々、懇意之者江承合申候処、凡百弍三拾人程之日々之賄方之由、下仲仕兩人下働いたし居候由御座候、

右之内ニ

大身分と

相見得候者老人

右表札も無御座候得共、毎朝劍術稽古、右之面々三ヶ所計ニ相分いたし居候由、夫江見分ニ而も御座候哉、引取之所江昨廿一日出逢申候、若党三四人も屋敷内ニ而召列居候付、根来上総ニ而も可有御座哉、

右人数之内

拾人

右昨廿一日、鹿助彼屋敷江差越候節、今夕乗船ニ而罷下候旨、銘々手札を以宍戸九郎兵衛其外詰之内江見廻候由、銘々若党式人又は老人、草り取召列居申候由、

長州廻船方宿

柳屋

次兵衛

右之所ニ拾四五人逗留之由、其外宿江は一向居候様子見
受不申候旨、

右同

右之通薩摩屋鹿助より昨夜申出候、

河内屋

右下座敷江八人、二階ニ拾人程罷居候由、

下仲仕小頭清五郎懇意之者、通伝を以取しらべ申

右同

候処、左之通御座候、

坂田屋

当屋敷内

右拾人計罷居候処、先日国江下り候由、

人数百人計

右同

右是迄、下仲仕兩人賄方いたし居、日々百五十人計之手

尾之道屋

当ニ御座候由之処、下仲仕之儀は引取相成、下人とも寄

右江は当分居り不申候、

合賄方いたし候由、当分百人位之手当之由、

右之通下仲仕小頭清五郎、も寄り之者を以取調申候処、

長州定宿

右之通御座候、

柳屋

西横堀より下

次兵衛

渡海場迄之間

右江拾人計罷居候由

旅籠屋

右同

右長州之者は勿論、他藩之者滞在いたし居候もの無御座

山城屋

候、

右江拾式三人罷居候由

八軒家

宿屋

右ニ茂当分滞在いたし候もの無御座候、

右宿屋仲間之ものを以、為聞繕申候処、右之通申出候、

市中宿屋之儀は、是迄之定宿ならてハ、何方ニ而茂一宿

相調不申候、奉行所よりも別而敲敷仰渡有之候由、夫共

無抛通伝を以、帯刀人止宿之儀共承候得は、名所承り、

時々最寄り之会所迄届出候、其上ならては宿不致由御座

候、

右之通承候成行申上候、以上、

九月廿二日

文書原寸 縦一八・二糎 横一四八糎

三元 大坂長州屋敷其他ニ於ケル同藩士動静探
索書

(表紙)
「探索書」

長州人之動静其外等之儀探索為致候趣左之通御座候

一当地長州蔵屋敷内向之様子精々探索為致候処、定詰人数之外、当時凡百人計逗留罷在候由、尤右屋敷表通りは土佐堀巷丁目、裏通りは江戸堀三丁目ニ而、平日通り拔仕来候処、近頃表通用門はメ切裏門潜り一方より出這入いたし、門番人敲重付置人改いたし、更ニ他之出入不為致、屋敷最寄兼而出入之諸商人等江は威を掛ケ、屋敷内之様子不洩様、厚く口留取締居候由ニ而、平常とは事變有之候得共、内向動静之模様、事実差当り相分不申候、

長州藩中之由

江之島与一兵衛

三島

名前不知

高須

供連人数三拾人計

右之者共儀、国許三田尻渡海船ニ乗組、去ル十九日夜、当表江着、土佐堀巷丁目定宿大和屋長蔵同木屋仁兵衛方江別レノニ船揚いたし、右先々ニ止宿罷在候由、

同藩之由

名前不知
侍三人

右之者共儀、同日柳骨折沓・渋紙包沓・莛包沓、船頭体之者ニ為荷、長州藏屋敷江着いたし候由ニ候得共、国許より登坂いたし候故、又は京都より罷下候哉、差向相分兼申候、

同藩之由

大野八郎右衛門

上下式人

右之者共儀、同夜京橋四丁目宿屋堺屋源兵衛方より三拾石船ニ乗組、伏見船宿寺田屋伊助方江向ケ罷登候由、

長州定宿

一長棒駕籠沓挺

土佐堀沓丁目

一駄荷 四荷

尾道屋

一鎗 沓筋

徳兵衛

一両掛 沓荷

一刀箱 沓

右は同廿日暮六ツ時前、三拾石船沓艘長州藏屋敷浜先江着、乗組人数不相分候得共、積荷物前頭書之通書面、徳兵衛方江水揚いたし候由ニ而、全伏見表より之下り船と相聞申候、

長州藩之由

一駕籠 沓挺

名前不知

一駄荷 六固

侍三人

右之者共儀、同夜右屋敷内より同浜先ニ繋有之候同州三田尻船江乗組、帰國いたし候由、

毛利讃岐守

白子町ニ

藏屋敷有之候

吉川監物

常安町ニ

同断

毛利左京亮

肥後島町ニ

同断

毛利淡路守

土佐堀沓丁目ニ

同断

右夫々蔵屋敷当時内向之様子探索為仕候処、讃岐守蔵屋敷は手狭ニ而、是迄も留守居并役人等詰合無之、屋敷内ニ名代之町人計住居罷在、其余三家共留守居并地付役人等詰合居、外ニ人数相増候儀無之、屋敷門出入も平日に相変候儀無之、差向如何敷儀相聞不申候、

長州家々老

根来上総(親拵)

上下三拾人計

右は十日程以前、国許より出坂当時右蔵屋敷内ニ滞留罷在、出京の者帰国之様子差向相分兼申候、

長州藩中之由

田村熊太郎

供連無之由

右之者儀、当月廿三日夜三拾石船屋本町壱丁目山木屋勘十郎代判金兵衛方より乗船、出京いたし候由相聞申候、

同藩之由

乃美織江

右之者共儀、去ル廿一日夜三拾石船宿土佐堀壱丁目伊予屋喜八郎方より乗船出京いたし候由相聞申候、

供 三人

同藩之由

名前不知

三拾人計

右之者共儀、壮気之者と相見江多くは朱翰之長剣を帯居、一昨廿三日夜中着致し候哉、昨廿四日ニ至長州屋敷定宿、土佐堀壱丁目尾道屋徳兵衛・同坂田屋幸七方ニ別レノ止宿罷在候由、

右は昨廿四迄之内向模様書面之通相聞申候、尤其余町中宿屋共方ニ長藩之唱を以止宿致し候分、先は相聞不申、他藩之者は市中ニ散在致し候得共、此分は規則之通請人を取、其宿主共より奉行所江断有之、差向怪敷ものとは不相聞、其外浮浪之者之儀は、日々手を尽し相探怪敷者或町家江金銀押借等申掛ケ步行候もの等は、追々召捕入牢申付有之候、且右ニ不拘市中端々等ニ、浪士共潜居之風

聞有之候得共、耽と取留不申、猶も精々探索罷在候、將
又兵庫西宮之儀長藩之分、此節陸路通行更ニ無之由、兩
所駅役人共申出候儀ニ御座候事、

外

兵庫川崎町

中国屋

伊左衛門

同所東出町

長門屋

助藏

此節兵庫湊ニ碇泊之長州軍艦丙辰丸乗組同藩

戸田亀之助

村上弥四郎

岸 伊三郎

武田要三郎

中村久三郎

大崎幸右衛門

其外

拾五六人計

右之者共先月下旬より上陸、前書伊左衛門・助藏右兩人
方江立列止宿罷在、追々大坂藏屋敷江相越可申哉之取沙
汰有之候由相聞申候、

九月廿五日

冊子原寸 縦一六・六種 横四六・八種 一二枚

三〇 薩藩献上米ヨリ社寺へノ初穂奉納仰出

献上米御初穂御備左之通、

一 太神宮 一 石清水 一加茂下

メ 四社江百石宛

一 春日社 一 稻荷社 一 平野社

一 貴船社 一 四社江五拾石宛、

一 泉涌寺 一 一般舟院

メ 兩寺へ五拾石宛

右九月廿七八兩日ニ御沙汰ニ御座候事、

右申上後居申候ニ付、宜敷奉願候、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一五九ノ

一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横二八・一種

〇三三 外国奉行ヨリ生麦事件ニ付英代理公使へ

ノ答書

三三三 寺師善真ヨリ江戸島津登へ

島津登ヨリ朱書返信

鹿兒島ノ近事ト江戸ノ近事

三三二ノ一

(端裏書)

「島津登」

一筆啓上仕候、逐日寒氣相増候之處、益御安泰被為遊御座恐悅之御儀奉存候、私ニも道中無異、去ル廿五日安着仕候、乍恐御平意奉仰候、借詰中ニは御懇篤ヲ以御召仕被成下、殊ニ出立之節は、御配慮被下、不容易過分之仕舞料被仰付、其上御饒別迄も重疊難有恐入仕合奉存候、右御礼申上度、且序伺御機嫌旁如此御座候、

期後便候、恐惶謹言、

寺師善真

九月廿九日

登様



二白

私ニも江戸立より雨降ニ而、不二川江六日之川支ニ而滞在仕候而、夫よりハ往々川ニも都合宜敷、且舟中ニも六日程ニ而、先上都合之仕合御座候、殊ニ道中雨一日も無御座候、珍敷事共ニ而、九州之義は、夜白罷通候、愚弟義も疾ク出立為仕筈ト存申候処、此節安田錢座一件ニ付、内々取しらべ方ニ關係仕候而、夫故涯々出立も出来不申候、尤 主殿様杯御内意之御訳も御座候間、平川ニは廿七日方着相成、安田ニは未着不申ハ鑄製之場所柄杯、六ヶ敷様子ニ御座候、色々山者之説杯起り嫌忌も不少候、然し、私人物能存知之者ニ御座候へは、折角事之閉塞ニ不及様、心配御座候、何分大

業成就候へハ、御国家之御為無此上事ニ而、いつれも其所々心配之様子御座候、

一此節幕府大变革之御次第、追々書付拝見仕候、先々天下一統之結構御座候、就而は弥此涯彼是御改願候付、色々御配慮も相増候御時節、乍恐奉恐察候、

上様御事も、弥当冬 御参府之御手当ニ而、既ニ先日ハ、御供 撰津様・御側役山口直記・谷川次郎兵衛、其外奥向被仰付候由、

一爰許御役々進退も段々御座候間、近々、吉河源右衛門・中山甚五兵衛・中村早太閉塞仕候、別紙之通りニ仰出も御座候、弥正議之御所置難有御座候、扱道中筋之義も格別相替候義も無之、併彦印之動静は、弥御念入候方可被宜哉、道中人足杯之内ニも教多入込有之を慥ニ見届置候、道者杯ニも間々紛れ居候も有之候、此節京大坂へも数人入込罷居候由、其趣向は認得不申候、乍恐此節 御参府ニ就而は、弥右等之御探索專要ト奉存候、近々爰許内情旁細事見聞之形行可奉申上候、

三三二ノ二(三三二ノ一号文書ノ行間ニ朱書返信シタモノ)

〔朱〕本文致披見朱書入を以御返答申入候間、大略真平御免可給候、○先月御返答申入筈候得共、飛脚当日ハ別而取込御失礼申入候、扱御出立前ニハ何ソト届かねぬ被仰聞趣痛入存申候、海陸無御滞御安着、大慶存申候、其後御左右も不承候得共、御每勤旨珍重之至御座候、随而小子無異致毎勤候間、御放念可給候、○当方先静謐とハ申もの、公辺何か御混雜之筋ニ被聞申候、先達而一橋公も御引入ニ而、御後見御断書も出候得共、親王よりは非御出被成候様、無御扱被仰上候而、近日より御出之由、板倉様・井上様杯も御同断、越公・土州公等当分ハ第一御周旋と被聞申候、先日松平美濃守様御出府ニ而、段々及御相談、何とか御儀も出候由承及申候、○先達而より勅使御下向ニ而、五六日跡御対顔有之、外夷遠さけ一件之事と御取次衆被伺候、是迄しかし御頓着無之候間、屹と御手を被付候様との御事之由、いまた御受無之候、此度より勅使御相しらひ向

御手厚相成申候、○此五日跡、御殿山江四五人異人館見物ニ参り差留申候処、直ニ右兩人切殺いたし、逃去何方之者共不相聞、九州こと葉之者と申迄ニ候、○異人共当分ハ江戸中ニハ一人も罷居不申、皆横浜へ引取申候、○十一月中旬方、長州之者共十人計、横浜ニ切入とて神名川迄出張候処、関番共差留候処、少々混雜ニ及申候得共、追々公辺よりも差留ニ走付、且又彼方より早打櫓之齒ひくか如く、御屋しき下などハ五十人通りたるなと噂承り候、長州之若殿長門守様ニも、夜中出馬ニ相成候、高崎猪太郎ニも出張申候事無難相済申候、長州之者共山かけ候事、間々ある様ニ被察申候、○高崎猪太郎今日出立罷下り申候、越公・土州公より三郎様江御内用と被聞申候細事不申越候、尤近々御上京之勅書相下り為申と承り候、いよ／＼其通之御事ニ候ハ、近々ニハ御発駕かと奉察候、○御実弟市来正(四郎 広貴)右衛門当分ハ磯ニ而通宝御取立ニ相掛、何か繁多之由ニ承り候、先程ハ拙者ちと存寄有之候間、申遣候事有

之、細書を以其儀ハい細承り、此方よりも返答いたし置、何事も相済候得共、其後返答ハ勿論、書状不相見得、いか様今ニこたへ居り候半と存申候、此方より談合可申訳ハ無之事ニ候間、以来無心置書状ニ而も越候様、御達可給候、蒸キ船出航之砌、宇宿彦右衛門より正右衛門も、拙者方江書状ニ而も差遣候様為申由候得共無其儀、ちとうたかひ居ニ而はあるましくやと存様ニ御座候間、かた／＼宜御願申上候、

○井伊家始メ、其折御咎目被仰付候人数江、又々此度被仰渡趣有之ト井伊家は、高十方石御取揚、此書付ハ主殿方江も遣し置申候、又世間ニ別而多く写取候間、御知音之方ニハ決而差下し候半と存申候間、不遣候、先ハ御返報迄、大略真平御免可給候、尚後便可得御意候、恐惶謹言、

十二月朔日

島津 登

寺師善真様(宗道)

文書原寸 縦一六・三種 横七四・二種

三三 正親町三条大納言ヨリ島津三郎殿へ

久光公ノ上京ヲ促ス

(包紙ウツ書)

「島津三郎殿 三条大納言

(朱封)

□

┌

追々寒冷相加候処、弥御安栄珍重不斜奉存候、先比は無御滞御帰着之旨、恭賀御同慶存候、御在京中段々御軒旋御輔佐被成上

御満足、於拙子共も大幸存候、猶又其後御献米等重畳、

御感悦之事ニ御座候、扱其后之次第、御家頼中より巨細

御承知之通之儀ニ而、於御家臣衆周還尽力、是又

御感、於一同も忝存候、抑当地形勢日々変化ニ付而は、

品々深被惱

宸衷候上、此比徳川刑部卿上京之趣ニ付而ハ、色々被尋

下度

思食候儀共多端被為有、屹と御輔弼有之候様、被遊度候

ニ付、早々御上洛有之、御尽力之様被

頼思食候、其段 関白殿江御沙汰有之、御達ニ相成候得とも、猶又於下官共も色々御案痛申上、何卒被安

宸襟候様仕度存念、且ハ何様ニも致し、此御使着次第、

一日も早く御上京可有之様、心配可仕段、別段御内沙汰

も拝承仕候ニ付、以書状申入候、何分急遽御出京有之、

御羽翼被成上、被安

叡念候様仕度存候、御帰国後未經幾程忽御再出、事々御

都合も如何可有御座哉、御察申入候儀も有之候得とも、

何分治乱之境成敗之間、実々無此上一大事之御場合と心

配仕候ニ付、万事不相省申入候、何卒厚御照察被下度、

書余は藤井氏より御聞取可給候、仍早々如斯候也、恐惶

謹言、

九月三十日

島津三郎殿

三条大納言

実愛

憲

再陳返々本文之趣、御汲察給、神速御参途之程、

偏ニ所仰候、追々寒光も可相加、折角御保衛之様

ニ奉存候也、

文書原寸 縦 一七・八糎 包紙原寸 縦二七・七糎

横 一七二・五糎

横三八・五糎

三三 尊融、法親王より島津久光公へ

朝議常変云々の件

(包紙ウツ書)
一 島津三郎殿

青

緘

(封紙ウツ書)
一 島津三郎殿

一朝儀常変ノ二道、何レニ被定可然事、

一京地ニ藤房卿無御座候、呉々モ早々出京、藤房卿正成

之所為頼入候事、

一良節ニ京地形勢聞取、勘考も急可被申越候事、

九月晦

尊融

文書原寸 (折紙)

縦一五・八糎

包紙原寸

縦二七・三糎

横三九・四糎

横三八・四糎

〇三五 久光ヲ召サセラル、近衛閑白へノ宸翰

〇三六 久光公上京召命ノ御沙汰書

三七 攘夷ノ勅使御差遣ノ上奏 (長州?)

(端裏朱書)
「壬戌九月 何人欵」

先年以来外夷跋扈未曾有之御国辱ニ付而は、奉始

神宮御代々様江被為対宸襟御惱被為遊候御儀、今更申上

茂恐多奉存候、然処追々正邪之弁相立御有志之御方御慎

解ニ相成、且又三藩出張士氣奮興之儀千歳之一時此機不

可失事ニ候、元来一橋越前等再出之段

勅諭を以被 仰出候儀、偏ニ於関東有司共不取扱より、

叡慮貫徹不仕、人心致瓦解攘夷無覚束被 思食候事ニ可

有之候、何分ニも一日之安ハ千歳之禍ニ候得は、恐多茂

夷狄撻伐之宸断被為遊、此度

勅使御東下ニ付而は、屹と関東江被 仰出、攘夷之御決議

早速被 聞食候様被 遊度候、尤一昨冬七八箇年乃至十
年外夷拒絕可仕段、於關東御受有之候ニ付、御猶予之儀
御頼可相成欵ニ候得共、右ハ奸吏共罷在候時之事ニ而、
今日ニ相成決而御異議有之間敷ニ付、断然攘夷之勅使被
仰出度奉存候、

九月

文書原寸 縦一五・八種 横一一・二種

三六 大赦ニ付幕府ヨリ朝廷ヘ伺ノ件

(端裏朱書)
「壬戌九月」

御婚禮相濟候御祝儀赦之儀ニ付、先達而被

仰進候趣茂有之、猶又此度松平長門守江被仰含候儀茂御
(毛利元徳)

座候付、別紙之通赦免可被

仰出御沙汰ニ候、就而は於当地御差支無之候哉、一応及

御内談、否申越候様、年寄共より申来候間及御内談候事、

九月

文書原寸 縦一七・八種 横三五・二種

三九 京都ニ於ケル天誅処罰ノ帳紙等

蛸薬師新町東入町

当町内中出民部義、逆賊島田左兵衛并伊勢屋定助と密謀、
言語同断、是迄可加誅伐之処、元来愚医之義故、格別之
事も有之間敷と差許置候、此後早々京都立退、他国江引
籠候得は、其假ニ差置可申、万一是迄之通相心得罷在候
得ハ、急度致方有之、其節は町役人共茂其分ニ而は差置
不申候、此段急度申付置候、以上、

役人中

(朱)
一右文久式成年九月下旬、蛸薬師新町東入町中出民

部と申医師門口江張紙いたし候由、

渡辺金三郎

森 孫六

大河原十蔵

右戊午以来、長野主膳・島田左近之大逆謀ニ与し、加納
繁三郎・上田助之丞等之諸奸吏共と心を合、古来未曾有

之 御国難を醸し、聊ニ而茂国事を憂候者は悉ク無名之罪を羅織し、甚敷ニ至而は死流蔽刑を用ひ、おのが毒計を逞せんと致段、天地不可容之罪状、一々不遑枚挙、仍之加天戮者也、

壬戌九月廿三日

石部駅於三宿は、不計禍を生候ニ付、此上地頭且町内より、此度可相恤候、若其儀無之おゐては、追々可及誅伐候、以上、

石薬師通寺町東入茶染屋五兵衛、今出川通寺町西江入町鍵屋庄兵衛、右式軒之米屋渡世江、当九月廿五日之夜、左之通致張札候由、致風聞候事、

連歳于茲乍蒙

天下之豊饒之高徳、下民之不潤沢は、事之不正に寄也、米屋共米穀を隠し、高直ニ商ひ、諸人之苦ミを不思、剛

欲不正之罪不可遁、早々示し合、速ニ改正、下落於不致は、先家之者共不日ニ悉ク打取、四条河原ニおいて可肆之事、右此辺堂上方侍取調之上、最寄ニ付為知置もの也、

九月

〔朱〕文久二戌年九月廿日比、三条大橋へ張紙いたし候由

覚

一此度四民為和順

酒井雅楽頭殿 (忠實)

瀧川播磨守殿 (具尊)

永井主水正殿 (尚志)

右三藩江遣シ候書状之写

夫戦は国雖大、好戦は必危、実哉、従家康公至近来迄、天下和順致静謐之御代ニ而、日本国之政道は、先仁義礼智信五常之道を為専、可治筭之処、近頭右五常之道ニ背候而哉、士農工商四民共人倫之道を忘、奢侈而、有福之輩ハ、佞弁を以無謂高位ニ昇、或は雖為町人何々之株杯トテ金錢ニ応シ過分之衣裳・美刀を帯シ、無益之官位を

受、高位ニ交、又は宮門跡・堂上方之名目、又は御役所御用、金銀錢会所杯と唱用所拵、無福之輩者江貸付、証文料多分之金錢を取、返済之節は其紙不返、印形之所計切貫返シ、其余自身為名利衆人見付ニ所々張置、其上菓子料・世話料、何々之挨拶杯と而、譬は元金百兩、五兩又は拾兩其余年々分迄、法外過分之金錢を食取、其上晦日ニ貸渡、其月之利足を取、又は月頭ニ貸渡、先月之利足を取、其上口入之者、銀方ニ而は銀高ニ応シ料物を乍取、借方之者ニ礼物を食取、剩其上借方之族、自然返済之日限少々延引ニ相成候ハ、催促之者を遣シ、其節之賃錢ニ而、里数町數過分之金錢を權威ニ取、右様ニ候而は、借用之族何々之融通ニ茂不相成、貸方一己之利欲ニ迷、言語同断不埒千万之儀也、然共無福之族は、右不実之儀ハ乍思、其時々当座融通之凌ニと心得、無拠借受、其後其身之誤も雖有、又は災難相統、無拠返済方及遲滞候ハ、無慈悲及訴訟候処、承知之役人夫相応之玄米・扶持米頂戴乍有、其余之私欲ニ迷、廻勤挨拶賄賂ニ随ひ、理

非を不弁、借方之者を無憐愍而、無正ニ叱り付、其權威ニ恐、終ニは無拠日用之諸道具・衣類迄も売払、渡世ニ拘り、既ニ露途ニ立及困窮処、歎敷次第也、譬は谷之底之土を頭上江如運、有福者益繁榮、無福族は次第零落ニ及、四民平等之理ニ違、天理ニ背、可恐次第也、然は此度神仏之守護、又ハ三藩各方之趣意ニ寄而哉、明成哉、悪人を罰奉帝敬事社之雲上・月日より、下万民ニ至迄、御代泰平万々世之基と可心得、依而各御役柄ニ応、抽丹誠政道可在之事、要用可為事大事ニ候、先は右可得御意度迄、以懸札如斯御座候、以上、

酒井雅楽頭様

瀧川播摩守様
(マカ)

永井主水正様

尚亦、右不埒之者、任私欲侍町人有福之者共不相応之味方以外ニ在之候間、得と御吟味可有之もの也、

口演

一此度天下和順為四民和合

酒井雅楽頭殿

瀧川播摩守殿

永井主水正殿

右三役之方江書状遣置候故、士農工商四民共其意ヲ心得、
相応ニ承知可有之候事、

壬戌九月下旬

冊子原寸 縦二八種 横二〇・六種 八枚

○言 茂久公ヨリ幕府ヘノ請書

久光公後見職許可ノ幕命

右二通

三 中山忠能卿より島津三郎公へ

久光公ノ上京ヲ促ス

(包紙ワッ書)
「島津三郎殿

忠能

緘

追々寒冷増加候、弥御安全と珍重存候、誠先達は御上京

御東行等出格之御苦勞、事々御丹誠御周旋共、深々令感
佩候、度々得貴願、御懇示共大幸存候、無御滯御帰国
之趣奉賀候、抑御出立後天下之變化、

帝都之形勢追々選転ニ相成候、就而は差当品々被惱

宸襟候御事ニ被為在、於愚臣等も、寔以令心痛候、別而
此比一橋刑部卿上京之義被言上候、越前之義ハ一、向沙汰無之候子細難分

候へとも、来年二月ニは大樹上落一言有之候上は、右一

橋上京之上、御沙汰心接等も実ニ国家之大事と深被惱

歎慮候間、種々御内談被尋下度御事共御多端ニ付、早々

御上京有之候様、頼被 思召候との御沙汰ニ被為在候、

尤関白殿へも御沙汰之御事ニ候得共、於小子等も、実ニ

御案痛申上候事件有之、誠以難堪存候、万事御面陳打明

御内談申入、何卒一日も早被安

宸衷、尤国家御為ニ可相成様仕度念願ニ有之候間、乍御

勞煩速御上京、御内々御補佐被上候様、偏御頼申入候、

御帰国無間御再出之段、実ニ御不便宜、御困ハ深令遠察

候へとも、何分治乱成敗之御場合ニ至候而、心痛之至ニ

候、何卒々々厚被廻御遠察、早々御上洛之義、分而御頼申入候、委細之時勢、下官所存一々藤井へ申述置、同士承知之事ニ候間、御聞取奉頼入候、仍此段申入度如此候也、

十月一日

忠能

島津三郎殿

追而時候御自愛專一存候、調筆火急ニ相成、且先日已来痛所有之、困居甚乱書短札高免可給候、心事難述尺御推覧奉頼候也、

(本文書ハ「忠義公史料」第二卷第一六一号文書ト同文)

文書原寸(折紙)

縦 一六種

包紙切片

縦二八・七種

横四五・四種 二枚

横一一・一種

三三 京都本田弥右衛門ヨリ二之丸側役衆へ

宸翰奉護藤井良節帰国ノ件

朝廷

御沙汰書 一通

右従

近衛関白様御手親被相渡候付、藤井良節江為致奉護被差下候間、被差上候儀共、

三郎様 御前可然様御取計可被成候、以上、

但、右

御沙汰書之儀、九月晦日御下ケニ而、其俣九月と御

認有之候得共、今日被相渡候条、其段可心得旨、

殿下御沙汰ニ而候、

京都

十月朔日

本田弥右衛門

二之丸

御側役衆

文書原寸 縦一六・三種 横五六・七種

〇三三 近衛関白ヨリ久光公へノ書翰

三三 御記録奉行伊地知小十郎調書

慶長元和年間將軍参内ニ付御供ノ件

(表紙) 一將軍家就 御参内御供被遊候年月等調

將軍家 御參内之儀 御行幸之記と申古板本等は御座候得共、於当座其事一篇ニ為書記旧記見当不申候間、御家譜等見合、左条ニ申上候、

一慶長十年二月初 忠恒公鹿兒島 御発駕ニ而、御家老伊勢平左衛門尉貞成・鎌田出雲守政近御供被召列、其月十九日 家康公御上洛、右大将秀忠公は同十八日江戸被為立、三月 忠恒公大坂 御着ニ而、同十八日伏見城江 御登城、家康公江 御目見、御刀大小不作相御拜領、翌十九日 秀忠公江茂 御目見被為濟、同廿七日 上様御昇位ニ付、忠恒公御裝束無御用意ニ付、長御袴ニ而御出仕、四月七日 家康公征夷將軍御辭退ニ而 秀忠公江被為讓、同十五日 秀忠公征夷將軍 御宣下、牛車 禁中御參内之被為 蒙 勅許、同廿六日 秀忠公被為 駕牛車ニ御參内、忠恒公御供御勤被遊、同廿八日 御參内ニ茂被為上殿 後陽成帝并親王家 御目見被遊、七月於伏見御城 家康公江御目見、御暇御給、御馬御拜領、同十九日

伏見御発駕、御家老樺山権左衛門久高・伊勢平左衛門貞成御供被 召列、其時鎌田政近は久高ニ交代、伏見被相詰、八月比鹿兒島 御着城、

一同十一年二月上旬、忠恒公鹿兒府 御発駕、御家老比志島紀伊守国貞・伊勢兵部少輔貞昌、其外山田民部少輔有榮御供被 召列 御着船、日不相知、四月七日 家康公伏見城江 入御、同十九日 忠恒公御登城、御目見、同廿三日二トモ 家康公御參内、忠恒公御供、六月十七日茂 御登城ニ而 御諱字御拜領 家久公と御改名、此時文之和尚上洛仕居、
〔米〕南浦文集〕
莫言東洛隔西州、同氣同声程豈脩、自一文盟結金石、
國家久遠幾千秋、
右通猷詩奉賀之、七月十九日伏見御立、御帰国被遊候、左候而翌十二年六月廿七日 家久公鹿兒府 御発駕、初而江戸 御參勤被遊候、
一元和三年正月下旬鹿兒府 御発駕、又江戸江 御參勤、

御家老伊勢貞昌御供、二月大坂 御着、即 御上京、
近衛家江御参殿ニ而

宸襟被為奉窺候処、被為協

叡慮、御琴一面号遠、御尺八二管は驚 其外御薰等御拜

領、

(朱)
「在島津左衛門家」

猶々すこしもあかり候ましく候、く、ましく候、

きん中様よりとふかりと申候御ことをはいりう申候、ミ

ことなる事、中く申はかりなく候、ふくろ、はこにい

たるまで、申へきやうなく候、御たき物もはいりやう申

候、かやうの事へためしあるましきよし申候事候、まこ

とにありかたき事共にて候、やかてくたり候て見せ可申

候、ふくしゆとのいつれもく御ゆかしくも、いつとな

く給候事候、又々かしこ、

三月一日

ふしミより

(朱)
「公御女彈正久慶室」

いゑ久

中まいる

五月、江戸より 日光御参詣、六月二日 御登城、

秀忠公より御饗応之上、御懇之上意ニ而、御先ニ御上

洛被遊居候様被仰出、御刀大小行平 御馬二疋一は号八塚

一之御拜領御退出、直ニ御老中方御廻勤、同八日江戸

逸物、木曾路より其中旬比伏見御着、七月十八日

御立、伏見御城江 御登城、 秀忠公江御目見、 御口命ニ

而 家久公宰相兼左近衛 御任官被 仰出、且御腰物吉御

拜領、 家久公茂亦名刀御進上ニ而、御礼被 仰上

宣旨左之通、

上卿 日野大納言

元和三年七月十八日

左近衛権中将藤原家久朝臣

宜任参議

藏人頭右大弁藤原兼賢奉

同廿一日 秀忠公御参内、 家久公御供奉、同廿七日

従

今上後水尾院様、西洞院少納言時直勅使ニ而、
仙洞後陽成院様御宸翰御掛物一幅 家久公御拝領同九
月朔日従 秀忠公松平御称号御賜、被任薩摩守ニ、貞
宗之御脇刀御拝領、 家久公より茂名刀御献上、御礼
被 仰上、同十月御下国と相見得、此度之御供と相見
得、肥後平蔵文書ニ左之通、

主従三拾人
乗馬壹疋

同二十九人内老人同上
乗馬壹疋

同十二人
乗馬壹人

同十五人乗馬壹疋

右同

右同

同十二人乗馬壹疋

同十人乗馬壹疋

同十人乗馬壹疋

同十二人同断

同

同三人

四人

三人

同四人外老人京へ
参候間飯米渡ましく候

同二人

同六十六人内三人五月九日ニ京へ被遣候

六十八人

四十四人

合四百四拾壹人

惣合七百七拾壹人

同十人 乗馬壹疋

同十人 乗馬壹人

同十一人内一人同上

同十二人 乗馬壹疋

同

同

伊地知及右衛門尉殿

石原嘉右衛門殿

自休殿

別府小吉殿

牛島吉左衛門殿

加藤彦左衛門殿

御道具衆

御台所付衆

小者衆

上原大蔵太輔殿

国分但馬守殿

税所弥右衛門殿

猿渡新助殿

伊東二右衛門殿

同

同十六人乘馬壹疋

桂又十郎殿

合式百四拾四人 乘馬十七人

入組在之ニ付賦飯米不渡衆

今度之賦ニ付
人数不究候也

検見崎喜兵衛殿

夫老入足ニ付
未渡

入田作右衛門殿

慶長十一年よ
り取籠分アリ

内倉 介殿

以上、

五月九日

猿渡新介印

税所弥右衛門印

坂上千左衛門殿

肥後備中守殿

右人数江戸 御立前之古文書と相見得、御家譜ニは

脱漏相成居候、

一同九年 秀忠公 家光公両御所就御上洛、同六月、

家久公御先ニ御上京、暫御滞京之節 家久公平日御学

文被為 嗜候事共

今上後水尾帝天聰ニ被為 昇聞

御叡感之余り官本之大名寄御拝領被遊、又於

仙洞後陽成帝御所ニ立花、或は八条宮ニ而蹴鞠、近衛

家之御招は香聞抔風流之被為振 御美声、七月十三日

両御所御上着、二条御城ニ被為 入御、同廿五日

家光公御参内、家久公騎馬ニ而被為供奉、列候方左

之通、

亥八月六日
御参内御供衆之次第

尾張中納言殿

紀伊中納言殿

水戸宰相殿

松平筑前守殿

松平薩摩守殿

松平伊予守殿

松平宮内太輔殿

松平下野守殿

毛利美作守殿

佐竹右京亮殿

細川越中守殿

毛利長門守殿

京極若狹守殿

松平美作守殿

上杉弾正少弼殿

毛利甲斐守殿

丹羽五郎左衛門殿

立花飛彈守殿

京極采女正殿

宗 对馬守殿

稻葉彦六殿

宰相
織田兵部少輔殿

伊井兵部少輔殿

合廿三人

同八月 家久公御暇ニ而京 御立、其月中旬鹿府 御着城、伊勢貞昌等御供、島津下野守久元は御先ニ下国ニ而候、此年 家光公 秀忠公之御讓を被為受、征夷大將軍之宣下被為 在候、因是同九月 家久公より 兩御所様江起請文被差上候、

一寛永三年 家久公前年四月十三日より 御參府ニ而、此年正月上旬御暇ニ而江戸被為 立、喜入撰津守忠政等御供、三月朔日 御着城之處、此年 兩御所様御上洛ニ付、閏四月上旬 家久公鹿兒島 御発駕ニ而、前以御上洛被遊居、同六月 秀忠公 御上洛之日は御中途迄御迎被為 出、御着後二条御城江 御登城ニ而、御目見被為 濟、同廿五日 秀忠公御參内ニ付、家久公前以於 近衛家御装束被遊 御供御勤、同八月十九日、 秀忠公御執奏ニ而、 家久公權中納言從三位

御昇進被 仰出、此日從

今上後水尾院様衛府御太刀一腰貞真作、寮御馬一疋御鞍、勅命ニ而 御拝領、口宣左之通、

上卿 中御門中納言(宣衡)

寛永三年八月十九日 宣旨

參議藤原家久朝臣

宣任權中納言

藏人左少弁藤原時長奉

上卿 中御門中納言

寛永三年八月十九日 宣旨

正四位下藤原家久朝臣

宣叙從三位

藏人左少弁藤原時長奉

同九月六日

後水尾帝 秀忠公之二条御城江 行幸之刻 秀忠公為 御迎御參内ニ付、 家久公騎馬御供、同十日 還御迄御滞留、四日之内倭歌音楽等之

御遊興被為 催、 行幸より還幸迄毎日 御登城被為
勤、殊ニ琉球より今帰仁樂童子三人同伴候を被 召出、
御座與相成、從

禁中様白銀廿枚、從

仙洞様卅枚、六条西御門跡様より拾枚、 近衛様より
縮緬壹卷ツ、 衆人共江拝領被仰付、 九月中旬 家久
公御暇ニ而 御下国、御家老伊勢貞昌、其外ニは伊勢
内記貞朝・相良主税助長広・猪俣為右衛門則康・福崎
新兵衛・伊地知民部少輔重政・野崎権八・高岡より河
上勘解由忠辰・加世田より愛徳四郎兵衛・蒲生之木上
掃部、助・出水竹田宮内左衛門等御供為仕事、旧記ニ相
見得申候、

一同十一戌年 家光公御参内ニ付、五月五日上使を以

家久公御暇御給、白銀千枚・袷単物百領御拝領候間、

光久公御同道、御先ニ江戸被為 立、御家老伊勢貞昌
等御供ニ而御上洛、木之下御屋敷ニ被為待、七月十四
日 御奉書左之通、

来十八日可被成 御参内之旨被 仰出候、然は衣冠
ニ而如此、以前四足之御門迄被参尤候、恐々謹言、

七月十四日

酒井讚岐守

忠勝判

土井大炊頭

利勝判

薩摩

中納言殿

人々御中

明日は日出ニ

禁裏四足之御門迄被参、可有供奉候、以上、

七月十七日

薩摩

中納言殿

右通御供被遊 光久公茂此時始而

禁中江 御参、閏七月二日御老中酒井忠勝等御達ニ而、
琉球世替之謝恩使佐敷王子・金武按司等於京着は、
御目見可被 仰付旨被 仰出、同九日於京師御礼相濟、

同廿日 家久公御暇ニ而、即日京師 御立、直ニ御下
國、光久公は又如江戸 御登被遊、同八月中旬

家久公は鹿兒島江 御着城、此御供御家老伊勢貞昌一
人ニ而、江戸よりは被為 立、島津下野守久元江早々

出立可被致上京旨被 仰付越、京 御立ニは両老共暫
為被残やう相見得、其外喜入久右衛門久供・三原左衛

門尉重庸・伊地知采女正重康・同左右衛門重政・同清
左衛門等茂御供ニ而上洛、左右衛門儀は、光久公御

供ニ而如江戸為參事共、其比之古書ニ散見仕居候、右
通慶長十巳年以来、同十一年、元和三巳年、同九亥

年、寛永三寅年、同十一戌年迄
家康公 秀忠公 家光公御三代 此御方様は

家久公 光久公御兩代之御間ニ而、及六度 御參内被
為 在、其度毎ニ前件通、度々御供為被遊事見当候成

ニ、匆卒書拔甚乍不束、此段申上候、以上、
戌十月二日 御使番御記録奉行勤
伊地知小十郎

冊子原寸 縦二八糎 横一九・八糎 一六枚

喜入撰津ヨリ小松帯刀へ

茂久公參府ノ件

羽犬塚より之御問合、去月廿六日夜致着、委曲致承知、
御成行達

三郎様御聴候所、御沙汰之趣左ニ申進候、

太守様御參府御年割又々被相替、殊ニ

大御公 公邊參 内も来亥二月中と被仰出候由御座候得共、中

山次左衛門より御問合申候通、先御願立相成可然、自

然御願濟不相成御模様ニ御座候ハ、成行早々可被申

越、左候ハ、其趣ニ応し、御発駕可被遊とも何分ニ

も其節々思召可被為在と之 御沙汰ニ御座候、

一三田侯暫く御滯府被下度、登殿より被為願候由申来、

勿論三田侯より

三郎様江 御直書も被為進候由ニ而、自定式飛脚便よ

り御返答可被為進答と奉伺候、就而は前条通、御願濟

相成候得は、御滯府ニも及間敷、御早く

御參府不被為成候而不相濟筋ニ候得は、暫く御滯府被

成候ハ、旁御仕合之御事ニ被為在旨をも、御方江可申越旨致承知候、乍然御願立之趣ニ応し、宜ニ取計候、此旨町便より御報申進候、以上、

十月二日

喜入撰津

小松帶刀殿

追而御方へ被相付足輕ハ、別段差立遣候、此度ハ何分早着不致不為濟儀故、町便折柄着致候付、右を以申進候、此段為御心得如此御座候、以上、

文書原寸 縦一六・一糎 横一三一・六糎

三三 近衛忠熙卿ヨリ薩摩少將殿へ

齊彬公贈官位及久光公任叙ノ件

〔包紙ウツ書〕
〔戌十二月四日吉井中助便達ス〕

御贈官

〔封紙ウツ書〕
薩摩少將殿

忠熙

〔朱印〕

以小松帶刀御到書之趣、委細承候、追々寒冷候処、益御揃御安康之条、珍重不斜存候、抑三郎殿先般公武御一和之為御上京、段々御尽力、於関東追々之御周旋ニ而、

叡慮尊奉之次第ニ相趣、実ニ格別之御誠忠、感伏難申迄ニ候、御上京ニ而參 内も被 仰出、御拝領物等在之候事、於其許も深畏申候旨、且官位被 仰出候テ、御内慮も在之候処、再三御辞退御申上、其許江中将御昇進之儀御願ニ付、是又御尤成御事ニ付、早々関東江 御沙汰ニ相成候事等、御帰国ニ而御承知、御当惑之次第等御尤ニ候、右ニ付三郎殿御尽力之儀も、故中将殿御遺託之旨ニ御隨ヒ、御周旋之訳ニも候得は、御贈官位之儀御願、右御成就申候ハ、御快ク御請ニ可相成との事、御実意御尤之至極ニ存候、何卒精々尽力ニ而早々從三位中納言贈官位ニ 宣下在之候様可取計、何も御安意御快ク御昇進御請之様ニと存候、何も右御答申入度、荒々如此候也、小松帶刀御使ニ而、御丁寧ニ種々惠給、深々忝受納致候、荒々御礼迄申度候、忠房ニも同様申入度由ニ

候也、

十月三日

文書原寸

縦 一五・二種

包紙原寸

縦 三六種

横 一一五・三種

横 二四種

二枚

三三 小松帯刀京都ヨリ在藩ノ中山大久保へ

久光公上京ノ召命、斉彬公御贈官其他

(端裏朱書)

「壬戌十月四日 小松 京より」

二九君御上

京被遊候様

御沙汰之趣は、昨日藤井良節差立申上越候通ニ而、一向

雲上 御依頼之 御訳ニ而、無抛御時宜合と奉存候、

右付下拙存慮ニは其御地御所置旁奉存候所、迎も急速

御上 京之処も六ヶ敷、兎角大概御国政向御手被召付

候而、御上 京不相成候而は、亦々御国元之混雜生し

申は眼前、左候得は勤 王も御十分ニ御出来被遊御訳

ニも不致候付、暫時成共、 御延引相成、来早春迄之

内ニ、精々御所置被召付、御上 京相成候而可然致愚

考候付、関白様 左大将様江も右之形行申上候得共、

邂逅之

叡慮故、一先申越候而、其上 三郎様 思召之処御返

答相成候様

御沙汰ニ付、藤井差立申候、尤 一橋刑部卿上 京之

義、関東より申上ニ相成候由、右ニ付其節は是非 三

郎様御上 京ニ相成居候而、何欵 御周旋御談判無之

候而は、迎も被安

叡慮候事ニも至り兼候間、折角近比ニ 御下国之事な

から、暫時御上 京有之候様、不一方 思召之哉ニ

殿下御初中山卿・正親町卿杯御咄ニ御座候、右之 御

趣意等は、実ニ御尤之御事ニ奉存候得共、何分御国元

之所旁無覚束奉存候間、迎も

御沙汰之通早目ニ上 京と申所は出来兼可申、来正月

ニ相成候へ、随分出来可申欵とも存候段、篤と申上

置候得共、何分 三郎様 思召之所、折角御待之御事

ニ奉伺候、実ニ機会は參り候付、早目ニ御上 京ニ相成、御尽力被遊度時節とは山々奉存候得共、前後旁勸考いたし候処、御国元之事難被捨置訳共奉存候付、右之所を以申出置申候間、篤と良節より事情形勢御聞取被成候而、御勸考之上被奉 伺、可然御取計可被成候一攘夷一条ニ付、

勅使被差下筋ニ相成候、三条様・姉小路様来ル十二日御発足ニ而御下向之筈御決定相成候段、上 京之上承候付、

陽明家江參殿之上、

朝廷より

御沙汰之次第相伺候処、段々六ヶ數御吟味ニ而余程御心配被遊候由、全体長土より頻ニ 三条公・姉小路公を奉責候而、是非直ニ打払不相成候而は不相濟杯と申立、両卿之所は一向御差はまり、 御下向之御考ニ被伺申候、併 朝議之所未

御沙汰振不被決、兩日中ニ三公 御出席ニ而、

御沙汰書等も御認ニ相成筈候付、存慮之形行申上候様、関白様方 御沙汰付、右之義ハ 三郎様御滞 京中ニ篤と 御談判ニも相成居候事ニ而、今更別段可奉申上筋も無御座候得共、既ニ近日 勅使御下向御取究ニも相成たる事御座候得は、兎角攘夷之

思召段は被仰出候而、關東決定之所不被

聞召候而、難被遊

御安心、此世態ニ相成候根本、外夷之故を以、爰ニ相成候事共、

御沙汰ニ相成候而、其段諸大名江も御達相成候様有之度申出置候、土州付添下向之由御座候、

一 一橋公上 洛は外ニ付添候人も無之由、

大樹公上 洛付、都合向として上 京之由ニは候得共、御都合計ならハ外ニ而も相濟可申義、しかし越前上洛等之延引ニ依り、上 京之段も申出相成候由ニ御座候間、何分早目ニ上 京被命、御取寄ニ而何欵 御沙

汰ニ相成候而可然段も申出置申候、

一三郎様御上 京来春共と申

思召ニも御座候ハ、

將軍上 洛来三月ニ被召延、 一橋正月方より被召寄

三郎様ニも其比御上 京ニ相成、何欵御談判御座候而

も可然愚考仕候得共、是は其御方之 思召不奉 伺候

而は、押究兼候付、未不申上候間、御勘考可被成候、

一当分 殿下御初、愈御確立ニ被成御座、先難有事ニ御

座候、藤井細事は可申上候、

一御増官一条は至極之御都合ニ而、

閑白様御請合、中・正卿ニも同断ニ而、直ニ

奏聞ニ相成模様ニ奉伺候、御願よりも一階上之所ニ而、

中納言様と

閑白様被思召段、内々 御沙汰承知仕候、右段 御答

書を以細事被 仰上候間、其段御申上置可被成候、御

互ニ御同慶奉存候、

一青門様ニは未御煩寸切と御全快不被為在候由候得共、

最早能キ御模様ニ奉伺候、明朝出立掛、拜謁被仰付筈

ニ而、参 殿之賦ニ御座候、中山・正親町卿も御不快

ニ而、不参ニ御座候得共、両卿共最早快気ニ相成、中

山公も明日より出 朝之段致承知候、

一御裏御殿之一条等は本田より可申越候、

一太守様御参 勤之義は弥御延引不相成候而、不相濟義

と奉存候間、差急出府周旋可仕考ニ御座候、

一長州・姫路今日参

内ニ相成申候、土州明日参

内之賦之由承申候、しかし是は表通之事ニ而、先初而

之 御目見と申様な都合ニ而、長橋之方ニ而も無之由

御趣意は

京師之御為周旋ニ付、参

内被

仰出候由、しかしなから参

内と申は格別之事ニ而、今少し早目ニ承候得は、存慮

之趣も御座候得共、跡越程之事ニ而致方も無御座候、

一此方守衛人数も格別誰ニそと申て名を指シ、御所置不
相付候而不叶訳ニも被聞申さず候得共、今成ニ被召置
候而は、つまり何欵仕出申は安中ニ御座候間、大概御
人撰ニ而、三十人欵六拾人欵被差立、交代被仰付候而
は如何ニ有之哉と相考申候、差引仕長の御人撰第一ニ
奉存候、御勘考可被成候、

一幕変革も有之、只今之所ニ而は勤

王之道を相立候姿ニ見得候付、滞京之大名守衛御暇被
下候義も申立候得共、急ニ其辺之所は難被遊御事と奉
伺候、

一筑前、中甸方ニ上 京之由、肥後・因州も上 京之由
承申候次第は良節心得居可申候、

一井上弥八郎当分此方蔵役人ニ而参り居候処、最早勤済
前ニ相成、不罷下候而不叶義ニ御座候得共、当分御用
立者候付、滞 京被仰付度段外より承候間、見聞役ニ
而も被仰付、重ニ而も詰被仰付可然欵と奉存候、是は
被召置候方可宜と奉存候、鶴木所は矢張相替候義無御

座候、是も御勘考可被下候、

右之外巨細何辺申越度相考申候得共、何分此節は別而
急ケ敷、大意迄申越候、此方之形勢等は藤井差立候付、
当人より御聞取、件々之事共御勘考之上被奉 伺、何
分可然取計被成度、此段御内用を以申越候条、
御両殿様可被達

貴聞候、以上、

小松帯刀

十月四日夜半認

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一六一号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六糎 横五三五・八糎

三 近衛忠熙卿ヨリ修理大夫三郎両公へノ通
告

故島津斉彬贈官位宣下写添へ

〔包紙ウツ書②〕
「戊十月十六日藤井良節便達ス」

〔包紙ウツ書①〕
修理大夫殿 内々

三郎殿

〔朱〕
「写終」

〔朱〕
〔朱〕
「戊十月
御贈官之事」

〔封紙ウツ書〕
修理大夫殿

忠熙

三郎殿

〔朱〕
〔朱〕

三三八ノ一

〔島津奇彬〕
松平故薩摩守儀、存生中国難を憂、抽丹誠種々勸考苦心、

病末ニ及、弟三郎等江奉為国家遺訓之儀共、達

叡聞

御感不斜候、先代家久雖存命中、権中納言

宣下之家例も有之候間、以格別之

叡慮、贈権中納言従三位可被

宣下

思食候、右之趣早々御執計有之候様、宣申入関白殿被命候、仍申進候事、

十月

文書原寸 縦一七・五種 横七八種

三三八ノ二

尚々寒氣專御自愛と存候、当地ハ今朝初雪ニ而□□追々寒氣相増候、弥御揃御勇猛之御□令賀候、尚承度存候、抑故薩摩守殿贈官位之儀、兼而其刃之

叡慮も被為在候旨ニ而、早速

御沙汰ニ相成、別紙之通幕府江被 仰出候、仍内々右之

写御目ニ掛置候、小松帯刀江も右之写内々遣し置候事ニ

候、仍荒々右之段申入候、勅使明後十二日発足ニ付御

用繁取紛、大乱書御免可給□□、

十月十日認置

文書原寸 縦一六・一種 包紙原寸①縦一七・四種 横二六・九種
横五〇・一種 ②縦三一・五種 横四三・六種

○亮 生麦事件ニ付閣老ト英代理公使トノ応接

〇〇 大門口台場ヨリ神瀬ニ至ル海底水深測量

報告

(表紙)
一戊十月十六日

大門口御台場ヨリ神瀬迄之間汐尺帳」

一 大門口御台場より神瀬迄之間千五百八拾間	一 四百五間	老尋式尺
一 三百六拾間目は遠于瀉	一 四百拾間	老尋式尺五寸
一 三百六拾五間	一 四百拾五間	老尋式尺五寸
一 三百七拾間	一 四百式拾間	老尋四尺五寸
一 三百七拾五間	一 四百式拾五間	式尋
一 三百八拾間	一 四百三拾間	式尋
一 三百八拾五間	一 四百三拾五間	式尋式尺五寸
一 三百九拾間	一 四百四拾間	三尋
一 三百九拾五間	一 四百四拾五間	式尋式尺五寸
一 四百間	一 四百五拾間	五尋
	一 四百五拾五間	七尋
	一 四百六拾間	八尋式尺五寸
	一 四百六拾五間	拾老尋式尺五寸
	一 四百七拾間	拾三尋
	一 四百七拾五間	拾四尋式尺五寸
	一 四百八拾間	拾五尋
	一 四百八拾五間	拾六尋

一四九拾間	拾六尋貳尺五寸	一五〇七拾五間	貳拾貳尋四尺五寸
一四九拾五間	拾七尋	一五〇八拾間	貳拾貳尋四尺五寸
一五〇間	拾七尋貳尺五寸	一五〇八拾五間	貳拾貳尋四尺五寸
一五〇五間	拾七尋四尺	一五〇九拾間	貳拾三尋老尺
一五〇拾間	拾八尋	一五〇九拾五間	貳拾三尋老尺
一五〇拾五間	拾八尋貳尺五寸	一六〇〇間	貳拾三尋貳尺
一五〇貳拾間	拾九尋	一六〇五間	貳拾三尋三尺
一五〇貳拾五間	拾九尋貳尺五寸	一六〇拾間	貳拾四尋
一五〇三拾間	貳拾尋	一六〇拾五間	貳拾三尋三尺
一五〇三拾五間	貳拾尋	一六〇貳拾間	貳拾三尋三尺
一五〇四拾間	貳拾老尋	一六〇貳拾五間	貳拾三尋三尺
一五〇四拾五間	貳拾貳尋	一六〇三拾間	貳拾四尋
一五〇五拾間	貳拾貳尋	一六〇三拾五間	貳拾四尋
一五〇五拾五間	貳拾貳尋老尺	一六〇四拾間	貳拾四尋貳尺五寸
一五〇六拾間	貳拾貳尋四尺五寸	一六〇四拾五間	貳拾四尋貳尺五寸
一五〇六拾五間	貳拾貳尋四尺五寸	一六〇五拾間	貳拾四尋貳尺五寸
一五〇七拾間	貳拾貳尋四尺五寸	一六〇五拾五間	貳拾四尋貳尺五寸

一六六六拾間	貳拾四尋貳尺五寸	一七百四拾五間	貳拾六尋
一六六六拾五間	貳拾四尋三尺	一七百五拾間	貳拾六尋
一六六七拾間	貳拾四尋三尺	一七百五拾五間	貳拾六尋
一六六七拾五間	貳拾四尋三尺	一七百六拾間	貳拾六尋
一六六八拾間	貳拾四尋三尺	一七百六拾五間	貳拾六尋
一六六八拾五間	貳拾四尋三尺	一七百七拾間	貳拾七尋
一六六九拾間	貳拾四尋三尺	一七百七拾五間	貳拾七尋
一六六九拾五間	貳拾四尋三尺	一七百八拾間	貳拾七尋
一七百間	貳拾四尋三尺	一七百八拾五間	貳拾七尋
一七百五間	貳拾四尋三尺	一七百九拾間	貳拾七尋
一七百拾間	貳拾四尋三尺	一七百九拾五間	貳拾七尋
一七百拾五間	貳拾四尋三尺	一八百間	貳拾七尋
一七百貳拾間	貳拾五尋	一八百五間	貳拾七尋
一七百貳拾五間	貳拾五尋	一八百拾間	貳拾七尋
一七百三拾間	貳拾五尋	一八百拾五間	貳拾七尋
一七百三拾五間	貳拾五尋	一八百貳拾間	貳拾七尋
一七百四拾間	貳拾六尋	一八百貳拾五間	貳拾六尋

一 八百三拾間	式拾五尋式尺五寸	一 九百拾五間	式拾六尋四尺
一 八百三拾五間	式拾五尋式尺五寸	一 九百貳拾間	式拾六尋四尺
一 八百四拾間	式拾五尋式尺五寸	一 九百貳拾五間	式拾六尋四尺
一 八百四拾五間	式拾五尋四尺	一 九百三拾間	式拾六尋四尺
一 八百五拾間	式拾五尋四尺	一 九百三拾五間	式拾六尋四尺
一 八百五拾五間	式拾六尋	一 九百四拾間	式拾六尋四尺
一 八百六拾間	式拾六尋	一 九百四拾五間	式拾六尋四尺
一 八百六拾五間	式拾六尋	一 九百五拾間	式拾六尋四尺
一 八百七拾間	式拾六尋	一 九百五拾五間	式拾六尋四尺
一 八百七拾五間	式拾六尋	一 九百六拾間	式拾六尋四尺
一 八百八拾間	式拾六尋	一 九百六拾五間	式拾六尋四尺
一 八百八拾五間	式拾六尋	一 九百七拾間	式拾六尋四尺
一 八百九拾間	式拾六尋	一 九百七拾五間	式拾六尋四尺
一 八百九拾五間	式拾六尋式尺五寸	一 九百八拾間	式拾六尋四尺
一 九百間	式拾六尋四尺	一 九百八拾五間	式拾六尋四尺
一 九百五間	式拾六尋四尺	一 九百九拾間	式拾六尋四尺
一 九百拾間	式拾六尋四尺	一 九百九拾五間	式拾六尋四尺

一千間	貳拾六尋四尺	一千八拾五間	貳拾六尋
一千五間	貳拾六尋老尺	一千九拾間	貳拾六尋
一千拾間	貳拾六尋老尺	一千九拾五間	貳拾六尋
一千拾五間	貳拾六尋老尺	一千百間	貳拾六尋
一千貳拾間	貳拾六尋老尺	一千百五間	貳拾六尋
一千貳拾五間	貳拾六尋	一千百拾間	貳拾六尋
一千三拾間	貳拾六尋	一千百拾五間	貳拾六尋
一千三拾五間	貳拾六尋	一千百貳拾間	貳拾六尋
一千四拾間	貳拾六尋	一千百貳拾五間	貳拾六尋
一千四拾五間	貳拾六尋	一千百三拾間	貳拾六尋
一千五拾間	貳拾六尋	一千百三拾五間	貳拾六尋
一千五拾五間	貳拾六尋	一千百四拾間	貳拾六尋
一千六拾間	貳拾六尋	一千百四拾五間	貳拾六尋
一千六拾五間	貳拾六尋	一千百五拾間	貳拾六尋
一千七拾間	貳拾六尋	一千百五拾五間	貳拾六尋
一千七拾五間	貳拾六尋	一千百六拾間	貳拾六尋
一千八拾間	貳拾六尋	一千百六拾五間	貳拾六尋

一千百七拾間	貳拾六尋	一千貳百五拾五間	貳拾七尋貳尺
一千百七拾五間	貳拾六尋	一千貳百六拾間	貳拾七尋貳尺
一千百八拾間	貳拾七尋	一千貳百六拾五間	貳拾七尋貳尺
一千百八拾五間	貳拾七尋老尺	一千貳百七拾間	貳拾七尋貳尺
一千百九拾間	貳拾七尋貳尺	一千貳百七拾五間	貳拾七尋貳尺
一千百九拾五間	貳拾七尋貳尺	一千貳百八拾間	貳拾七尋貳尺
一千貳百間	貳拾七尋貳尺	一千貳百八拾五間	貳拾七尋貳尺
一千貳百五間	貳拾七尋貳尺	一千貳百九拾間	貳拾七尋貳尺
一千貳百拾間	貳拾七尋貳尺	一千貳百九拾五間	貳拾七尋貳尺
一千貳百拾五間	貳拾七尋貳尺	一千三百間	貳拾七尋貳尺
一千貳百貳拾間	貳拾七尋貳尺	一千三百五間	貳拾七尋老尺
一千貳百貳拾五間	貳拾七尋貳尺	一千三百拾間	貳拾七尋老尺
一千貳百三拾間	貳拾七尋貳尺	一千三百拾五間	貳拾七尋
一千貳百三拾五間	貳拾七尋貳尺	一千三百貳拾間	貳拾七尋
一千貳百四拾間	貳拾七尋貳尺	一千三百貳拾五間	貳拾七尋
一千貳百四拾五間	貳拾七尋貳尺	一千三百三拾間	貳拾六尋貳尺
一千貳百五拾間	貳拾七尋貳尺	一千三百三拾五間	貳拾六尋

一千三百四拾間	貳拾六尋貳尺五寸	一千四百貳拾五間	六尋
一千三百四拾五間	貳拾六尋	一千四百三拾間	五尋
一千三百五拾間	貳拾五尋壹尺	一千四百三拾五間	四尋壹尺
一千三百五拾五間	貳拾五尋	一千四百四拾間	四尋
一千三百六拾間	貳拾五尋	一千四百四拾五間	三尋
一千三百六拾五間	貳拾四尋三尺	一千四百五拾間	三尋
一千三百七拾間	貳拾四尋三尺	一千四百五拾五間	三尋
一千三百七拾五間	貳拾貳尋	一千四百六拾間	三尋
一千三百八拾間	貳拾壹尋	一千四百六拾五間	貳尋貳尺五寸
一千三百八拾五間	貳拾尋	一千四百七拾間	貳尋貳尺五寸
一千三百九拾間	拾九尋	一千四百七拾五間	貳尋貳尺五寸
一千三百九拾五間	拾八尋	一千四百八拾間	貳尋貳尺五寸
一千四百間	拾六尋	一千四百八拾五間	貳尋
一千四百五間	拾四尋壹尺	一千四九拾間	貳尋
一千四百拾間	拾尋貳尺五寸	一千四百九拾五間	壹尋三尺
一千四百拾五間	八尋	一千五百間	壹尋貳尺五寸
一千四百貳拾間	六尋壹尺	一千五百五間	貳尋

一千五百拾間 貳尋

一千五百拾五間 貳尋壹尺

一千五百貳拾間 貳尋壹尺

一千五百貳拾五間 貳尋壹尺

一千五百三拾間 貳尋壹尺

一千五百三拾五間 貳尋

一千五百四拾間 壹尋三寸

一千五百四拾五間 壹尋貳尺五寸

一千五百五拾間 壹尋貳尺五寸

一千五百五拾五間 壹尋壹尺

一千五百六拾間 壹尋壹尺

一千五百六拾五間 壹尋

一千五百七拾間 壹尋

一千五百七拾五間 三尺

一千五百八拾間 貳尺五寸

右は大門口御台場より神瀬迄汐尺右之通御座候、以上

戌十月十六日

御船頭

一六拾間

五尋貳尺五寸

冊紙原寸 縦一四種 横二種 一〇枚

脇船頭

仮脇船頭

言一 神瀬ヨリ桜島洗出台場ニ至ル海底水深
測量

(表紙)
一 戌十月十六日

神瀬より桜島洗出御台場迄之間汐尺帳

一 神瀬より桜島洗出御台場迄七百九拾間

神瀬より

一 拾間 貳尋

一 貳拾間 貳尋貳尺五寸

一 三拾間 三尋貳尺五寸

一 四拾間 四尋貳尺五寸

一 五拾間 四尋貳尺五寸

一 六拾間 五尋貳尺五寸

一七拾間	六尋式尺五寸	一式百四拾間	三拾六尋
一八拾間	八尋	一式百五拾間	三拾八尋
一九拾間	拾尋	一式百六拾間	三拾九尋
一百間	拾老尋	一式百七拾間	四拾尋
一百拾間	拾老尋	一式百八拾間	四拾老尋
一百式拾間	拾三尋	一式百九拾間	三拾八尋
一百三拾間	拾六尋	一三百間	四拾尋
一百四拾間	拾五尋式尺五寸	一三百拾間	四拾三尋
一百五拾間	拾七尋	一三百式拾間	四拾三尋
一百六拾間	拾八尋	一三百三拾間	四拾四尋
一百七拾間	拾八尋	一三百四拾間	四拾四尋
一百八拾間	拾八尋	一三百五拾間	四拾四尋
一百九拾間	式拾三尋	一三百六拾間	四拾式尋
一式百間	式拾六尋三尺	一三百七拾間	四拾式尋
一式百拾間	式拾九尋式尺五寸	一三百八拾間	四拾式尋
一式百式拾間	三拾式尋	一三百九拾間	四拾式尋
一式百三拾間	三拾三尋三尺	一四百間	四拾式尋

一 四百拾間	四拾卷尋	一 五百八拾間	貳拾七尋貳尺五寸
一 四百貳拾間	四拾尋	一 五百七拾間	貳拾七尋貳尺五寸
一 四百三拾間	三拾九尋	一 六百間	貳拾六尋
一 四百四拾間	三拾九尋	一 六百拾間	貳拾五尋
一 四百五拾間	三拾九尋	一 六百貳拾間	貳拾四尋三尺
一 四百六拾間	三拾八尋	一 六百三拾間	貳拾四尋
一 四百七拾間	三拾七尋	一 六百四拾間	貳拾四尋
一 四百八拾間	三拾八尋	一 六百五拾間	貳拾四尋
一 四百九拾間	三拾七尋	一 六百六拾間	貳拾四尋
一 五百間	三拾六尋	一 六百七拾間	貳拾三尋
一 五百拾間	三拾五尋	一 六百八拾間	貳拾卷尋
一 五百貳拾間	三拾三尋	一 六百九拾間	貳拾卷尋
一 五百三拾間	三拾三尋	一 七百間	拾九尋
一 五百四拾間	三拾貳尋	一 七百拾間	拾八尋
一 五百五拾間	三拾卷尋	一 七百貳拾間	拾七尋
一 五百六拾間	三拾卷尋	一 七百三拾間	拾三尋
一 五百七拾間	貳拾八尋	一 七百四拾間	拾卷尋

一七五五拾間

拾尋

一砂揚場より八拾間目迄遠千瀉

一七五六拾間

七尋壹尺

一八拾五間 壹尋

一七七七拾間

六尋

一九拾間 壹尋貳尺五寸

一七七八拾間

貳尋

一九拾五間 貳尋壹尺

一七百九拾間

壹尋

一百間 貳尋壹尺

右は神瀬より桜島洗出御台場迄汐尺右之通御座候、以

上、

戌十月十六日

御船頭

一百拾五間 四尋壹尺

脇船頭

一百貳拾間 五尋貳尺五寸

仮脇船頭

一百貳拾五間 八尋貳尺五寸

冊子原寸 縦一四種 横二種 五枚

一百三拾間 拾尋

一百三拾五間 拾貳尋

三三 砂揚場ヨリ神瀬ニ至ル海底水深測量報告

(表紙) 一戌十月十七日

砂揚場ヨリ神瀬迄汐尺帳

一百四拾間 拾三尋

一百四拾五間 拾五尋

一百五拾間 拾三尋

一百五拾五間 拾四尋

一百六拾間 拾五尋

一砂揚場より神瀬迄之間千三拾五間

一百六拾五間	拾五尋式尺五寸	一貳百五拾間	貳拾四尋
一百七拾間	拾六尋	一貳百五拾五間	貳拾四尋
一百七拾五間	拾六尋	一貳百六拾間	貳拾四尋
一百八拾間	拾八尋式尺五寸	一貳百六拾五間	貳拾四尋
一百八拾五間	拾九尋式尺五寸	一貳百七拾間	貳拾四尋式尺五寸
一百九拾間	拾九尋式尺五寸	一貳百七拾五間	貳拾五尋式尺五寸
一百九拾五間	貳拾尋式尺五寸	一貳百八拾間	貳拾三尋式尺
一貳百間	貳拾壹尋	一貳百八拾五間	貳拾三尋式尺
一貳百五間	貳拾壹尋	一貳百九拾間	貳拾三尋式尺
一貳百拾間	貳拾壹尋式尺五寸	一貳百九拾五間	貳拾三尋
一貳百拾五間	貳拾壹尋式尺五寸	一三百間	貳拾三尋式尺
一貳百貳拾間	貳拾貳尋	一三百五間	貳拾三尋
一貳百貳拾五間	貳拾貳尋式尺	一三百拾間	貳拾貳尋式尺
一貳百三拾間	貳拾貳尋式尺	一三百拾五間	貳拾貳尋
一貳百三拾五間	貳拾貳尋式尺五寸	一三百貳拾間	貳拾三尋
一貳百四拾間	貳拾四尋式尺五寸	一三百貳拾五間	貳拾四尋式尺
一貳百四拾五間	貳拾四尋式尺五寸	一三百三拾間	貳拾四尋式尺

一三百三拾五間	貳拾五尋	一四百貳拾間	貳拾三尋貳尺
一三百四拾間	貳拾五尋	一四百貳拾五間	貳拾四尋貳尺
一三百四拾五間	貳拾五尋	一四百三拾間	貳拾四尋壹尺
一三百五拾間	貳拾五尋壹尺	一四百三拾五間	貳拾五尋
一三百五拾五間	貳拾五尋貳尺五寸	一四百四拾間	貳拾五尋八寸
一三百六拾間	貳拾五尋貳尺五寸	一四百四拾五間	貳拾五尋三尺
一三百六拾五間	貳拾六尋	一四百五拾間	貳拾五尋四尺三寸
一三百七拾間	貳拾六尋	一四百五拾五間	貳拾四尋
一三百七拾五間	貳拾五尋貳尺五寸	一四百六拾間	貳拾四尋貳尺五寸
一三百八拾間	貳拾五尋貳尺五寸	一四百六拾五間	貳拾四尋貳尺五寸
一三百八拾五間	貳拾六尋	一四百七拾間	貳拾五尋
一三百九拾間	貳拾六尋	一四百七拾五間	貳拾六尋
一三百九拾五間	貳拾五尋四尺	一四百八拾間	貳拾七尋
一四百間	貳拾五尋四尺	一四百八拾五間	貳拾七尋
一四百五間	貳拾五尋四尺	一四百九拾間	貳拾七尋
一四百拾間	貳拾五尋四尺	一四百九拾五間	貳拾七尋
一四百拾五間	貳拾五尋四尺	一五百間	貳拾七尋壹尺

一五百五間	式拾七尋老尺	一五百九拾間	式拾七尋式尺五寸
一五百拾間	式拾七尋老尺	一五百九拾五間	式拾七尋式尺五寸
一五百拾五間	式拾七尋老尺	一六百間	式拾七尋式尺五寸
一五百式拾間	式拾五尋老尺	一六百五間	式拾七尋式尺五寸
一五百式拾五間	式拾四尋式尺五寸	一六百拾間	式拾七尋式尺五寸
一五百三拾間	式拾四尋式尺五寸	一六百拾五間	式拾七尋式尺五寸
一五百三拾五間	式拾五尋老尺	一六百式拾間	式拾七尋式尺五寸
一五百四拾間	式拾六尋式尺五寸	一六百式拾五間	式拾七尋式尺五寸
一五百四拾五間	式拾六尋三尺	一六百三拾間	式拾七尋式尺五寸
一五百五拾間	式拾六尋三尺	一六百三拾五間	式拾七尋式尺五寸
一五百五拾五間	式拾七尋	一六百四拾間	式拾七尋式尺五寸
一五百六拾間	式拾七尋	一六百四拾五間	式拾八尋老尺
一五百六拾五間	式拾七尋式尺五寸	一六百五拾間	式拾八尋
一五百七拾間	式拾七尋式尺五寸	一六百五拾五間	式拾八尋
一五百七拾五間	式拾七尋式尺五寸	一六百六拾間	式拾八尋
一五百八拾間	式拾七尋式尺五寸	一六百六拾五間	式拾八尋
一五百八拾五間	式拾七尋式尺五寸	一六百七拾間	式拾八尋

一六十七拾五間	貳拾八尋	一七百六拾間	貳拾六尋貳尺
一六十八拾間	貳拾八尋	一七百六拾五間	貳拾六尋貳尺
一六十八拾五間	貳拾八尋	一七百七拾間	貳拾六尋貳尺
一六十九拾間	貳拾七尋貳尺五寸	一七百七拾五間	貳拾六尋貳尺
一六十九拾五間	貳拾七尋貳尺五寸	一七百八拾間	貳拾六尋貳尺
一七百間	貳拾七尋貳尺五寸	一七百八拾五間	貳拾六尋
一七百五間	貳拾七尋貳尺五寸	一七百九拾間	貳拾六尋
一七百拾間	貳拾七尋	一七百九拾五間	貳拾五尋壹尺
一七百拾五間	貳拾七尋	一八百間	貳拾五尋
一七百貳拾間	貳拾七尋	一八百五間	貳拾五尋
一七百貳拾五間	貳拾七尋	一八百拾間	貳拾五尋
一七百三拾間	貳拾七尋三尺	一八百拾五間	貳拾五尋
一七百三拾五間	貳拾七尋壹尺	一八百貳拾間	貳拾壹尋
一七百四拾間	貳拾七尋	一八百貳拾五間	貳拾壹尋
一七百四拾五間	貳拾七尋	一八百三拾間	拾九尋貳尺五寸
一七百五拾間	貳拾七尋	一八百三拾五間	拾八尋貳尺五寸
一七百五拾五間	貳拾七尋	一八百四拾間	拾七尋

一 八百四拾五間	拾五尋	一 九百三拾間	三尋卷尺
一 八百五拾間	拾貳尋	一 九百三拾五間	三尋卷尺
一 八百五拾五間	八尋卷尺	一 九百四拾間	三尋
一 八百六拾間	七尋式尺五寸	一 九百四拾五間	貳尋三尺五寸
一 八百六拾五間	六尋式尺五寸	一 九百五拾間	貳尋三尺五寸
一 八百七拾間	五尋	一 九百五拾五間	貳尋式尺
一 八百七拾五間	四尋式尺五寸	一 九百六拾間	貳尋式尺
一 八百八拾間	四尋式尺五寸	一 九百六拾五間	貳尋卷尺
一 八百八拾五間	三尋式尺五寸	一 九百七拾間	貳尋
一 八百九拾間	三尋式尺五寸	一 九百七拾五間	老尋四尺
一 八百九拾五間	三尋式尺五寸	一 九百八拾間	老尋四尺
一 九百間	三尋式尺五寸	一 九百八拾五間	貳尋卷尺
一 九百五間	三尋式尺五寸	一 九百九拾間	貳尋卷尺
一 九百拾間	三尋式尺五寸	一 九百九拾五間	貳尋卷尺
一 九百拾五間	三尋式尺五寸	一千間	老尋三尺
一 九百貳拾間	三尋式尺	一千五間	老尋三尺
一 九百貳拾五間	三尋式尺	一千拾間	老尋三尺

一千拾五間 老尋弍尺

一千弍拾間 老尋弍尺

一千弍拾五間 老尋老尺

一千三拾間 老尋八寸

一千三拾五間 老尋

右は砂揚場より神瀬迄之間汐尺右之通御座候、以上、

戌十月十七日 御船頭

脇船頭

仮脇船頭

冊子原寸 縦一四種 横二種 九枚

三三 筑後守ヨリ高崎左太郎へ

宇和島家臣五郎ヨリ筑後守へ

賜暇帰国ノ御沙汰書

伊達伊予守賜暇帰国ノ件

合三通

三四三ノ一

(封紙ウツ書) 左太郎様

御親披

筑後守

7

寒光日増候、愈御安泰承奉欣喜候、然は伊達より頼ニ

付、昨日呈書申上候通、只今別紙之通吹聴有之候、則

伊達書面とも入御覽候、

一日々御用繁御察申上候、少々申上度儀も有之、一兩日

ニハ参

邸可仕と奉存候、若哉其内下辺御通行、弊廬へ暫時御

立寄も被下候ハ、大慶仕候儀ニ御座候、万々心事期

拝顔候、頓首、

十月廿日

文書原寸 縦一六・五種 横四一・四種

三四三ノ二

(封紙ウツ書) 筑後守様

五郎

拝啓仕候、追々寒威相増候処、益御清適被成御起居奉拝

賀候、昨日は御来臨被成下候由、他出中不得拜顔、失敬

無限恐惶奉存候、昨夜も二更比之帰宅、今朝もはや

外出ニ付、甚乍失敬参上も不仕、御疎情ニ打過申候、然

は兼而御配慮被成下候、寡君帰国御暇之儀、別紙ニ申上

候通被 仰出、深々難有仕合奉存候、全不浅御配慮被成

下候故之御義と勤し、御礼申上候、

薩侯江御礼之儀、何分宜御取扱奉希候、小子高崎・藤井

等之御礼ニ参上之筈、閑ニより今晚乗船、一寸下阪(坂)ニ相

成候欵、いづれニも何欵甚多忙ニ付而は、今日御礼ニ参

上仕兼可申欵と甚痛心仕候、乍慮外、右之趣呉々宜御達

し置被成下候様奉希候、尤下阪仕候とも無程上京仕候間、

其上万之御礼可申上候、依之不取敢急申上候、頓首、

十月廿日

文書原寸 縦一八種 横一二六・一種

三四三ノ三

御暇願之趣、不無理被

思召候間、願之通被

聞食候事、

十月

文書原寸 縦一六・二種 横三九・一種

越通船申請ニ付御船奉行ノ報告

一 銀五貫三百五拾三匁四分

越通船式艘

林太助

一同老貫五百六拾六匁六分四リ

越通船老艘

遠矢善助

一同老貫五百六拾六匁六分四リ

越通船老艘

神宮司平八

一同老貫四百四拾六匁六分四リ

越通船老艘

越通船式艘

京泊浦之

山下伝右衛門

平助

一同老貫四百四拾六匁六分四リ

越通船老艘

右老行久見崎より申請候、

木村源次郎

右は兩御船手越通船、右之者共江代銀上納申請被仰付置候間、此段申上候、以上、

一同八百式拾三匁三分式リ

越通船老艘

戌十月廿五日

御船奉行

山下伝右衛門

文書原寸 縦一四・四種 横一〇四・一種

一同六百拾四匁七分六リ式毛

小振越通船老艘

三 軍役奉行軍賦役ヨリ鹿兒島防備意見書

二 木丑之助

異国船御手当之儀ニ付被仰渡趣有之、左之通、

外ニ

越通船老艘

右老行坂元為次郎江支配被仰付置候得共、当

三月種子屋敷江申請被仰付候、

一 山川辺江異船相見得、内海之様可乘入模様茂候は、兼而郷々小高キ所江遠見番所・烽火台等取建置、且大砲拾発位を打、直ニ烽火可相立候、

但烽火之数は夷船之多少ニ依而増減茂可有之、

一 右ニ付前之浜江四艘以上之夷船相見得候は、直ニ諸手

一同四百貫七百式拾七文

当可有之、又は老式艘ニ而茂碇船応接之上手切レ之模

様候は、掛御家老衆より御軍役奉行御軍賦役江御差図

次第早鐘一度ニ二ツ、続け打、一呼吸を置、二ツ、此

相図ニ而御作事方并上下西田町三ヶ所之太鼓相鳴し、

其外吉野・草牟田・郡元等は最寄之寺鐘打鳴し、又は御

馬乗等ニ而庄屋所环江相図を告げ候次第可有之候、

一右等之相図ニ而、御城下五ヶ所之台場方人数は早々駆

付、直ニ放発之用意いたし、相図可相待候、

一御先手人数一番・二番組南林寺、三番組・四番組御春

屋内、五番組・六番組神明社并抱真院江駆付、危キ所

を可相援候、

一御旗本人数は二ノ丸又は御楼門前より護摩所辺江罷出

御差図可相待候、

一右之通夫々集場江早々駆付、大小砲其外要具相揃戦争

之用意いたし、弥手切レニ及び征討之時機候は、掛御

家老衆より御軍役奉行御軍賦役江御差図次第、鐘樓之

太鼓三ツ、続け打、是又一呼吸を置、是を相図ニ夷船

ニ近キ台場より放発、四ヶ所共ニ其通ニ而扱水軍兵船

十方ニ漕廻り、互ニ集散離合して夷船之前後左右より

一勢ニ打挫キ、万一彼等上陸ニ茂及候は、諸所ニ如法

扣たる御先手之六組待受たる鉄砲ニ而打挫べし、

一海軍之儀御城下ニ而御仕立相成候は、別紙通之次第ニ

而被仰付候は可然奉存候、

一諸郷私領之儀茂内外共海岸有之候分は、地形之遠近險

易兵卒之衆寡ニ從而、互ニ救応之人数配、是又追而被

仰付置度奉存候、

一御城下守兵之内より祇園洲御台場江一組、新波戸江一

組、弁天波戸江二組、大門口江一組、訓練場御台場江

一組早々駆付御下知可相待、

一右外之人数ニ茂拾八歳より五拾八歳迄之間、兼而浮遊

勢之姿ニ而什伍之組合致置、相図次第五番・六番組は

御楼門前より吉野橋涯、一番より四番組迄は山下橋南

泉院辺迄鉄砲得道具ニ而駆集り御下知可相待、

但備頭之儀は右現人数御取調之上、六拾人ニ老人死

当番頭之内より御人撰ニ而被仰付可有之候、

右之通吟味仕申候、以上、

十月廿七日

御軍役奉行

御軍賦役

(付紙) 御城下江

一 伊集院 市米 郡山 鹿兒島郡 一陳^(傳)

一 清水 栗野 山田 横川 踊 溝辺 日当山 一陳^(傳)

桜島横山赤水辺江

一 国分 曾於郡

右同瀬戸江

一 蒲生 二組

谷山江

一 伊作 阿多 田布施 川辺 山田 一陳^{川辺郡}

右之通臨時之節早々駆付候様被究置度御座候、

文書原寸 縦 一四・四種

付紙原寸 縦 一四・三種

横 二三九・一種

横 三九・四種

三六 堀仲左衛門ヨリ在国ノ同志へ

江戸薩邸ニ於ケル水藩浪士保護ノ件

(御裏書) 「堀表」

御懇書拜戴、追日寒氣相催候得共、弥御安泰被成御勤務
欣賀至極奉存候、隨而不佞儀も無異消光相勤罷在候ニ付
乍憚御放意可被下候、扱其御地御靜謐

君公倍御機嫌克被遊

御座、指宿江為 御湯治

御光越被遊候由奉恐悦候、次ニ防公子左公ニも御安全之
由御同慶奉存候、御示命之通当邸平安之処、過日水藩浪
人共夜中推参いたし候一条ニ付而ハ無際心配仕候、いま
に滞留罷在、平穩之事ニハ御座候へハ、いつれ一先御引戻
不相成候而不相済訳合御座候ニ付、折角打寄吟味御留守
居周旋之事候へ共、埒明不申、委細ハ伊集院江相詫被差置
候ニ付、疾承達被下候半、右旁於其御地異論も御座候由候
得共、固陋之論取ニ不足、賢兄御深慮之所一々御尤千万且
浪士共心底ハ可憐候得共、別而至愚之策ニ出申候、何分水

府一藩拳而動搖之由、漸押付被置候様子ニ御座候間、能々御英断之御所置無之候而ハ不日變ニ有候半と存候、尚候之左右ニ咫尺いたし居候者共ハ勿論、要路之所皆奸人共權ヲ執居候ニ付、いつれ根元より變革不相成候而ハ、此御方浪人御引戻も運兼候半と心配仕候、何分ニも武田大場之所を引出シ、要路ニ用候上不利戻候而ハ可致承服勢ニ無御座候、浪士共ハ於此方至極御丁寧ニ会釈被下置候ニ付、安氣之体更ニ動搖不仕候、いつれも平穩ニ御返付之所尽力相働可申候、

老侯御逝去為天下 慟哭仕候、独木公・越公・尾公之所未十分ニ至り不申、歎息之至御座候、畢竟久世侯英断無之所より幕政之愈衰弱瓦解之体、異人ハ倍跋扈、万民日を追テ苦難ニ陥り、幕政ハ当分正論地を帶テ無之、要係之事ハ皆奸物之意中より出申候、夫故建白之通路も絶、天下ノ有志半を引テ変乱ノ至ルを相待而已ニ御座候、当今之形勢ニ而は更回挽之期無御座候、老侯御逝去之機を不失、速ニ独・越之両賢奉揚

天下之權を掌握被遊候様之取計無之候付不相濟時節之処無其儀実ニ^(虫損)有志ノ望を失候ニ付、今通ニ而ハ不日變亂を醸出候儀、眼前被存候、衰世之所然小人ノ論、不破益固執之体御座候、孰元^(虫損)我境域を守持し、志氣を養、人心を鼓舞シ、非常之節名義ヲ不失、天下之為魁書を希外無之、乍然処乱事ハ当然之事御座候ニ付、衰世瓦解之勢を回挽いたし候儀、有志之本意ニ御座候得共、愚魯不能心底次第切齒之至御座候、示論之通独・越ノ両賢奉揚候儀第一ニ而、速ニ

大樹公上洛を被遊、大阪之城を前尾公をして鎮護せしめ奉り、正論を幕役ノ禁固を弛、再要路ニ出し重大ノ事件ハ賢明之列侯と俱ニ御断判相成、科は異人ノ跋扈を押へ申度候、左候ハ、不日天下ノ人心を鼓舞せしめ候儀必然と存候へ共、実ニ背本懷候事共不少、委細ハ拜謁之上ならてハ難申尽候、不憚忌諱書面御覽後御投火希申候、一日下一条ニ付而被仰候趣致承知、伊集院伝伺仕候趣御座候付承達可被下候、

右旁先ハ長州且御動靜為可奉伺如此御座候、尚期後謁候、追々敵寒之時節罷成申候間、御自愛御精務專要奉存候、恐惶敬白、

十月廿九日

城法拜

宝秀雅兄

机下

文書原寸 縦一六・五種 横一六八・六種

三七 久光公ヨリ青蓮院宮ヘノ答書

朝議常變二道ノ件

(端裏朱書)
「戊十月」

一朝議常變之二道何レニ被定可然哉之事、

右は方今之時勢ニ就而は、乍恐

朝議之大本被為居、幕威は勿論、下庶人之激論ニ

御動揺不被為 在候様奉存候、當時於關東モ大變革之

所置有之、武備充実外夷掃攘之基本相立候義と遠察仕

候ニ付、關東江被

仰下候御事共、篤と御評議之上、遵奉相成易キ事件ヲ被仰出難被行事共は、先御猶予之方可然哉と愚考仕候、若 御無理之儀被

仰出、万一於關東御断被申上候様御座候而は、乍恐朝威ニモ被為拘、且は下有志之輩伝承仕候ハ、關東違

勅之説又々沸騰仕紛々之世態ニ可相成哉と、別而懸念ニ奉存候事、

一其御地之形勢良節より委細承り申候処、第一枘ニ姦人殺害之儀御座候由、何共不穩之世態と奉存候、強暴之所行ニ付而は根本有之哉ニ承知いたし候得は、何卒右等之御取締被為在度御事と乍恐奉存候、姦人ニ於テハ惡ム可キ之事ニは御座候得共、是は

朝廷又は幕府より邪正、篤と御探索之上、敵重御所置被為在度、於 御膝下右様之儀御座候而は、第一御威徳ニモ被為拘、別而不輕御事と奉存候、且京師守護職被相定候上は諸藩之者共追々帰国被 仰渡奉存候

諸藩之雜人輩下ニ群集仕候而は

朝廷御混雜之根元可罷成哉と懸念ニ奉存候事、

一此節別段

勅使被差下、攘夷之儀被

仰出候由、此儀は先般愚意申上置候間贅言不仕候事、

右之儀共不入事とは奉存候得共、御尋問ニ奉從所存

申上候間、宜御取捨被成下度奉願候、以上、

戊十月

源久光拜上

文書原寸 縦一八・九糶 横一一四・九糶

言 久光公ヨリ近衛閣白へ

召命御請ト上京猶予ノ内願

(端裏朱書)
「戊十月」

御沙汰書御請

方今事体且当冬一橋刑部卿、上 京之旨被

聞食、万事被遊

御尋候儀共被為 在候間、早々上 京仕候様

御沙汰之趣恐入難有拜承仕候御請奉申上候、誠惶謹言、

閔白殿下江内願之大意

今般

御内命之儀被為在家臣藤井良節下向仕被 仰含候御旨逐一承知

仕、且御懇之御細書被成下、重疊難有拜承仕候、殊ニ御

沙汰書ヲ以不肖之小臣江重大之事件 御尋問被為在候故、

上 京仕候様被

仰出、其上

勅書ヲ以御承知之御事被為在候由ニ而、御写御下ケ被下

謹而拜見仕候、誠以冥加至極恐入難有仕合難尽筆端次第

ニ御座候、就而迅速ニ発足可仕義当然ニ御座候得共、先

般モ申上置候通、方今之時勢國務多端之上、夷狄掃攘之方

略嚴密申付、富国強兵之術計尽心力申度含ニ有之、且当

冬修理大夫參府仕候様、分而 幕命モ致承知候得は、兩人

一同発足仕候而は右等之儀共十分行届不申、万々一夷賊

領内江渡来いたし候儀も有之候節、聊ニ而も蹉跌仕候而
は当国之恥辱は勿論

御国体ニも相拘り恐入候儀ニ而、実以深心痛仕罷在申候
依之何共申上兼候得共、小臣是非上 京不仕候而不相濟
儀ニ御座候ハ、修理大夫参府御猶予被 仰付候様、閑
東江被

仰下候儀は相叶申間敷哉、於其儀は別而難有仕合奉存候、
又一橋も暫時延引之様も致承知候得は、以後発足之比合
相分り次第被 仰下候ハ、其節速ニ上京仕候而は何様
可有御座候哉、又は大樹公御上洛三月中江被 召延、一
橋上京来正月中と被 仰出候得は、於小臣は猶更難有奉
存候、右之趣誠ニ自由千万之願意ニ御座候得共、無拗情
実不悪 御汲取被成下願之通
勅許被為 在候様、御取成被 仰上被下度泣血百拝奉歎
願候、云々、

文書原寸 縦一六・七糎 横一四七・二糎

三九 佐土原藩京都守衛人数書
〔表紙〕
「御守衛人数帳」

家老

伊集院新右衛門

陪從五人

書役

長友新左衛門

陪從五人

小使足輕

大町藤兵衛

九人

番頭

富田六兵衛

陪從三人

与力

井上与左衛門

側用人

金丸吉左衛門

陪從一人

与力

三浦伊平

ノ七人

用人并者頭兼

海江田弥八兵衛

陪從耆人

談合役

山口友之進

陪從耆人

ノ四人

兵士

町田兵吉

鶴田力之進

小川源太郎

桑原新五兵衛

金丸平藏

高橋拾次郎

松山精一郎

長友左兵衛

立山伊兵衛

富田源右衛門

藥丸助之進

中野藤太

松田省輔

河野軍藏

瀬野口吉左衛門

金丸伊一郎

竹井岩一郎

中武貞兵衛

郡司八右衛門

木内作兵衛

郡山善左衛門

小使

四人

ノ武拾五人

什長士

大町友治

木本喜兵衛

松本貞五郎

小頭

但士分ニ而は無御座候、

中村宇兵衛

同氏長藏

松本段兵衛

郡司与八

隈本徳左衛門

赤木弥七郎

前田次右衛門

足輕

新名伝助

同氏仲左衛門

鈴木雄藏

日高市兵衛

斉藤彦右衛門

弓削栄助

清軍藏

岩本善左衛門

高橋庄助

同氏与右衛門

同氏軍右衛門

巢山吉平

児玉市之丞

松浦次右衛門

中馬磯次

谷山弥平次

金丸半藏

三浦庄藏

永野五兵衛

落合新左衛門

斉藤吉左衛門

小使

五人

ノ三拾六人

合人数

八拾老人

右之通御座候、以上、

十月

富田孟二郎

冊子原寸 縦一二・三種 横三六・一種 六枚

○三三 有馬新七等処罰ニ付久光公ヨリ家老へノ

口達

○三二 仙台藩玉虫左大夫報告ノ京都ニ於ケル薩長土三藩ノ勢力

三三 攘夷ニ関スル幕府へノ御沙汰書

攘夷之儀、先年来之

叙慮至方今更

御變動不被為在候、於柳宮追々変革新政を施行シ

叙旨遵奉ニ相成候条々、不斜 叙感被為在候、然処天下之人民攘夷ニ一定無之候而は、人心一致ニ茂難到、且国乱之程茂如何ト被惱

叙慮候間、於柳宮弥攘夷ニ決定有之、速諸大名江布告有之候様被

思召候、尤策略之次第ハ武将之職掌ニ候間、早速被尽衆議候而、至当之公論ニ決定有之、醜夷拒絶之期限をも被

議

奏聞之様

御沙汰候事、

文書原寸(折紙) 縦一九・一種 横五三・三種

三三 新納次郎四郎等ヨリ砲台築造意見上書

沖小島江御台場御築立被遊度旨、被

仰出候儀ニ付、先日私共存慮之形行奉申上置候得共、此

儀は誠ニ不容易重大之御事御座候付、猶地勢旁為見分

昨日差越、篤と見分茂仕細々評議仕候趣、左ニ奉申上候

一 沖小島之儀、当分平地之所方一町式反余海面より高キ事十八九間茂有之、尤前之浜を相去ル事二里位も御座候而、御台場御築立相成候共地面引井方ニ茂不容易事、殊ニ御城下之距離遠く御座候付、失利茂不宜様御座候付、先沖小島之方は当分通被召置、神瀬より前之浜之間大船通路は纔四五町も可有御座候間、是は暗礁御造立ニ而、右江対し候桜島赤水村之内洗出江相応之御台場被召立候ハ、差当御城下海防之道茂相付可申候付、往々集成館等盛ニ罷成銃棗茂今四五ヶ年も相過候得は、過分ニ出来増候付、至其期神瀬御築立之上御台場被召立尚又烏島・桜島横山江茂被召立候ハ、十分之御備ニ茂罷成可申哉、何分御急務之処は右様洗出江御築立、大砲三十挺より五拾挺位茂被相居、打手之儀桜島郷士等ニ而物主を御城下より可被差越儀は、当分御備組之通ニ茂被仰付候得は、直様御備之筋茂相付可申哉と奉存候、其上沖小島は賊之足掛可罷成も難計候付、燃先之辺江臼砲三挺位茂被居置候而、万一上陸之事茂候ハ

、右場所より纔八九町茂御座候間、臼砲之打加減も宜御座候間、旁差当右通可被仰付哉、乍然此儀は実ニ御安危ニ茂相拘御重事ニ御座候間、乍恐猶亦地勢彼是御覽被遊候上

御聖断被遊度御事と奉存候、

右之通吟味仕候付、此段申上候、以上、

戊十月 新納次郎四郎

折田平八

野村彦兵衛

文書原寸 縦一四・二種 横一九四・三種

言 沖小島砲台備付ノ件

沖小島御台場

中軍大砲五門

但丸量三貫目ニ而茂式貫目にてても尅貫目ニ而も丸量相揃へ

右ニ従火毒砲尅門ニ付百発宛、其数丸量不究は不

被賦、

同丸毒砲老門ニ付百宛、皆鉛丸、

合鉛丸五百

一行軍大砲十門

但百目箆位丸量相揃へ

右従火毒四拾貫目口薬込砲老門ニ付百発宛

同丸毒一千、砲老門ニ付百宛、皆鉛丸、

合砲数十五門

但外ニ代箆十五門備置度

右ニ従兵士七十五人、敢士を扱従置度事ニ御座候

一兵士長屋老軒、広狭順兵士之數、

一居宅老軒

但表間八帖・次間十帖・末へ八帖・土間八帖・納戸

六帖位

右過当ニも相見得候得共、時々御用談等も可有御

座候得は、上下之人も出入仕候ニ付、先此文は無

御座候而は、不叶儀と奉存候、

右半書を以申上候、外ニ面図相添差上申候、以上、

文書原寸 縦一六・一糎 横四〇・二糎

臺 攘夷期限制定ニ付幕府へノ勅諭

本田弥右衛門ヨリ国元御側衆へ

右一通

(包紙ウツ書)
一勅諭御書 一通

封

三五五ノ一

(端裏朱書)

「戊十月十六日 本田」
京

勅諭御書一通

右昨十五日

近衛様御殿へ被召、從

関白殿下御渡ニ相成、

太守様

三郎様江御達ニ候旨、被

仰出候段奉承知候付、鎌田市兵衛・貴島左右衛門江為致奉護差下候間、被差上候儀共可然様御取計可被給候、

以上

京都
本田弥右衛門

戊十月十六日
御國元

御側役衆

二之丸

御側役衆

文書原寸 縦一六・二種 横四七・二種

三五五ノ二

攘夷之儀、累年

觀念不被為絶候処、方今人民同冀望候、攘夷ニ決定無之
而は、人心一致ニ難到、且此假ニ而は、邦内混淆之程、
深以被腦

觀念候間、於幕府弥攘夷ニ決定候而、速諸大名江致布告、
且策略之次第拒絶之期限等衆議相立、

奏聞可有之、今度以

勅使被 仰遣候、此旨相心得

觀念徹底之様周還、猶亦報国尽忠可相励、内々
御沙汰候事、

十月

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第一六六号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五種 包紙原寸 縦 二八種

横六四・三種 横四〇・三種

三 藩内沿海諸郷へ備付ノ野戦砲取調書

一七百目野戦砲 三拾挺

一五百目右同 六拾七挺

一三百目右同 式挺

一貳百五拾目右同 壹挺

一貳百目右同 拾壹挺

一百五拾目右同 壹挺

右 西目・東目諸郷御渡付

鉄張等

一五百目より百目迄 拾五挺

右、御兵具方御在合之内、諸郷津口番所等江御入付、

一百目筒 式挺

右、御兵具御在合

文書原寸 縦一四・三種 横三八・六種

臺 集成館其他格護之銃砲取調書

舶来

一 砲封度六角銃砲挺

アメリカ

一 十二拇忽砲式挺

仏蘭西形

一 右同三挺

六百目

一 三封度四挺

右、集成館御在合

一 七百目砲挺

右、鶴江崎本鑄製方御格護

一 十五拇長忽砲砲挺

仏蘭西形

一 十二拇忽砲式挺

アメリカ

一 右同砲挺

六百目

一 三封度式挺

一 百五拾目カノン砲挺

一 六百目行山カノン砲挺

舶来

一 砲封度六角銃砲挺

右、川尻調練場御藏格護

外ニ

五百目八挺

右、御兵具方江御渡ニ付、川尻調練場御格護、

文書原寸 縦一五種 横五三・三種

美 江戸ニ於ケル幕臣任職面々書留

(朱) 「壬戌」

十月十七日

一 今朝紅葉山

御官江

御名代田沼玄蕃頭

十月十八日

殿中無別条、

一美濃守今日も登 城無之、

十月十九日

時服三

越前 運正寺

右就御暇被下旨、於柳之間、和泉守申渡之、
(永野忠緒)

御勘定

御徒目付 山本喜六

右被 仰付旨、於躑躅間、同人申渡之、若年寄中侍座、

外国奉行支配定役 杉田晋輔

支配勘定

小普請 石川又四郎組
支配勘定書役 北村鍊太郎

右被 仰付旨、於同席、同人申渡之、

一美濃守今日も登 城無之、

十月廿日

同組頭

御勘定 根立助(虫思) 郎

右被 仰付旨、於御右筆部屋縁頰、雅楽頭・老中列座

和泉守申渡之、

一美濃守不快之処、忌ニ付今日登 城無之、

但養子平八郎義、今卯ノ中刻死去之由、

十月廿一日

松平(頼学)左京大夫
名代武田大膳大夫

其方儀

御留守御警衛相心得罷在、大儀ニ思召候、此段可相

達旨

上意ニ候

小笠原(長守)左衛門佐

堀田(正盛)豊前守

松平(直勝)日向守

堀(親義)石見守

名代内藤備中守

同文言

右於御白書院縁頰、替席雅楽頭・老中列座、和泉守申

渡之、

稻葉備後守(正善)

同文言

右於芙蓉之間、列座同前、同人申渡之、

一美濃守今日も登 城無之、

十月廿二日

一今朝増上寺

慎徳院様(徳川家康) 御壺前江

御名代平岡丹波守(道弘)

一美濃守忌ニ付今日も登 城無之、

十月廿三日

御軍艦奉行組

池永輕之助

小普請組

石川又四郎組

木村金次郎

右被 仰付旨、於躑躅之間、和泉守申渡之、

一雅楽頭不快ニ付、今日登 城無之、

一美濃守今日も登 城無之、

十月廿四日

大御番頭

高木主水正(正忠)

名代最上出羽守(義雄)

右病氣ニ付、願之通御役

御免之旨、於芙蓉間、雅楽頭・老中列座、和泉守申渡

之、

和宮様

御広敷番之頭

天璋院様

賢治牌

御作事方仮役

上原悦三

長崎奉行支配
調役並出役

右被 仰付旨、於躑躅之間、同人申渡之、

一雅楽頭今日も登 城無之

一美濃守忌ニ付、今日も登 城無之、

十月廿五日

殿中無別条

一 雅楽頭今日も登 城無之、

一 美濃守忌ニ付、今日も登 城無之

一 昨廿三日之内

田沼玄蕃頭(意尊)

大坂表江為御用罷越候儀、其儀ニ不及候、

右於奥相濟、

十月廿六日

殿中無別条

一 雅楽頭快、今日登 城

一 美濃守忌ニ付、今日も登 城無之

十月廿七日

御小姓組

時服式

井上越中守組
藪七郎左衛門

右病氣ニ付、願之通御番

御免、且数年出精相勤候ニ付、被下旨、於御右筆部屋

縁煩、雅楽頭申渡之、若年寄中侍座、

一 外国人応接有之、和泉守・酒井飛驒守御用捨ニ而、今

日登 城無之、御用番代雅楽頭・平岡丹波守勤之、

一 美濃守忌 御免之處、不快ニ付、今日も登 城無之、

十月廿八日

殿中無別条

一 美濃守今日も登 城無之、

十月廿九日

御留守居番

主馬助取米三百俵
為隠居料被下之

伊勢平左衛門

実子惣領

御書院番

逸見若狭守組

同 主馬助

老衰ニ付、願之通御役

御免、隠居被 仰付、家督無相違、主馬助江被下之

右於菊之間、雅楽頭申渡之、若年寄中侍座、

大御番格

大砲差凶役頭取勤方
若代鋌太郎

同頭取

右被 仰付旨、於御右筆部屋縁煩、同人申渡之、

一和泉守・酒井飛驒守、今朝神奈川表江罷越候ニ付、今

右於奥相濟、

日登 城無之、

十月晦日

但御用番代雅楽頭・平岡丹波守勤之、

殿中無別条

一美濃守今日も登 城無之、

一美濃守今日も登 城無之、

御役 御免

奈良奉行(景恭)
山岡備後守

十一月御用番

勤仕並寄合

佐渡奉行(時万)
中村石見守

出勤迄水野(忠精)和泉守

名代鈴木大之進(重嶽)

本多美濃守(忠臣)

右於芙蓉間、雅楽頭・老中列座、和泉守申渡之、

外国

同 人

金三枚

山岡備後守

平岡丹波守(重臣)

時服三

御勝手

酒井飛驒守(忠職)

奈良奉行勤役中骨折候ニ付、被下之、

外国

同 人

右於同席、列座同前、同人申渡之、

土屋采女正(貞臣)

一美濃守今日も登 城無之、

平賀駿河守(勝足)

昨廿九日之内

根岸肥前守(衛憲)

田沼玄蕃頭

御勝手

小栗上野介(忠順)

近々京都江為御用、可被差遣候、

公事方

小笠原志摩守(政民)

外国方

菊地伊子守(菊池隆吉)

和田伝(推明)右衛門

大久保筑後守(忠恒)

十一月朔日

金三枚

家督之御礼(氏共)

戸田助三郎

巻物十

御馬一疋

同

永井伝八郎(直幹)

巻物式

右於御白書院縁頬、替席謁雅楽頭・老中、

参上

日光奉行

小倉但馬守(正善)

右於芙蓉間、謁同前、

長崎奉行支配

組頭勤方

加藤金四郎

時服式

長崎表江引越候ニ付御暇被下、拜領物被 仰付之、

新瀉奉行支配

組頭 初而 松長長三郎

時服式

新瀉表江引越候ニ付御暇被下、拜領物被 仰付之、

右於躑躅間、和泉守申渡之、

参上 箱館奉行支配

調役

山崎衡三郎

右於同席、謁同人、

参上

観世太夫

扇子

右於焼火間、替席謁同人、

一美濃守今日も登 城無之、

〔本文書ハ「鹿児島史料 忠義公史料」第二卷第一六七号

文書ト同文ナリ〕

原寸ノ異ナル文書一七枚カラナル冊子

三〇 須具祢船申請ニ付船頭ヨリノ届書

文書原寸 縦一四・二糎 横五七・五糎

一 錢六百八拾五貫文

但須具祢船老艘

右都城屋敷江申請相成候、

一 銀老貫六百六拾六匁九分老里三毛

但須具祢船老艘

右種子島屋敷江申請相成候、

一 銀五貫三百五拾三匁四分

但須具祢船式艘

右林太助江代銀上納申請被仰付候、

一 須具祢船老艘

右坂元為次郎江支配被仰付候内ニ破船仕候、

右は於磯御造立相成候須具祢船五艘、諸人申請被仰付、

代銀何程ニ而申請被仰付候哉、可申出旨被仰渡、右之

通御座候間、此段申上候、以上、

諸船頭

戌十一月四日

三〇 久光公ヨリ尹宮へノ書翰

(彌原朱書)
「戌十一月五日」

御直書老通

宮様江被進候分相控置、口上を以委細申上候間、返上仕

候間、御差上被為下度、尤右之通取計候様

御意ニ御座候間、此段宜敷様奉願候、以上、

十一月五日

藤井良節

中左衛門殿

一 藏 殿

(本文書ハ「忠義公史料」第二卷第一七二号文書ト同文)

文書原寸 縦一五・八糎 横三八・五糎

三一 本田弥右衛門ヨリ中山大久保へ 計弔通

京都及関東ノ事情並朝廷へ献米ノ件

(包紙ウツ書)

「中山中左衛門殿

京都

大久保一藏殿

本田弥右衛門

〔壬戌十一月五日〕

三六一ノ一

御内用向当時世要用之事共取交へ、左ニ申上候、

御滞京中

陽明家御流儀之御立烏帽子御頼御誂相成居、今般出来、

井上弥八郎江宰領被仰付差下候間、御請取可然御取計可

被給候、御紐茂付置之假差上候、外ニ御冠下地御本結三

筋相添候、右は万事進藤式部權少輔并今大路伊予介世話

ニ而、此前御直垂其外も同断ニ付、御兩人江は御挨拶見

計を以差贈可申事、

一一昨二日藤井良節着京、御国元之事体大略承達致安心

候、乍然同人儀家事混雜中出足ニ而、纔ニ兩日位之御用

談之由故、猶細詳之処今一段不伺得様ニも有之、乍然要

用之大主趣拝承仕候間、則 陽明殿并 粟田江茂參

殿、精々 御趣意之処拝願仕儀ニ御座候、今日迄は何分

承知も不仕候、速ニ 御内沙汰承知次第可申上候、御国

元之次第篤と拝承仕候得は、実以海防御用意

太守公御出府旁遂一不容易、無御抛御訳柄ニ而何共被遊

御配慮御事情ハ深く奉恐察候、当地ニ罷居、乍恐

朝議をさへ窃ニ奉窺候得は、

叡慮深く

二之丸公を被遊

御依頼候

宸衷之程、誠ニ言語筆墨之及ふ処ニ非ず、当分天下之牧

伯

朝廷ニ心を寄ル人不少、列藩江追々 御沙汰茂被 仰出、

且長・土二州ハ既数月

御膝下ニ君臣服事之事ニハ、飽迄乍被

知食、此般一橋上京

大樹上洛も近寄、彼是

御煩勞之 御内情為被為在御事より、只々昨今御帰国之

次第も御構なく、急ニ被為 召候

叡念、奉推測ニ唯泣血之外無之事ニ候、右ニ付は是非共御直書被仰上候通願達仕度、猶関東之都合ハ如何様ニ茂下よりも手を付、力を尽可申候、岩下・吉井・高崎之三人江茂細々申含可遣考ニ御座候、右ニ付、此涯三人儀は、暫関東江不被召置候而は周旋之術無之、万端国事ニ付、御趣意を汲知候者ならてハ、参り兼候間、左様御承知宜御取計可被給候、猶別紙江可申越ニ而候、

一京地当分別而静謐、去月十二日三条殿・姉小路殿関東御下向、同廿七御着之賦一日延引廿八日と承候其後無為ニ候、未御

着後之一左右も不承得、是以前条三人より情実京師江申上ル筈ニ而候、去ル十七日鎌田市兵衛外ニ老人

勅書奉護ニ而差下候砌申上候哉、其時分就中紛冗ニ而不取覚、重復可致哉ニ候得共、因州侯江謁見之次第申上候、

去月十四日伏見へ同侯着、夫より上京と申事ニ而

陽明公ニ茂是迄之時勢ニ為何事も御承知無之方ニ而、其趣意御分り兼、御疑念も有之候間、御内使と申処ニ而下伏、謁見候様被仰付、前夕より罷下、十四日ニ其段申入

候処、因州藩中ハ一人も知己無之、君側之人江逢候而、

謁見を願候趣意申入候処、昼過より待せられ、暮前漸御

前へ罷通様承、相模守様御肩衣袴ニ而敵然御待、左右八

九人侍座、陽明家之内使ニ而、薩藩某と云フ大に疑議せし事ニ而、側

対面願之儀、相州御困り之事共ニ而ハ無之哉と、極内々尋候との事ニ而、

此人之量是ニ而知へし、一笑ニ不堪候得共、少も左様之事ニ無之旨程能

申置候、後日安達清一郎と申因藩之有志語りて、以後対面之時ハ人私ニ

而応接被致候様可取計ト申事ニ候、此者外ニ堀正次郎ト申者一人、其外

人ト見得申候、因州藩中更ニ無近く進候様御沙汰ニ付、膝下へ参り、此節

御上京之御内意被仰上、滞京を御願又直様関東へ下向

之

勅詔被仰蒙度段、二条殿を御頼被仰上候ハ、何等之子細

ニ而有之哉、抑明府ハ水戸老侯之御子、一橋卿之御兄弟

ニ而候得は、勤王之御忠志ニは相違有間敷、御趣意ニ依

り而は

殿下御直ニ御尋問被為在度 思召候間、先私を被遣之概

略申述候処、外ニ別之風なく、此節 勅使御下向と伝承

候間、越前々中将殿ニハ兼而不外御懇意之事、雑談ニ而

も御申合程ニ而、土州容堂殿ニ茂御知己之事、一橋卿ハ

案内之通兄弟之事故ニ、一・越両家江屹と

叡意ハ此通りと賜迄浸通候様申入度、此一念迄ニ而候、尤尊

王攘夷ハ平素之微意、片時も此外ニなく候、就ハ命を不蒙而ハ不相濟故、上京滞京を願、即今之

宸意を伺奉り、又東下ニ而、右之趣意周旋候様蒙度、夫ニ付、いそぎ東下を願候と申大意ニ而、畢竟

三郎様格外之御尽力之故、正義如是相開け、千載之一時と存候との趣意共、深切ニ御議論有之、唯々聞しより程も不付正義之御方ニ而、忠義之外他意なく奉伺候間、段々申試、則夜帰京、

殿下へ云々之次第申上候処、殊之外御歎ニ而、二条家より其後御内意も有之、同十九日因州侯御參

殿、陽公兩御所御対顔、ゆる／＼御話、其日別席ニ而拜謁と申事申置候処、御小書院ニ而安達一人侍座、

勅使被差立候事ニ付、段々之趣意

二之丸公御趣意ニ基キ、議論申述候処、遵奉之所深々御

尽力と申事ニ而、次ニ一橋卿之事忌諱ニ触可申候得共、

全体正論確乎被為在候事ながら、有志之者一人も御付添不申上、下情聞へ上候道無之、夫故水府之次第、当分小

人等滿朝弥蔓いたし、老侯御依頼之輩、幽蟄之事等、其外動すれハ幕論を御主張之気味有之、条々不残申演候処、

甚御感悦ニ而、御着府直様言路壅弊を開キ、弥遵奉之大道拡充之外無之様共、細々討論可致、付は急キ東行候得

は、此上之処処置如何可有之哉、万事無腹藏申出候様、初謁見之時より其時も呉々被仰候間、御腹心之者兩三輩、京地之事情世態ニ通候有志之人、当地江御残被置候ハ、形勢速ニ関東へ可申上候、岩下始三人罷居候間、親敷御目通被仰付度趣共申上候処、至極御同意ニ而、安達之外

三人位残置候間、何事も只薩州家ニ而ハ御間柄之事故、猶更無遠慮熟談いたし呉候様云々被仰付

王事ニ付は何々迄も御談合可申上旨、御約束申上置候、右之次第ニ而一日も早く東下致候様、殿下を始

青門公、堂上方同論ニ而、同廿一日出立東下ニ而候、乍不成合觀

據申上ル心持ニ而、種々御論も申上候得共、事長候間略之、高崎猪太郎事折柄上京仕居、大原卿江參上、其日因州侯江も謁見、大原卿御取持之由、猪太郎上京之趣意ハ下条ニ申上候、

一筑前侯御上京有之、去月廿日大徳寺之御旅館江被召候旨、彼方京都御留守居より申来罷出候処、御人弘ニ而則御前近く被召、何分當時世之事、且

二之丸公御上洛御帰国等之事、概略道路之説も御聞取為有之迄ニ而、詳ニ御聞被遊度、御丁寧御沙汰を蒙候間、当春末より浪華江被遊 御着候処、浪士共 御駕を待奉要訴之始末より伏水一件且

勅旨御拝戴、御東下御尽力之事体、御帰京御下国迄之顛末不殘申上候処、御話御聞被遊内、頻ニ御歎賞、始而詳悉を被聞召、実ニ被遊御感服候、頓と御安心、更ニ御一言も御間紛無之、其方等不容易

天朝之御為ニ紛骨致候と大ニ拙者を御賞美被遊事ニ而、申出候而恥入、私共ニおひてハ分寸之事も無之旨、恐入

而奉申上候処、

陽明へ御參 殿被遊度思召候御趣意共御頼ニ付、夫々取計申上候、同廿二日御參 殿之処、是も

勅使御下向中一盃御尽力被遊度御内意細々被仰上、廿四日方ニも候哉、御東下ニ而候、老練之氣風被為在、当分御病後酒を御禁被遊候由、 陽公江被対、不肖之身を不被輕、国家之重事被仰聞候儀、冥加之至、真実

朝廷之御為を関東ニ而周旋被遊度旨、御受之上暫之程ハ御落涙ニ而御声も濁候由、殿下ニも御言葉も不被為出被聞召候より、殊勝之人ニ而候旨、

御沙汰ニ而候、扱も難有事ニ而、美濃守様之処概略如右也、然るニ藩中之輩大俗吏計ニ而、去月十七日家老之浦上信濃、立花山城元陣正と云、月形党を幽弊せし大奸匹夫也 兩人、村山齊助を以

參り呉候様承候間、後來 濃州侯江謁見之手寄ニも存、一夕話ニ及候処、ゆるく候弁のミニ而取ニ不足、都而君候を度外ニ置而、時世坏之論ニ而も申上候体ニも無之、歎息ニ不堪候、其折も留守居始君側之要路立花采女と申者杯

来会候得共、口給を以人を欺小人ニ而候、濃州侯江兼而申上、重大事件ニ而も申談候者姓名被仰聞被下度申上置候処、不容易事柄共ゆへ、篤と致勘考返答致スニ付ハ猶頼ムと被仰候、既ニ御立之日被召候付、大徳寺へ参り候処、最早御供揃ニ付、御家老兩人出会、御直達之筋候を以、久野一角と申御側役格之人江引合可申、江戸江御候之者候間、書面を以万事掛合呉候様承知仕候、村山杯江承候処、立花江平日媚諂候者之由、例之候大夫等君聴を申拵たると覚、弥無人たるを知申候、

一高崎猪太郎上京之主意、全体京師関東之情実不貫、勅使御東下攘夷説ハ紛々江戸中様々流言も有之、第一一橋・越前之事を離間致候間、群小其虚を窺様子、容堂侯航海説と申所、一橋ハ越前と不合拵、色々種々ニ付、容堂侯へ謁見致候処、実以正義無二人之人ニ而、一・越之間を調和する事、此御方ならてハ無之、岩下始決議いたし、容堂侯関東江留めし事を極内京師へ申上、其為人又此節別段遵奉之志ニ固く、決心之次第等申上候賦、其余

関東之情実、越老侯も御対面ニ而、御直話被下との事ニ而被為召候処、其日御退城、返々出足前日ニ而、御心事ハ中根鞞負江聞取呉候様被仰、其次第も言上候為旁急疾馳登候処、容堂侯ニハ

勅使御下向ニ付被召留候、関東ニ而周旋候様、十月十一日ニ被

仰出候故暗ニ符合、彼是能キ都合ニ而、関東ニ而三士周旋之次第、書面も御座候得共見出不申候間、追便差下可申、一・越等容堂侯始として遵奉之心底、現実被聞食

殿下茂 青門様等頗被遊御安堵候次第ニ御座候、右は要樞之事件迄申上候、鎖細日々

朝議之御模様杯追々可申上、関白御辞職ハ大概御内定候得共、跡御職之事一定不被為在、猶後便可申上候、急速相認前後混淆仕候得共、御斟酌ニ而被達
尊聴候儀、宜御取計可被給候、以上、

京都 (親筆)
本田弥右衛門
中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一五・五種 包紙原寸 縦二七種

横 六一五種 横三九種

三六一ノ二

禁裡江御献上米一万石、去ル十月廿八日皆納相成、右掛役人虫鹿織部正・土山淡路守より請取書被差出候、仍而議 奏方伝 奏方江御礼廻勤迄茂相濟申候、右御届申上越候、以上、

十一月五日

京都

本田弥右衛門

御国元

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一六種 横三七・三種

三三 藤井良節ヨリ中山大久保へ

勅使東行并近衛閑白辞職ノ件

只今陽明殿罷出

御両殿様拜謁被仰付、此節之

勅使、從御道中一橋・越前御引入ニ相成候由、風聞有之、御案被成候旨被仰越、甚御案痛被遊候旨仰ニ御座候、初発より其辺之事迄、乍不及

御主意を受継、存意十分申上候義ニ御座候処、最早左様之風説も御座候哉、極而虚説ニ可有御座とは申上置候得共、実ニ苦心仕申候、尚追々可申上候、

一 御辞職之義、去月二日被

仰上候処、今日参

殿拜謁中、別紙從

禁中御到来有之、即拜見被仰付、左候而御写御下ケ相成、辛便故御吹聴申上候様仰ニ御座候故、写差上申候、宜敷御披露可被為下候、

勅使江御渡之御書付も一緒ニ御渡しニ相成、同敷写指

上申候、御辞職は当月十九日、

新嘗会後、又々御差上可被成 思召ニ被為在候旨、御

沙汰ニ御座候、

右早々申上候

十一月五日夕

藤井良節

中左衛門殿

一 藏 殿

文書原寸 縦一六糎 横八六・五糎

三三 藤井良節ヨリ中山大久保へ

茂久公參觀猶予、久光公守護職ノ件

(端裏付箋)
「藤井良節氏書」

十一月三日己之刻参

殿仕候処、中山様・正三様御用談中ニ而、無程於御居

間御一同拜謁被仰付、御銘々御書指上申候処、何れも

御開封相成、御満足被為在安堵仕申候、第一 太守様

御参府御猶予之御沙汰、何卒相運候様之御尽力、偏ニ

奉嘆願候旨申上候処、御受合別而よろしく、素より関

東より

御参府御催促と申も、畢竟従

朝廷御沙汰之末之義ニ付、早速御評義ニ可相成旨、仰

ニ御座候間、此義無程御決議ニ相成可申奉存候、尚只

今召状到来仕候間、御催促申上候考ニ御座候、不日否

御左右可申上候、

一 御守護職御一条之事、御談被申上置候主意を以、存意

十分申上候処、是以御受至極宜敷、素より真之

叡念ニ被為在候得は、断然と被

仰出候而已之御事故、乍恐御勇決奉謝候事ニ御座候、

右ニ付道中すからは非やり付候手段、彼是勘考仕申候

ニ、是迄之事何事ニよらず、 御家督ニ而不為在と申

事、関東之言ぐさニ御座候間、此節之御沙汰ニは、御

家督ニも不為在候得は、於

朝廷却而御氣安被

思召候ニ付、断然守護職被

命候と申御主意ニ而被 仰出候へ、いかゞ可有之哉

と存付申候故、此段愚存無伏藏申上試候処、

各様御一同至極御尤ニ被思召候間、急速ニ御評決相成

候様被遊度旨御沙汰ニ御座候、同日栗田江も罷出拜謁

仕候而 御書差上 御口上委細申上候処、御同様御満

足被 思召、且又前件守護職之義申上候処、

宮ニは別段御悦之御様子にて、至極至当之存意候間、

片時も早く御評義之上

奏聞ニ相成候様被遊度旨被

仰候間、御安堵被為下度、精々油断不仕周旋尽力可仕、

不日御吉左右可申上候、扱 宮御事于今御不例不宣、

近比ひたと御床ニ被為入、御療医等も軽く不申上由、

深く御案痛申上候、就而は何か思召よりも被為在候ハ、

、御精力相増候御丸薬類被進候而はいかゞ御座候哉、

夜前も山田勘解由来訪、甚心配之噂仕居申候、即御医

師之頼にて、鯉之煎汁僉議いたし差上候様との事ニ而、

今朝より御屋敷内尋方仕候次第ニ御座候、当時柄大切

之 御身上、御変事共被為在候而は、夫限之事故、深

重苦心仕申候、

上江茂被仰上、御伺被為下度奉存候、

桂之宮御相統被為在

御還俗之義も頻ニ御催促申上候考ニ御座候、扱小松家

近日上 京相成申候ハ、關東之事情茂委細相分り可

申候間、

御参府御猶予且御守護職之御一条、精々周旋可仕候、

左様思召可被為下候、尚御都合且御存付之義も被為在

候ハ、早々被仰越被下度奉願候、御問合之御答は、

夫々御留居より可被申上候間、別段不申上候、

十一月五日

藤井良節

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一六糎 横二〇・七糎

三六 藤井良節ヨリ中山大久保へ

二通

京都ノ形勢ヲ報ス

神社遙拝所建設ノ議

(包紙ウツ書) 「中山大久保へ送ル」

藤井良節

三六四ノ一

此節被 仰出候神社修造之御事ニ付、旧米勘考仕居候次第、乍恐左ニ申上候、於

皇国は祭政一致之御所置、格別之儀ニ御座候間、他国ニ無比類神代之三陵御修造は勿論之儀ニ御座候得は、春秋二季御祭典 御遙拜被為遊候、御拜殿一字御造立被遊度奉存候事、

一 御領三ヶ国之内、式内之神社丈ヶ、前件同様 御遙拜所御取建被遊度候事、

但朝廷年々被為行候祈年祭・新嘗祭二季之御祭典ニ被準、新穀御備等之儀、被為 在度奉存候事、

一 御元祖様ヨリ

順聖公迄 御代々之

尊靈江被為送神位

御靈社御合祭之一字御造立被遊、是又春秋二季之御祭

皇国固有之靈祭被為

在候ハ、無此上 御孝道、一統難有可奉存候、何卒旧来之微志御汲取被下候様 拜地伏奉願候、尤御造立御取掛ニ相成候ハ、御場所其外之儀共、勘考之筋御座候間、乍恐尚又申上候様、被 仰付度奉存候事、右之件々御勘考之上、御同意被為下候ハ、何卒被 仰合宜敷奉願候、

十一月五日

藤井良節

中左衛門様

一 藏 様

文書原寸 縦一六種 横八四・三種

三六四ノ二

一 筆啓上仕候、寒氣罷成候処、

御両殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦至極奉存候、次ニ各様御揃被成御連務恐慶奉存候、私事去ル二日無滯上

京仕安心仕申候、早速より 御用相勤申候次第、別封
申上候間、何も宜敷奉願候、扱出立之砌ハ

私式不容易

御役服内々拝領被仰付、冥加至極難有仕合奉存候、御
吹聴且御礼等之儀も不馴之私、不行届千万奉恐入候、
何卒御仁免御海恕被為下候而、不都合之義共無之候様、
偏ニ奉願候、兼而不容易御内用茂被仰付、相勤申候御
事故、外見之義も有之候得は

御威光を頂キ相勤申度内願も御座候処、誠ニ以難有次
第、深重御礼申上候、殊更御金子頂戴被仰付、重畳冥
加奉存御礼申上候、尚此末弥抽丹誠尽力周旋仕可申奉
存候、御当地先平穩ニ御座候得共、都下無頼之輩、機
会ニ乘し殺害之義とも間々不相止由、甚心配仕、早速
より

殿下奉始申上候義有之、三藩ニも熟談之上、從
伝奏、^(所)諸司代・町奉行へも被仰渡候筋ニ相成申候、其
外大原殿事、議奏加勢と申事被 仰出候由にて、国事

關係有之候処、此節

殿下御跡職之義ニ付、一条家・二条家間と申事ヲ被申
立、右ニ付而

宮甚御不承知之事有之、一日栗田へ被召、御議論之末
彼之七姦奸邪ニ無之旨、被申立候事共有之、益御憤甚
敷、終加勢被免候時宜ニ相及申候、此老人手ニ合不申
候、其外色々と承申候へ共不申上候、右御跡職、一条
は終ニ鷹司家へ腹^(復カ)し申候由ニ御座候、伝奏はいよく
野々宮宰相殿へ相成模様之由ニ御座候、

一勅使ニは、正使三条中納言殿、副使姉小路少将殿、付
添土佐守様にて、十月十二日御発駕相成候よしニ御座
候、兩家とも土州より付添有之候由、最早江戸御着相
成候筈ニ御座候へ共、いまた御左右承知不仕、此節之
勅使誠ニ心配不少、何卒御失策無之様、只々奉祈之外
無御座候、一橋上京は極而正月ニも相成可申哉、且は
上洛ニ差かゝり、上 京ニ相成可申哉と勸考仕申候次
第ハ、先日高崎猪太郎上、京之咄ニ而、相考申候事ニ

御座候、同人上 京之始終へ、御留守居より委細可申上候、尚模様相分次第、早々申上候様可仕候、先ハ右御左右申上度、取束如是御座候、猶奉期後音候、恐惶謹言、

藤井良節

十一月五日

中山中左衛門様

大久保一蔵様

參人々御中

三

二白夷弟弥八郎事、御蔭を以今日出立仕申候、深重御礼申上候、同人義、誠ニ御用ニも立兼可申候得共、御憐察被成下、何卒被仰談被為下候而、御心添被仰付被為下候様、伏而奉願候、已上、

文書原寸 縦

一六糎

包紙原寸

縦二七・五糎

横二二・五糎

横 四〇糎

三三 中川修理大夫ヨリ朝廷へノ謝罪状 合二通

小河弥右衛門等一列幽閉ノ件ニ付

三六五ノ一

(朱)
「壬戌」

当春私家来小河弥右衛門と申者、同志之者引纏、京撰之間江罷出居、去ル九月帰邑仕候、其節薩州島津三郎を以右弥右衛門始家来共、尊王之志

御感被下置、且私国政行届候段茂奉蒙

御賞詞、冥加至極難有仕合奉存候、猶又先月廿日家来之者、正親町三条大納言殿江被

召出

御内勅御書付御渡被成下、於兵庫頂戴仕重疊難有仕合奉存候、此節上京、右御礼奉申上候心得ニ御座候処、同廿九日大坂滞在中、薩長土三藩を以、右弥右衛門儀、

天意御感之

御移付而は、私儀も奉蒙

御賞詞候儀は不容易御事柄、仮令国法ニ於て故障之儀御

座候共、奉対

天朝赦罪可仕筈、猶難捨置儀も御座候は、一応奉伺候上、

兎茂角茂可申付処其儀無之、一己ニ咎申付候段、畢竟

天朝を奉軽蔑候所行、不束至極ニ被

思召上候段、

青蓮院宮様

関白様御移之趣奉敬承、誠ニ以恐縮之至、吐口之申上分

ケ無御座奉恐入候、右ニ付不取敢、右弥右衛門始咎筋差

免候様、在所表江下知仕置候儀ニ御座候、然ニ私儀奉対

朝廷、不臣之心底ハ毛頭無御座、乍小藩相応之御用度相

勤度、兼々心掛罷在候処、此節之不束、実々

御移之程深奉恐縮候、何卒广大之

御仁恵を以、此度之罪条格別ニ奉蒙

御寛免候は、重畳難有仕合奉存候、此段偏ニ宜敷御執成

之程奉願候、以上、

月 日

(豊後岡藩主中川久昭)
中川修理大夫

文書原寸 縦一八種 横二八六・七種

三六五ノ二

(卷)
「壬戌年中川一件」

岡藩小河弥右衛門列幽閉せられ候一条、首め白石正一郎より村山斉助へ、長州よりハ土屋弥之助・佐々木男也へ右相聞得候始末、委細申遣シ候所より、斉助・男也兩人致談合、中川侯通伏之砌、幽閉被申付候訳問ツメ候舎之処、男也 宮様へ罷出申上候所、殿敷御憤激被遊、中川之仕方ハ言語同断之至、

朝威之立ト不立之境、一大事之訳ゆへ、即日三藩より人数ヲ差出シ、万一も押而罷上り候ハ、生首ヲ切テ御目ニ可懸旨御沙汰有之、男也・斉助・本田弥右衛門打寄談合之上、人数文ケハ先内分伏見迄差出シ、十月廿九日大坂迄ハ村山斉助・鶴木孫兵衛、長州よりハ桂小五郎・佐々木男也へ、土州より乾作七・手島八助、右六人同道ニ而、中川屋敷へ出懸、修理大夫殿へ面会及談論候処、は

シメハ様々ト被申立候所、御家之御浮沈ニもかかゝる程之事、いつれ 朝憲ヲ軽んせられ候訳ニ相当ると申入候所より、後ニハ一向ニ誤入、自身直ニ罷上り御断申候ハ、いかゞ、何分貴公方可然致勤考呉との儀、頻ニ被相頼、一先引取、留主居熊田万八所ニ而番頭熊田陽介、用人小原隼太・草刈敬輔、其外役人中へ出会、翌日陽介・万八・隼太三人致上京、議奏衆へ罷出御断申上、六日夕致帰坂七日中川侯自筆之誤書を以、又々熊田等致上京、修理大夫殿ハ明日上伏、御下知被相待候手続ニ相成候事、
文書原寸 縦二八・三種 横四一種

三六 青蓮院宮ヨリ薩藩へ御渡ノ書付

後醍醐天皇御陵鳴動ニ付

(端裏朱書)
「壬戌十一月十日」

(異筆)
「粟田宮様より御渡ニ相成候書付之写」

口上書

一当山塔之尾山如意輪寺境内ニ有之

後醍醐天皇御陵、先月十八日朝五ツ時比より翌十九日
晚七時頃迄、存外鳴動仕、則 御陵前ニ有之石鳥居形
戸開キ并左右瑞籬拾本、石花立式本打倒レ相損候趣
御陵守護人共より届出候付、早速右十九日見改ニ罷越
候処、前書之通相損シ罷在候、尤此外
御陵何事も相変候儀無御座候、勿論是迄折々鳴動仕候
儀有之候得共、右体此度稀成鳴動ニ而、如此相損候付、
此段御届奉申上候、已上、

文久二年戊
十一月十日

日光宮御支配所
吉野山金峯山寺
学頭代

蓮花院

病氣

持福院 印

奉行所宛

文書原寸 縦一六種 横六四・五種

三七 一橋中納言等ヨリ坊城大納言へ

近衛忠熙卿ヨリ島津久光茂久両公へ

斎彬公贈官位ノ件

三六七ノ一

松平故薩摩守儀、存生中

.....

以格別之

叡慮、贈權中納言從三位可被 宜下、被

思食候趣、早々取計候様、

関白殿被命候旨致承知候、

修理大夫出府未無之候間、同人名代之者江、今十二日

御沙汰之通被仰出候、此段

関白殿江御申入可有之候、以上、

十一月十二日

井上河内守 (正直 浜松藩主)

板倉周防守 (勝静 松山藩主)

水野和泉守 (忠精 山形藩主)

松平豊前守 (信義 龜山藩主)

松平春嶽 (慶水)

一橋中納言 (慶喜)

坊城大納言殿 (俊亮)

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一七六ノ

二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・五糎 横五五・五糎

三六七ノ二

「三郎 殿 (包紙ウツ書)

修理大夫殿

忠熙

〔朱〕 戊十月十九日

御贈官一条

〔朱〕 緘

「三郎 殿 (封紙ウツ書)

修理大夫殿

忠熙

緘

尚々寒氣御用心く、三郎殿御上京御待申入候也、

寒氣増長候、弥御揃御勇猛之御事珍重候、抑故薩摩守殿

贈中納言從三位之儀、関東へ

御沙汰之通返答在之候、先々安心く致候、

御沙汰之通御成就、珍重々々不斜候、早々御知セ申入度、

荒々是のミ申入候、甚繁務取紛、大儀文可免給候也、

写入覽候也、

十一月十九日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第一七六ノ
一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・五種

包紙原寸 縦三一・五種

横 六〇種

横四三・二種

三六 久光公京都守護職任命ニ付將軍へノ御沙

汰書

二通

其他合計五通

此節夷船摂海江闌入

帝都を窺候風聞有之

叡慮不安被 思召候ニ付而は、各藩右防禦之策献之候様

被 仰出候処、於弊藩は土佐守未々從関東上京不仕候付、

国論之献策は不相調候得共、何時外寇之禍難凶候ニ付、

当地詰合之私共愚考仕候処は、八幡山崎辺守禦之要地ニ

付、此之処江人数差置候へ、必定喰留可申奉存上候、

然ニ京都之御警衛、暫御免ニ而無人ニ付、摂州陣家ニ罷

在候人数半分過、京師へ引付置、山崎ニ交番仕、押出候

時宜ニより摂州陣家ニ残し置候人数を以、不意之儀若起

り候時、神速ニ挾撃候へ、得必勝可奉安 叡慮と奉存

候、尤予メ其心得を以、山崎表へ屯所被調置候、且近日

土佐守上京之節は、猶又至当之策略可有御座候得共、因

循難相成時節ニ付、当時之処へ、右之通可被仰付候哉、

奉伺候、以上、

十二月十三日

横山寛馬

小原与一郎

手島八助

奉

謹白

右十二月十三日手島八助持参

中山殿江差出候写之旨也

十一月十二日自武伝被達

松平肥後守義、京都守護職被申付御警衛筋も行届、

御満足被 思召候、然処、一藩奉職ニ而ハ人心居合茂如

何可有之哉、御懸念被

思召候、依之島津三郎儀、今般公武御一和之基本ヲ致周

旋、為 皇国大ニ忠誠候者ニ而、此末公武之御為、別而

可然被 思召、且同人義家督ニ茂無之候得共、京都專

守護茂一々可相調候義と被 思召候ニ付、右旁別段之

叡慮を以、断然守護職被 仰出度、於大樹家も猶又、

叡慮貫徹候様、肥後守申談相勤候様被申度度、

御沙汰候事、

別紙之通被 仰出候ニ付而は、島津三郎儀早々上京可

被 仰下候間、父子一時発途ニ相成候而は難渋ニ茂可

有之故、修理大夫出府之義、暫猶予有之候様被 遊度

思召候事、

十一月

別紙兩通之趣被 仰出、島津三郎江茂申達候旨、宜申

進、関白殿被 為申候、仍申入候事、

十一月

野宮

徳川刑部卿已下連名

十一月十二日自伝奏陽明江被申入添書

別紙兩通之趣被 仰出、関東江茂申達候間、島津三郎

早々可有 上京様、薩州江被 仰出候事、

十一月十二日

十三日芸州江相達

攘夷之儀以 勅使被 仰遣候ニ付、速遵奉之儀とは 思

食候得共、安芸守義ニ茂早々出府周旋可有之 思食候事、

十一月

右一紙

為 帝都御守衛可然家頼人数等可残置被 仰下候事、

十一月

右一紙

十一月十四日殿下より御達

島津淡路守(忠寛)

先達 勅使左衛門督并島津三郎下向之節、段々心配周旋有之、御都合茂相成候趣、達

叡聞、不淺 御満足被 思召候段宜申達、内々 御沙汰候事、

十一月

右一紙

十一月十六日殿下両役等出頭差出

向寒之節弥御勇健被成御座、珍重奉存候、私儀今度不束之儀御座候処、格別之以 御憐有奉蒙 御寛免、難有仕合奉存候、右御礼参上仕候、

十一月十六日 中川修理大夫(久昭)

右一紙

同日同上

先達而家来之儀ニ付奉蒙 御賞詞、猶又其後

御内勅之御書付頂戴仕、冥加至極難有仕合奉存候、右御礼参上仕候、

同日同上

同月同日自殿下武伝江御渡

松平肥後守

公武御間柄之儀ニ付、段々尽力 御満足ニ

思召候、殊ニ当地御守衛も相勤候事、旁 御安心被為在候処、方今人心兎角異儀相生易く、親藩計一家奉職ニ而は、於外藩向人心難居合候ニ付、此度島津三郎儀 公武御一和之基本ヲ致周旋、為 皇国忠誠候者ニ而、此末公武御為可然被 思食、拔擢守護被 仰付候ニ付、万事申合警衛可有之候事、

右一紙

十一月廿二日

今度攘夷之 勅被 仰出ニ就而は、国家安危之係る処、

不容易事ニ付、就中对州之処は海路隔絶孤立之小島、自古賊衝之要路ニ而、国政脩整士氣振起不致候而は、別而御不安心ニ被 思召候間、其国政士氣之模様ニ而、攘夷之儀被 仰出度候、長州儀は隣国之儀、且は親威之続キも有之趣ニ候間、宗家国政之得失士氣之振合、巨細取調遂一被 聞食度候事、

同日自武伝被渡

松平美濃守

其藩国事ニ係り幽閉禁錮之者、多分有之趣ニ候、然ニ元来赤心報国発起候事故ニ早々赦免可有之事、

有馬中務大輔

同上同文言

私儀今般出格之 御憐宥を以 御寛免被下置、猶又方今御国家之安危此節ニ候間、精忠尽力仕候様奉蒙 朝命、

冥加至極難有仕合奉存候、然ル上は、何卒此假滞京仕、

微力相応之御用度相勤度奉存候、然処、私儀此節関東より御用之御沙汰ニ付、此表御用之筋茂無御座候は、関東江罷下等ニ可有御座候得共、前段申上候通、格別之御有免ヲ蒙候而已、存分從此上精忠尽力之儀、奉蒙

朝命、骨髓徹し幾重ニ茂難有仕合奉存候、就而は私関東江罷在遠路相隔候而は、何分赤心難相届候ニ付、此假滞在尽力仕度奉存候、尤私心底此度関東江以使者相願候儀ニ御座候間、此段偏宜御執成之程奉願候、以上、

十一月十九日

中川修理大夫

十一月廿三日自殿下武伝江被渡

攘夷被

仰出候ニ付而は、当地滞在被 仰出置候得共、自国之備海岸之手当も可有之、久々在国も無之ニ付而は、万事国内取締相調、猶又過日被

仰下候幽囚之輩、早々赦免、自余正儀一致可尽忠誠 思

食候間、帰国御暇可被下段、被

仰出候事、

十一月

右有馬江

攘夷之儀被

仰出御一定之上は、御実備不被具候而は難相成儀、追々御手当も有之候ニ付、於松平淡路守も兼々京都御警衛被仰付置候儀、尚又於阿州は、近海渡口之要所ニも有之候間、其辺守衛も被

聞召度、旁此比早々上京可有之、

御沙汰候事、

十一月

右淡路守江

十一月廿三日殿下御披露

此度以、勅使攘夷之儀関東江被、仰出候ニ付而は、蛮夷

江漏聞難計候ニ付、私儀は兼而御警衛茂蒙、仰候儀故、

今般上京予防禦之心得方等も被、聞食度旨、被、仰出難

有奉畏候、右之儀は兼而乍不束、当五月関東江建白仕候

通見込ニ御座候得共、某余申上候愚考も無之候得共、其

節も申上候通、夷賊共を悪候儀、上従

朝廷、下至士庶人一体同心之事ニ候得共、其同心を以夷

賊共ニ迎候時は、開闢以来万国ニ傑出仕候、神州何之難

守欵可有御座候哉、乍去人心携式、各疑惑を抱候様相成

候而は、蕭牆之禍可怕之至と奉存候間、呉々茂大樹遵奉

朝廷有之、右を以、公武御合体、海内一致ニ相成候様之

御政合願敷奉存候、就而は如、御下問、自然攘夷之儀夷

賊共ニ漏聞候時は、御警衛筋は、其節之臨機応変ニは候

へ共

皇都之儀は、伊賀・山城・大和之人教夫々手当申付有之

候事ニ候得は、万一

皇都近地江夷賊共寄来候節は、接近之地ニ付、速ニ警衛

人数差出候様、手当仕置候事ニ御座候、伊勢、両宮之儀

は領分近辺之儀、殊ニ海岸之事故、何時乘入申間敷もの
ニ茂無之候間、既ニ先達而も大炮献備仕置、猶此上精誠
差凶仕、防禦筋敵重ニ相整候様可仕心得ニ御座候、乍去
右全大意之儀ニ而、委曲は何分難尽筆紙候間、拝顔之節
ニ可申上候、以上、

十一月
(高野)
藤堂和泉守

十一月廿四日自武伝被達松平閑叟

今般 勅使攘夷之事、被 仰出候ニ付而は、諸蛮江漏聞
難計、帝都非常之御備無之候而は、御不安心之儀ニ付、
御備之儀、同閑東江被 仰出候、右等之御時節、幸通行
ニ付、暫滞在有之様被遊度 思食候事、

十一月

十一月廿六日殿下被付以篤丸、入 御覽伊勢

両神宮警衛向、防禦臨機之所為は、精誠を尽し候様可仕
儀申迄も無之候処、於 朝廷茂神廟御崇奉之御事は、格

別ニ被為在候ニ付、常々御欠典無之様願ハ敷、就而は、

齋宮之御儀は大神宮祠相建候より千三百余年之御盛挙ニ
被為在候処、建武以来御荒廢と相成、其後五百年來唯今
之姿ニ成行候段、実以敷敷事ニ奉存候、左候迎、速ニ御復
古と申御訳ニは難被為至哉ニ候得共、近来 山陵御修補
之儀も被 仰出候折柄、猶更 太神宮格別之御事故、如
往古 齋宮御再興之程、幾重ニも相願度奉存候、於御当
地一条様茂御同志之由ニ而、私宿志と符合仕候段、喜躍
之次第ニ付、近日一条様御面接之上、別段申上度候故、
兼而此段御聞置奉願候事、

戌十一月
藤堂和泉守

十一月廿七日伺定、廿八日武伝より達

帝都警衛之儀、大意 言上有之、 御満足御事ニ候、猶
可然深考有之候様被 思召候、且於 伊勢両宮茂防禦兼
被惱

宸襟候、於藤堂は同国之儀、此上以精誠敵重ニ相整候様

頼被思召候、仍御暇被 仰出候事、

十一月

今度攘夷之 勅詔被 仰出候処、对州之儀 皇国両辺之
要害ニ付、乍恐於 朝廷格別御念被為入、国政之得失并
士氣之振否、尊藩江御取糺之上、攘夷之 勅詔可被成下
置 御内慮御書達拜見仕、武門之面目宗家之規模、重疊
難有次第奉存候中、深奉恐入候仕合御座候、国事多難之
次第は、追々奉入御聞置通之儀御座候、然処、对馬守様
御事御病氣ニ付、御一己之御勤向不被為届、既ニ御隠居
御決定ニ相成、去朔日御内密書被差出置候処、去十二日
井上河内守様より御先手御呼出シ相成、表向御願書被差
出候誓詞判元御見届として、对州江御目付可被差下段御
達ニ相成、今程定而御願書御差出ニ相成居可申哉、御病
症可被得止御隠居御願出之只中、善之允様御家督御相統
(不カ)
前、御内勅被成下置候時は、先遵奉之当主不足ニ相当、
甚以不安次第奉恐入候、至極之場合ニ御座候条、於尊藩

深被為尺御懇評、何卒奉戴

朝命、皇国之御武威ヲ不奉汚、社稷安堵之道ニ至候様
御指揮、伏而奉願上度、尤武備行届不申次第、国事之情
実は別紙之書取奉入御覽候、此段可然御披露奉頼候、以
上、

十一月

对州之儀は、絶海之孤島異国之渡口にして
皇国之出丸前備共可申要地ニ付、往古より城壘烽侯(候)之設
防人戎兵手厚ニ備被為置、粮米之儀も年分肥筑豊前後六
州より致運転、嚴重之御守備相立居候次第、正史ニ相見
へ、其後对馬守先祖、对州地頭職ニ補任せられ候以後も
肥筑豊三州之内数郡を領_{石高今ニして}
_{廿万石領居候}
藩屏之守備随分ニ相整、文永・応永年間外夷拾余度襲来、
手痛致防戦、終ニ一度も勝利を失ひ御国威を汚候儀無御
座、一州之守禦先ツは全備致居候事之由ニ御座候得共、
其後追々之国難、無余儀肥筑豊之旧領全手離、麾下之諸

士郎等不殘、纜一島之内ニ屏居致候様成行、夫よりして
 年来之糧難中々以一朝一夕之故ニ無御座、數百年來之間、
 事長之儀ニ付多端不奉煩 御聽候、右様之勢ニ而、漸々
 今日ニ押移候処、元來不毛同様之土地柄、一州之生穀一
 州三分之人口を茂難得養、纜肥筑之領所些少之収納米且
 海漁之浮利為主所、朝鮮國貨易之利潤を以米穀ニ換、乍無
 念食を異邦ニ仰キ、多年之間不束之取凌有之候処、時変
 ニ隨、朝鮮貨易之道茂断絶同様之姿ニ至、終ニ今日家中
 之扶助撫育も手届兼候程之難迫、役筋之者共種々心膽を
 碎候而も眼前之急ニ被追、守辺之実備難相立、苦心此事
 ニ奉存候、偶以前より備を相立候も多有名無実之儀ニ
 而、方今万国之兵勢一變、船舶盛行之時運ニ至候而は、
 難取用筋而已申サハ、備向無之も同様之姿ニ而、如何ニ
 も寒心不安次第奉存候、既ニ一昨年来、外夷教度之淀泊
 国中之疲弊ハ素、国体古今之情実を顯し、何地迄も
 御國威相立候様、御英断之御指揮、追々幕府江建白ニ及
 候得共、今以何等之御沙汰も無御座、然ル処、當時宇内

之形勢一變、攘夷御一決之

勅諭ニ至、左候得は、天下之人心今日より戰鬪之覚悟ニ
 不至候而難叶、弥兵端を被開候ニ到候而は、第一其忠害
 を請候は対州ニ相見、爰ニ到六百年来之旧領君臣、世守
 之大義ニ厚キ身を以、国ニ殉、

神州之御為、宗氏之存亡相厭可申様無御座、州中之人種
 尽候限は何地迄も 御國威を不汚之覚悟勿論之儀ニ御座
 候得共、乍恐公を以

皇國之御為相謀候ニ、一州之微力十分勝算無覚束、決而
 有之間敷儀ながら、万々一対州之地、醜類蹄を容るゝ之街
 と相成、鬪國之咽喉を扼し、韓土之糧食ニ抛、内地を席
 卷する之勢ニ到候ハ、忽天下之御一大事と罷成、大切千
 万之御事ニ奉存候、右様枢要之地位ニ罷在、武備手薄成
 は不及申、平時は雖國本、穀貨出入之算計不相中、剩戰
 國ニ生食を異邦ニ仰候は、乍恐 神州之御名節 御國威
 ニも相抱、於大義難安ハ素り、今ニも異変相生、一旦海
 路相塞候日々至候節は、州中眼前飢餓之憂ニ迫り候は必

然之儀ニ而、一国之命脈実ニ朝露之危ニ等敷、千載之遺憾、此一儀ニ奉存候、是等全以前より勢之不得止ニ出候儀ニ御座候処、果而貨易之盛衰ニ依り、州中平常之取凌も不行程之國勢ニ及、畢竟従来國本不相立、因循苟且今日ニ到候段不覚悟至極、一國ニ王たる者、可恥之限ニ候得共、其恥辱を相包、此上恥辱ニ勝り候一天下之御大事を引出候而は、乍恐

天朝江奉対不忠之至、恐怖不少儀奉存候、就夫往時之過は、如何様御譴責を奉蒙候而茂、何分唯今之姿ニ而一日片時も難相過、是非國体古今之情実貫徹致し、神州之大儀 御名節永普天之下 皇化之及処、寸地と雖、渠之輕蔑を受、益 御威徳相願(願カ)、此場対州之地位を以、実備之算策を天下之公論ニ御打出被成下、公明正大之御廟謨ニ随、奉戴 朝威候而、一國之人心致奮興、海防之敵備速ニ相立、天下之先陣ニ相進候心を以、此上 神州之御威光不奉汚候様、御賢明之御指揮奉仰度、伏而奉希上候、

右は此度攘夷之 勅諭ニ依、対州之情実御親藩之御詔を以、尊藩江御取糺ニ相成、不願恐、国体之大略口上書取奉添御聴候、書中不敬不遜之文言等、可然御海怨被 仰付被下、此場 皇国之御為御配慮奉蒙度、幾重ニも奉願上候御事、

十一月

対州之儀取糺被申出候処、本邦第一之要地、守辺之専務因循之所置無之、頻急

勅定遵奉ニ到候様有之度、且食を異邦ニ求候次第弥 御不安心ニ候、猶此儀は薩土阿藩江茂申合、早々御安堵之道周旋有之度、被

思召候事、

十一月廿七日殿下桃花中山家等江差出

伊勢

神宮警衛向防禦臨機之処は、

精誠を尽し候様可仕儀は申迄も無之候処、於
朝廷

大廟御尊崇之四年は格別ニ被為候脱字アラシニ付、常々御欠典無之

様願敷、就而は

齋宮之御儀は

崇神帝之御代、以

皇女豊歙入姫命、神宮江奉齋被為在

後醍醐帝迄世々御連綿被為在候処、其後中絶荒廢ニ及、

只今之姿ニ成行候段、実ニ以歎ケ敷御事ニ奉存候、然ル

処、

山陵御修補之儀茂被 仰出候折柄まで、当節攘夷之儀、

格別

叡慮被為在候ニ付、御再興ニ相成候、

大廟御尊崇之御儀ニ被為叶、且攘夷御祈ニ茂可被為成、

乍恐奉存候、然処此度、

齋宮御再興之義 一条殿より相伺候、依之高猷領国之内、

荒地新田ニ開發仕、且御調度も追々相弁候様仕度奉存

候、右開発場所繪図、一条殿江向指出置申候、何条

齋宮御再興之義速ニ蒙 勅許度奉願上候事、

戌十一月廿七日

藤堂和泉守

高猷判

同日武伝披露

今般淡路守上京之儀、奉蒙 仰難有仕合奉存候、則今日

京着仕候、依右御案内使者を以得貴意候、以上、

十一月廿七日

松平淡路守使者
岩田七左衛門

同日武伝被達松平淡路守江

今般以 勅使攘夷之事、被 仰出候ニ付而は、諸般江漏

聞難計

帝都非常之御備之儀、同関東江被

仰出候、右等之御時節ニ付、暫滞在有之候様、被遊度

思召候事、

十一月

戊十一月廿七日殿下江申入伺定、翌廿八日 勅使江出ス、
阿州平瀬所兵衛江相屬、

松平容堂上京之事、先達 御沙汰之趣も有之候得共、今
暫在宿周旋有之、明春大樹上落之砌、上京可有之様被遊
度 思召候、猶土佐守は 勅使隨從上京可有之 御沙汰
之事、

十一月廿八日自当番一条家江被達

諸大夫宛 齋宮御再興被為在候は、可有周旋由言上候趣被 聞食、

御満足御事ニ候、万事程能相調候は、御再興被為在度

叡慮候間、宜周旋有之度被 思召候事、

十一月

本文条、関東江茂申入可有之事、

十一月廿九日武伝江差出

今般 私儀御暇之蒙 仰、其上

神廟警衛被 仰付、難有仕合奉存候、就而は帰国之砌

兩宮江参詣、右 仰之趣、祠官之者江吹聴仕、御警衛向
之儀を示談ニ及ヒ申度存意ニ付、此段奉伺候事、

十一月

藤堂和泉守

同月廿九日夜、藤堂江武伝より再答

今度 神宮御守衛被 仰付、畏御受申上候ニ付参宮、右
祈誓申上、尚又祠官等江茂吹聴申合仕度段申上候ニ付、
御許容、

十一月廿九日夜自一条家被付

今般 齋宮御再興ニ付而は、御旧地辺領分入交候得は、

其向々江相心得候様仕度、尤古今之調合旁以早卒從 御

所関東江御通達被為在度奉存候、此段御模通ニ付、乍恐

奉仰願候、右之趣宜御執成之程奉願上候事、

十一月廿九日

藤堂和泉守

右一紙

高猷判

天照大御神兼蒙警衛向、同国ニ茂有之、今般攘夷之儀、

叡慮被為在候ニ付

齋宮御再興之御事

大廟御尊崇之御儀ニ被為叶、攘夷御祈ニも可被為成奉存候、右御再興ニ相成候は、調度等追々周旋仕度件ニ建白仕候処、達

叡聞御満足ニ被為 思召、宜周旋御再興可仕候様、

叡慮之御事、就而は、

勅諭左大臣様を以御下ケ渡ニ相成候、冥加至極難有仕合奉存候、猶此段關東江茂御達置可申旨奉畏候、右御請奉申上候事、

右一紙 十一月

藤堂和泉守
高猷判

手扣

左大臣様江 齋宮御再興被為在候は、周旋可仕由言上之趣被 聞食御満足被遊、万事程能相調候ハ、御再興被在度

叡慮候間、宜周旋仕候様被 思召候旨、御達被成下候趣

敬承仕、誠以難有仕合奉畏候、猶右之段、關東江茂御届

可仕旨茂奉敬承候、右御請御礼以使者申上候、

右一紙

從

京都被 仰合候 勅書之通、遵奉致候付、猶又宜敷是

迄段々周旋大義ニ存候、

別紙ニして

一 御赦宥之儀、 勅諭通り国事之為罪禍ニ罹り候者は、

一人も洩なき様、列藩江茂相逢候間、取調之上御沙汰

可有之候事、

一 尾張大納言殿国事政務方御取掛之義は、御直ニ御沙汰

有之候事、

一 攘夷之 叡旨遵奉之儀は、委細 勅使江御答可有之候

事、

右於關東、毛利長門守江御達相成候旨ニ而、過日右

藩前田孫右衛門持參、

私儀今般格別之以

御憐有奉蒙、御寛免候而已ならず、当今、御国家之安危此時ニ候間、精忠尽力仕候様、奉蒙

朝命、徹骨髓難有仕合奉存候ニ付、何卒滞京、微力相応之御用度相勤、尽力仕度段奉歎訴候処、未何等之御移も無御座奉恐怖候、退而尽力之仕方、朝暮苦辛勤考仕候処、

朝廷御守衛之義は、御近国之諸藩兼而之御規則茂有之別而薩長土之三藩、列国ニ勝レ御守衛仕候上は、小藩之私差寄為何御用度も被為在間敷欵、実ニ微力不及是非次第、心外至極ニ奉存候、乍併報国尽忠之赤心ニおひてハ、何分難黙止、愚衷之趣左ニ奉申上候、

一京都之地勢ハ、四面ニ高山聳ヘ、土地甚狭隘ニ御座候故、都下之食料其外諸物、多分他国ニ採用候事ニ而、其内船ヲ以て運漕仕候は、唯大坂口之一方而已ニ而、

其他之口々ハ、皆人車之力而已ニ御座候故、戸口ニ応シ候而は、諸品不相応ニ払底故、凶荒等之節は、勿論平常迎茂諸色全少高価ニ相成、上下一同難渋仕候哉ニ承知仕候、且近来は世上不穩候而、諸藩御警衛之人数、多分ニ在任仕候得は、此上諸色全少高価ニ相成候義、必然之勢ト奉存候、且又外夷掃攘之勅、御下シ相成候ニ付而は、外夷共何時内海ニ乗入、大坂之近海騒擾紛乱仕、運漕閉塞ニ及候哉茂難計、右様相成候ハ、京地御守衛之人数は日々相増、運送は不足必至ニ差支、食料薪炭一時ニ全絶、樞要之皇都第一ニ上下騒擾、居民離散、外寇僅來候得は、内乱忽ニ生候義ニ茂至リ、不容易御大事ニ及可申哉ト痛心大息仕候、依之都下運送之便利御開キ被遊候事、当今緊要之御急務ト奉存候、右ニ付愚考仕候ニ近江国滋賀之湖水は、東北諸州之運送便利之場ニ而、右之湖水より京都加茂川迄、山を隔候事大凡二里余ニ而、手遠ニ御座候故、比叡山之谷間岩間を堀割候而新溝を通シ、船路御開キニ相成居候ハ、

、治平ニは諸物豊饒ニ相成、上下安堵可仕、万一大坂口閉塞仕候而茂、東北諸国之船路開居候時は、俄ニ食料諸物等之不足茂憂へ申間敷奉存候、就而は、右之一挙は京都治乱共御守衛第一之御儀、兵道実備之一端と奉存候、乍去大和之有所ハ大害も從ひ候事有之、或小氏は利害分明ニ会得仕兼、或自己之小得失より種々故障申出候義茂難計候間、御開之上、一兩年茂利害御試ニ相成、若害ニ相成候事御座候ハ、御廢シ被遊候而茂不苦奉存候、左候ハ、乍恐 御所御要害之一助ニ茂可相成哉、此義往々議論仕候者茂御座候趣伝承仕候、依之万一右之事御採用ニ相成候義ニ御座候ハ、開鑿之御用、私一手を以尽力仕、無量重大之 朝恩ニ奉報候一端ニ茂仕度奉存候、乍併土地之形勢、水之利害得失之有無、惣而実見不仕候義ニ付、龜忽ニ取掛候義は難相成候間、不苦義ニ御座候ハ、其筋之蒙 御免候而、地理之様子得と見分、高低等測量仕候上ニ而兎も角も決定奉願度奉存候、尤弥以右之事出来可仕ニ

決議之上、願之通奉蒙 御免候而茂、其入費数万金ニ至候而は、薄録之私、殊ニ近年勝手向急迫ニ罷在、不任心底ニ義ニ御座候間、其期ニ至り候ハ、何分可然御処置被下置候様奉願置候、此儀今より申上候段は、実々心外至極ニ奉存候得共、国力衰弊仕候而も不本意之義ニ付、此段 御仁恕可被成下候、且又右通船之義難出来筋ニ相決候ハ、其他 御所向御要害、又は何等之御普請、或は道途之御修覆等、聊ニ而茂 朝廷御都合相成候御用度、被 仰付被下置候ハ、重々難有仕合奉存候、固り大非常之御時節ニ至り候ハ、挙国以死御奉公仕候義は、兼而覚悟仕候義ニ御座候得共、方今如何様と欽尽力不仕候而は、何分赤心不易奉存候ニ付、前段心付之俛、御内慮奉伺候義ニ御座候間、鄙衷 御推量被成下、可然 御下知被成下置候様、奉冀願候、以上、

十一月廿八日

中川修理太夫